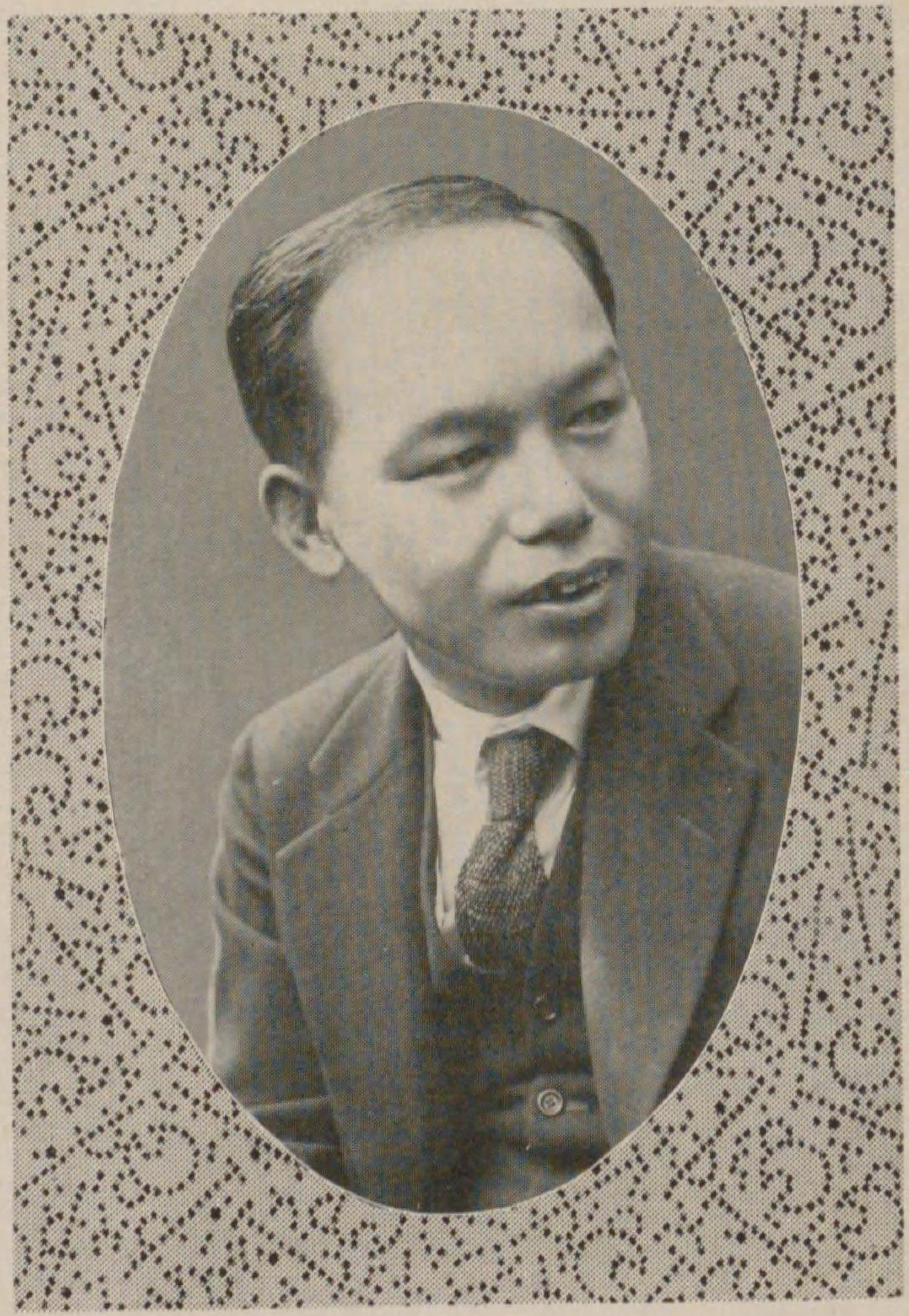
569-167
1200502071833

日本探偵小説全集

2

森下雨村集

改造社



著者

目次

消えたダイヤ……三
黄龍鬼……二四〇
魔の棲む家……三五〇
死美人事件……三九九

569
167
國立國會圖書館藏書
I種
W
1200502071833

消えたダイヤ

發端

大正××二月十七日午後二時。
場所は敦賀港外、一浬の沖合。
時ならぬ大濃霧に襲はれて針路を失ひ、暗礁に乘り上げた浦鹽敦賀間の定期船鳳榮丸が、船底に大破損を生じて、今や危ふく沈沒せんとしつゝあつた時、
船內に起る悲鳴叫號！
逸早くも卸されたボートを目がけて、甲板に馳せ集つた多數の乘客を、船員達は必死となつて整理しつゝ、先づ纖弱い女子供から、漸次救助につとめてゐた眞最中——夫や父に取縋る婦人達、わが子を抱へて泣き叫ぶ母親——、凄慘見るに忍びがたいそれらの人々から離れて、たゞ一人、甲板の索綱に摑まりながら立つ洋裝の少女があつた。年齡は十六か七。恐ろしい死の瞬間を

前にしながら、その顏に恐怖の表情は微塵もなく、寧ろ悲壯なほども嚴肅な面持をして、うろたへ騒ぐ人々の狀を、泰然として見詰めた崇高さ！

「失禮ですが！」

彼女は背後に聲を聽いて、つと振向いた。と、そこに見上げるばかりの背の高い紳士が彼女を見下ろして立つてゐた。土のやうに青褪めたその顏。額を流れる玉なす冷汗。それは抑へがたい心の惑亂と恐怖を語つてゐる。

「何か御用ですの？」

紳士が何か言はうとして、ためらふ樣子を見て、彼女は靜かに訊き返した。

「さうだ、やつぱりお頼みする他はない！」紳士は低い聲で云つた。「女の方でなくては駄目だから——」

「え？」

「この場合、助かる望みのあるのは婦人と子供だけです。」彼は四邊を見廻して、一層低聲になりながら「實はこゝに大切なものを持つてゐるのです。何十萬圓もする貴重品です。これを海の底に沈めたくありません。あなたにお頼みすれば或は助かるかと思ひます。どうでせう、預つてくれませんか？」

「お安いことでございますわ。お預りしませう！」

彼女は片手を差出した。

「だが、待つて下さい。僕は誰にも後を尾けられてはゐないと思ひますが、それも分つたことではないのです。もし誰か僕を尾けてゐる者があるとすると、或は多少の危險が伴ふかも知れません。」

「大丈夫ですわ。こゝで死ぬと思へば！」彼女はにこりと微笑んだ。「でも、それを持つて無事に上陸したとしても、それから如何したらいゝんでございますの？」

「新聞——東京朝日の廣告を見てゐて下さい。T・Mといふ名で廣告を出しますから。もし一週間過ぎてもその廣告が出なかつたら、あなたの方で廣告してXYZといふ人間を搜して渡して下さい。解りましたね？」

「承知しました。XYZでございますね？」

「左樣です。では、これを——」中に何が入つてゐるか、少女の手に鞣革の小さい嚢が渡された。と、一緒に紳士は大きな聲で云つた。

「さあ、早く乘るんです！　ぢや御機嫌よう！　お大切に！」

少女は急いでボートに乘つた。

悲壯な萬歳の聲！

鳴り止まぬ救助信號の汽笛！

その間にも、汽船鳳榮丸の運命は刻々と迫りつゝあつた。

はね子と茶目吉

「ほんとに珍しい人に會つたわ。」
「まつたくね。はねちやんにこんなところで會はうとは思はなかつたよ。」
「いやだわ、はねちやんだなんテ。もうはね子さんでもないわよ。明けて十七――」
「番茶もでですかね。」
「馬鹿ね！　何時まで茶目吉なの、この人は……。」
銀座二丁目の南側、カフェー「北國」の書房にテーブルを圍む青年と少女。年頃も同じなれば、容貌も見た目には兄妹かと思はれる程、すつきりとした面長の顔。
一方はちと生意氣に見える背廣姿、一方は耳を隱さぬ耳隱しに華美な銘仙の上下。
「で、はねちやんはやつぱり學校へ行つてるの？」
「もう濟んだのよ。この三月に――」
「ほう、ぢや若い職業婦人が一人殖えたわけだナ。それで今何處へ勤めてる？」
「いゝえ、あたし職業婦人だなんて云はれるのは嫌だから、月給なんかもらはないつもりよ。」
「すると親父の臑かじりか？」

「さうよ、あなたと御同様――」
「こいつあ一本參つたね。しかし、僕も此頃何かやつてみたくなつて來たよ。」
「感心ね。で、どんな仕事をしてみたいの？」
「やり甲斐のある素敵な仕事なら、僕何でもいゝんだ。」
「さう、ぢや二人で始めませうか。」
「えゝ、二人で？　何か面白い仕事があるの？」
「あるか無いか、搜してみなくては分らないわ。搜してみて素敵な仕事が見附つたら、二人で働いてみてもいゝぢやないの。」
「それは大賛成だ。でも、どうしてその仕事を搜すの？」
「廣告すればいゝわ。新聞へ――ペンと紙をお持ちでない？　男の方はよくエバー・シャープなんてものを持つてるわね。」
青年が萬年筆とメモの手帳を取出すと、
「さあ、何と云つて書けばいゝかしら、……あゝ、宜い文句があるわ。これなら如何？」
「職を求む――二人の若き冒險家。種類の何たるを問はず平凡ならざる職業を欲す。派遣出張素より可。但し高給を望む。」
「ね、これなら宜いでせう。初めから、高給といふことを、はつきり斷つておかなきや駄目よ。」

「面白い！　平凡ならざる職業つてのがいゝね。氣に入つた！　よし、早速廣告を出さう！」
「人が讀んだら、何と思ふでせうね？」
「凡人の眼にはまあ狂人か、精々で氣紛れ者と見えるだらう。しかし廣い世間だもの、一人位具眼の士もあるだらう。」
「それや有るわ。ぢやほんとに出してもいゝの？」
「ほんとさ。戯談に職業を捜してゐるんぢやないんだ。僕が持つていつて、明日の朝日の夕刊へ出さう。」
「さう、ぢやあなたにお頼みするわ。」
「宜し引受けた。が、もう八時過ぎだね。僕はまだ行かなくちやならん處があるから、これで失敬しよう。」
「さう、あたしもまだ買物をしなくちやならないから――」
二人は勘定をすまして外へ出た。
「新橋の方へ行くの。では、このまゝお別れね。すると今度は何時何處で？」
「さうね、明日の正午に東京驛の食堂はどう？」
「えゝ、結構。ではさようなら。」
「さよなら。」

二人は右と左に分れた。八時とは云へ、銀座はまだ宵の口、いはゆる銀ぶらの連中が、飾窓や夜店をのぞきながら、ぞろぞろと歩いてゐる。
その中を縫うて、尾張町の角を數寄屋橋の方へ五六間も來た時、少女はつと足を止めて振返つた。
「モシ〳〵、ちよつとお話をしたいんですが。」
聞き馴れぬ男の聲。
「わたくしですの？」
彼女は云ひかけて躊躇つた。四邊に誰も人はゐない。恐らく自分のことゝは思ふが、こんな場所で見知らぬ男から呼びかけらるゝ筈がない。
「御免下さい、お呼び止めして。」
踵を返す閑もなく、再び先方から聲がした。往來でだしぬけに人を呼び止めるなんて嫌な奴、知らん風してそのまゝ行つてしまひたい。が、眼前僅か一歩のところに、面と向つてその人を見ては、さうした仕打も出來かねる。彼女はぢつと相手を見た。洋服姿の見るからに堂々たる無髯の紳士。但し眼の細りとした何となく狡猾さうな顔貌。何だか感じの惡い紳士である。
「何か御用ですの？」彼女の聲には隙がなかつた。
「實はその――」紳士の顔に微笑が見えた。「カフエー「北國」で、あなたがお知合の方と話して

ゐられたのを、隣にゐて聽いたんですが。」

「それで何か御用がおありですの？」

「さうです。お話を偸聞きして、思ひついたんですが、あなたの御希望のやうな仕事が一つあるんです。」

おやおや――彼女は思つた。もう仕事の口が見附つたのか？　それにしても少々話が早過ぎる。

「それで、わたしを此處まで追つかけていらしつたんですか？」

「まあ、さうなんです。失禮でしたけど、あすこでお話も出來なかつたもんですから。」

「で、その仕事といふのは何でございますの？」

紳士はそれには答へず、衣嚢から一葉の名刺を出して、彼女の手に渡した。

見ると南米產業協會々長の肩書、名前は內海作藏、その左下に丸の內ビルディング四二七號室とある。

「明日の午前十一時に、事務所の方へ訪ねて下さると、仕事の內容について詳しいお話を申上げます。」

「十一時でございますね？」

「さうです。午前十一時です。」

考へるまでもないこと、彼女は即座に心を決めた。

「よろしうございます。きつとお伺ひします。」

「有り難う。では又明日。」

帽子をとつて會釋すると、紳士はくるりと足を返した。雜沓に消えてゆくその後姿を、ちつと見送つてゐた少女の瞳が、急に生々と輝いた。

「もう冒險が始つたわ！」彼女は思はず呟いた。「どんな仕事かしら？　何だか感じの惡い人だけど、恐れることなんかありはしない。どうせ職業が面白くて、お金さへ儲かればいゝんだもの……

……」

彼女は二歩三歩、歩きかけて、ふと後へ引返した。そして電車線路を橫切り、木村屋の筋向ふ、銀座郵便局へ入つて、頼信紙を取ると、

コオコクミアワセヨ　イサイアス

と短い電文を認めて、電報係へ渡した。

不思議な會見

翌の日の午前十一時。

かつきりと約束の時間に、彼女は昨夜のまゝの服裝で、丸ビルの昇降機を四階で降りて、四二

七號室、南米産業協會と金文字で書いた扉の前に立つた。

訪ふと中から應への聲、彼女は把手を捻つて中へ通つた。碌々掃除もしないらしい薄汚い前室。

「内海さんに御面會のお約束があつて伺ひましたが――」

すると、卓に凭かゝつてゐた眉根に大きな黒子のある三十五六の事務員が、椅子を離れて、「どうぞ此方へ！」と次の室の入口に案内して、扉を開けると、自分は傍へ身を退いて、彼女を中に招じ入れた。

書類を一ぱい取り散かした事務用のテーブルに向いて腰かけた人、昨夜の第一印象よりは、やや痩形の感じはするが、正しく内海氏に相違ない。他には誰も人は居らぬ。

「あゝ、いらつして下さいましたね。」内海氏はちよいと面を上げると、目の前の椅子を指して、

「さあ、どうかお掛け下さい。」

さう云ひつゝも、少時の間、散かつた書類をひつくり返してゐた主人公は、やがて無雜作に書類を片方へ押しやりながら、

「さて、それではお願ひしたい用件を申上げることにしますかナ。」と椅子をぐつと引寄せて、例の感じの悪い微笑を見せ、

「あなたは、何か變つた仕事がしてみたい、そして高い報酬が欲しいといふ御希望でしたね。では、先づその報酬の點から取り定めてゆきませう。失禮ですが、月三百圓で如何です。」

これなら不服はあるまいと言はんばかりに、主人公はぐつと椅子の背に凭れかゝつた。

「報酬は仕事の種類によりますから、先づどんな仕事か、それから伺ひませう。」

「仕事の種類？　それは樂なもので、お金を使つて、旅をすればいゝんです。」

「旅つて、何方へでございます？」

「關西です――關西も京都から北陸へかけてです。」

「たゞ旅をするんでございますもの？　それで三百圓もいただけるなんて、何だか變ですわ？」

「いや、多少の條件はあるのです。途々病院や癲狂院といつたやうなところを訪ねて、或る人を捜してゆくといつた風の――」

「人を捜すんですか？」

「さうです、行衞不明になつた人を、寫眞を便りに捜してゆくんです。御承知下さるでせうね？」

「さあ、お引受けするか如何か、それは笹井と相談をしてみなければ、御返答が出來ませんわ。」

「笹井といふと？」

「わたしの仲間です。昨夜一緒にゐました。」

「あゝ、あの青年ですか。あの人に用はないのです。」

「それでは御話を承るまでもありませんわ。わたし達は一緒に仕事をする約束なんですから。」
彼女はついと椅子を立つた。成り立たぬ相談は此方から御免を蒙らうといふのである。
「まあ〳〵、さう慌てたものでもない。何かそこに妥協の途があるでせう。まあ、お掛けなさい、――あなた――」
主人公内海氏は彼女の名を呼ばうとして、引つかゝつた。
「さう〳〵、まだお名前を承つてゐませんでしたね。誰人と仰有るんでしたつけ？」
「わたし、小花百合子と云ひますの。」
「えゝ！　小花百合！」
内海氏は、何に驚いたか、豆鐵砲を食つた鳩のやうに口をあんぐり開けたまゝ、眞蒼な顏をして言葉もない。
「き、君は、ひ、人をからかひに來たんですか？」
顫へる聲、急に打つて變つた言葉の調子。その樣子が尋常事とは受取れぬ。
「事情を知つてゐて、からかひに來たんだらう？　守島の手先になつて。」
「いゝえ守島なんて方は知りませんわ。」
何が何だか解らなくなつて來た。でもそこには何がな深い事情がなければならぬ。
「あなたは僕のことを、どれだけ知つてゐるのです？」

いくらか聲が元の調子に戻りかけた。
「何も知りませんわ。昨夜始めてお目にかゝつただけですもの。」
「いや、それであの名を知つてゐる筈がない――」
「でも、小花つて、わたしの苗字ですわ。」
「苗字は小花かもしれん、しかし姓も名も同じ人間が、二人もあるべき筈がないのだ……が、守島を知らんといふのは、確かに事實ですね？」
「知るものですか！　わたし聞いたこともない名前ですわ。」
内海氏は頸を傾げた。僞りとは聽えぬ少女の言葉、でも、何處までそれを信じていゝか半信半疑の態らしい。
その折も折、扉が開いて、先刻の事務員が電報を持つて這入つて來た。内海氏はそれを受取ると、急いで電文に目を走らした。と、また見る〳〵内に、その顏色が變つて來た。
「石井君、よし、判つた。大丈夫だよ。」
石井と呼ばれた黒子のある事務員が匆々として部屋を去ると、内海氏は少女の方へ向き直つて、
「今日は少し忙しい用が出來たから、御面倒でも明日今一度來ていたゞくことにしませう。やはり今日位の時刻に……お友人の方を御一緒にお伴れ下さつても宜敷いんです。いや、さうして頂

く方が話が取定め易いかも知れません。」

「それではまた明日お訪ねすることにしませう。御免遊ばせ――」

冒險はこれから

「ほう！　そいつは面白いや。それから如何したつて？」

「如何したもないわ。笹井さんといふ仲間があるから、一人でなら御免だと云つて立ちかけたの。すると逃げられると困ると思つたか、慌てゝあたしを引止めにかゝつたのよ。その時、ふとあたしの名を呼ばうとして、引つかゝつちやたの、そしてね、改めてあたしの名を訊いたんだから、あたし學校でお芝居をする時によく使つた小花百合子つて、出鱈目の名を云つてやつたの。」

「へえ、吉井咲子が小花百合子になつたんだね。」

「さうよ、相手が何だか分らないんですもの、本當の名なんか云ふものですか、すると如何でせう。急に顏色が眞蒼になつて、ぶる／＼慄へ出したぢやありませんか。そしてね、人をからかひに來たんだらうとか、事情をどれだけ知つてゐるんだとか、びく／＼びく／＼しながら、いろんなことを訊くんですの。そしてあたしが呆けた顏をして、小花つて自分の本名だと云つてやると、同じ名前の人間が、二人もゐる筈はないと云つて、考へ込んでるところへ、恰度、電報が來たので、また明日會はうといふことになつて、あたし歸つて來たんです。

「怪しいなあ、どうも――」

「怪しいわ、まつたく。で、あたしの考へでは、小花百合子といふ女があつて、その人が何か内海といふ人と重大な關係を有つてるに違ひないと思ふわ。」

「無論さうだよ。でも、守島といふのは何だらう？」

「それもよく分らないけど、話の樣子ではあたしを守島の手先か何かのやうに疑つてゐたんだから、どうせ敵役に違ひないわ。」

「何にしても、内海といふ男には、何か大きな祕密があるね。」

「さうよ、きつと左樣よ。だから面白いと云ふんだわ。」

「面白い、明日になると、もつと面白くなる！　ぢや、十一時に白木の賣店の前で會ふんだね？」

「少し早目よ、五分位。でも、紅茶はもういゝの？」

「結構、咲ちやんだつて三杯も喫んだぢやないの。」

「さうかしら、話に夢中になつて、何杯喫んだか忘れたわ。では、そろ／＼出掛けませうね。」

* * *

きちんと約束のとほり、十一時前五分、笹井と咲子は白木屋の賣店の前で落合つた。そして昇降機で四階へ、案内知つた四二七號室の前に立つた。

「コツ／＼！　コツ／＼」

叩をしても返事がない。二度三度、繰返しても同じこと。折柄、廊下を通りかゝつた事務員風の男が、

「南米產業の人に御用ですか？」と親切に足を止めて聞いてくれた。

「えゝ、內海さんにちよつと用があるんですが——」

「內海と云ふ人は知りませんが、南米產業なら昨日の夕方何處かへ引越してしまつて、そこはもう貸室になつてゐますよ。」

「さうですか！」これは意外、今日の再會を約して置いて、その口の下で引越すとは……。「で、何方へ引越したか、分りませんでせうか？」

「知りません、何しろ急なことでしたからね。」

「いや、どうも——では咲ちやん、行かう！」

二人は足を返して、街路に出た。

「少々呆氣なかつたね。」がつかりしたらしく笹井が云つた。

「ほんとだわ、こんなに急に引越すなんて、あたし昨日少しも氣がつかなかつたわ。」

「まあ、いゝや。ちよいと馬鹿を見たと思へば諦めがつくよ。」

「諦めがつくんですつて？」はねちやんの眼がきらりと光つた。「あたしは諦めないわ。これからが始りぢやないの！」

「始りだつて、これからが？」茶目公の目も訝しげに光る。

「さうよ。これからあたし達のほんたうの冒險が始るんだわ。內海といふ男が、何故突然姿を晦したか、どんな祕密を有つてゐるのか、また小花百合子といふ女と、どんな關係があるか、それを調べて見なくちやならないわ！」

「調べれば面白いに定つてるが、それを調べる手懸りが無くなつたぢやないか。」

「いゝえ。ちつとも無くなりはしないわ。だから、これから冒險が始ると云つてるぢやないの。またペンを貸して頂戴。えゝ、有り難う。ちよつと待つてゝね。——これで宜いわ。」

咲子はペンを返すと、紙片の上に書いた文句を滿足氣に讀み返して、

「ね、これで宜いでせう。」

「何を書いたの？」

「廣告よ。」

笹井は咲子の差出す紙片を取つて、聲を出して讀み下した。

——小花百合子なる婦人につき、お知合の方の御通信を乞ふ——　（姓名在社）

二通の手紙

問題は小花百合子といふ女性。

その女は何者か？　丸ビル四百二十七號室の主人公が、その名を聞いて、愕然として色を變へた理由は？　そして根掘り葉掘り、咲子に向つて、その女との關係を問ひ訊さうとしたのは何故か？

いづれにしても、不可思議なのはその女——小花百合子の正體を突きとめること——それは、軈て一切の祕密を明にすることである。

面白い！　事は平凡でない。いや、愉快な冒險だ！

その冒險の幕は、咲子の發案による新聞廣告の結果によつて、切つて落される。新聞へその廣告が出たのが昨日。今日は何かな耳寄りな通信が來べき筈。

「おや、もう十時だのに——」

咲子は讀みさしの雜誌を置いて、腕時計を見ながら呟いた。

そこは數寄屋橋際カフェー「あやめ」の一室。いよ〳〵冒險が始まるとなれば何處か便利な場所をと云ふので、かねて知合の女將に交渉して女中部屋の一つを使用勝手といふことで借り受けた急設オフイス。

やがて輕い叩音と共に扉が開いて、餘り晴れやかでない笹井の面が現れた。

「どうだつたの？」

「駄目々々。少々悲觀だ！　大枚五兩の金を費つてサ、たつた二通だ。」

「ぢや一通二圓五十錢の手紙だわね。」

「隨分高い手紙さ。」

「高くつたつて、材料になれば宜いぢやないの。開封て見て？」

「直ぐにも開けてみたかつたが、萬事協議の上といふ約束があるからね。」

「では、早く見せて頂戴！」

敏夫が新聞社から受取つて來た留置きの手紙を、內衣嚢から取出すと、咲子は引奪るやうに、それを取つて、

「こつちは高襟な宜い封筒だわ。筆蹟は若いのね。きつとお金持の息子さんよ。まあこれは後廻しにして、此方から開けてみませうね。」

「何が出まするか、お樂み！　ワン、ツー、スリー。」

「何を言つてるの、茶目ねえ！」

咲子の白い指が、封筒をびりツと破いた。中から取出された卷紙の文句は次のとほり。

　拜呈

今朝　新聞紙上の廣告の件に關し、至急御面談仕度く、就ては、失禮ながら明朝十一時に

拙宅まで御來駕を得たく希望仕候。拜具

西尾禮助

「小石川林町一〇八だわね。ぢや時間はまだ大丈夫――こつちの手紙は。」

二重になつた西洋封筒。氣持のいゝ水色の用箋に、簡單明瞭な文句。

御廣告の件について、御目にかゝりたいと思ひます。明日正午頃、お待受けします。

麴町區三番町七四　島田三千夫

「何方も會つて見なくちや解らないわね？」

「それや當り前さ！　大切な祕密を、先方からわざ〳〵教へて來る奴があるものか！」

「ぢや、直ぐ出掛けませうね。先づ小石川へ行つて、それから麴町へ――大變だわ、一時間で二軒廻るんだから。」

「仕方がないさ。乘りかゝつた船だもの！　さあ、行かう！」

二人は圓タクを飛して、先づ小石川へ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「どうかお樂に――私が手紙を差上げた西尾です。」

通されたは瀟洒とした日本間。待つ間もなく、頭の頂邊が大分薄くなりかけた四十前後の主人西尾氏が現れて、先づ初對面の挨拶が濟んだ。が、さてその後の言葉がない。餘りに相手が若者揃ひなので、ちと意外にでも感じたらしい樣子。

無言の數秒。遂々咲子が口を切つた。

「お手紙を頂きましたので、早速お伺ひいたしましたが、小花百合子さんについて、何か御存じですなら、承りたいと思ひます。」

「小花百合子？　ふむ！」西尾氏は忘れ物を思ひ出しでもしたやうな態度で、「一體貴下方は小花百合子といふ女について、どれだけのことを知つていらつしやるんですか？」

「私の方では何にも知らないんで厶います。」咲子が答へた。

「いや、何も知らんといふことは無い筈ぢや。旣に新聞へ廣告を出された以上、何かは知つてゐなければならん。どの點まで御存じですな？」

西尾氏は身體をぐつと乘り出して、返事を聽かうと待ち構へる。少々事は意外になつた。木乃伊取りが木乃伊になつたやうな形だ。

「尤も此方が何にも云はんで、話せといふのも無理ですがね。私はまあ西尾禮介といふことにしといて下さい。それで通つてはゐるんだから。こゝは私の從妹の家で、內密の仕事をする場合に

は、何時もこゝへ來てるんです。私のことは、それだけで宜いでせう。それで今お訊ねしたことは、誰方がお答へ下さるんです？」

何處となく優しみをもつた威嚴のある聲、二人は顏を見合した。

(云つちまひな――仕方がないぢやないか！)

敏夫の目がさう云つた。でなくとも、のつぴきならぬ場合である。

「ぢや、すつかりお話しますわ。」

咲子はカフェー「北國」の會合から、丸ビル四二七號室の一件まで、事細に説明した。マドロス煙管を手にもつて、口許に微笑を浮べながら、聽き入つてゐた主人公は、咲子の話が終るとにつこり笑つた。

「面白い！　愉快ですな、確に――ところで如何でせうね。あなた方のその冒險倶樂部は、相當の報酬を拂へば、僕のために働いてもらへないものでせうかね？」

二人はまた顏を見合した。咲子の眼はキューピーの眼球のやうにまん圓くなつてゐる。

「働くと云つて、どんなことをするんです！」

「今の仕事を續けてもらへば宜しい。つまり小花百合子を搜し出すんです！」

「でも、小花百合子つて、一體どうした方なんですの？」

「數十萬圓の寶を持つて、行方不明になつた女です！」

「えゝ！」

二人は思はず異口同音に叫んだ。

「これは極く内密の話ですから、その心算で聽いて下さい。」

西尾氏はパイプを下へ置いて、膝の上に兩手の指を組み合せながら、低い聲で徐に話し出した。

「あなた方は御存じないかも知れぬが、歐洲戰爭の餘波を受けて、露西亞に革命騷ぎが起つた時、ロマノフ王朝の昔から露西亞の宮廷に珍藏されてゐた王冠や寶石類が、賊徒にも等しい革命黨のために、すつかり奪ひ去られたことは有名な話です。その中には、世界中の寶石の中で第一に擧げられたオルロフ金剛石もあり。また露國の皇帝が即位の式を擧げられる時に用ひられた由緒ある王冠もあつたのです。それらの有名な寶石類は、大概亞米利加の寶石市場へ現れて、何百萬圓といふ莫大な値段で賣買をせられたものです。その當時は賣つた者も買つた者も、後難を恐れて祕密にしてゐましたが、今日になつては、もう賣買された寶石の行方はすつかり判つてゐます。ところが、たつた一つレガリアといふ有名な金剛石の行方だけは未に誰も知らないのです。レガリアといふのは、代々の露西亞の皇后様が戴冠式の時に冠られた王冠の前額に飾られてあつた子鳥の卵程もある立派な寶石ですが、王冠の行方は判つても、その寶石だけは何者かに奪ひ去られたまゝ、遂に行方が知れなくなつて、世界中の寶石狂が血眼になつて搜し廻つてゐるので

す。」

　西尾氏はちよつと言葉を切つて、呼吸をつく。二人の若い冒險家は始めて聽く珍しい話に、片唾を呑んで後を待つ。

「ところが、一昨年の十一月の下旬でした。そのレガリアの金剛石が突然浦鹽に現れたといふので一時大評判になりましたが、さてその所有主は露西亞人だとも云ひ、或は支那人だとも云ふ噂で、確かなことを突き止める閑もなく、再びレガリアの行方は判らなくなつてしまひました。そこで多分このダイヤも近い内に亞米利加へ現はれて評判になるだらうと取沙汰されたものですが、其後三月經つても、半歳經つても、一向にレガリアが賣買されたといふ話はなかつたのです。それは無い筈です。レガリアは亞米利加へ運ばれる途中、日本で行方不明になつたんですから。隱すよりは現るゝが早いと云ふが、全くその通りで、浦鹽からレガリアが消えたといふ噂が立つてから、三月も經たぬに、もう一切の事情が私の耳に入りました。その事情といふのはかうです。

「つまりレガリアの所有者は一人ではなく、四五人の仲間で、その中には二人の日本人も交つてゐたのです。彼等が何處から、如何いふ手段でレガリアを持ち出して來たか、それは分らないが、とに角、四五人の仲間がレガリアを持つてゐて、それを浦鹽で金に換へようとしたが、思ふやうな買手がない、そこで日本へ持つていつて買手を搜し、もし日本でも賣れなければ、亞米利

加まで行くつもりで、牧田といふ仲間の日本人と何とかイワノフといふ露西亞人と二人で、それを持つて浦潮から日本に向つたのです。ところが、彼等の乘つた鳳榮丸といふ汽船が、敦賀へ入らうといふ時、港外一浬の沖合でひどい濃霧に包まれて針路を失ひ、暗礁に乘り上げてしまつたのです。」

「えゝ！　あの難船した鳳榮丸に乘つてたんですか？」敏夫が吃驚したやうに訊いた。「ぢや恐らく助からなかつたでせうね？」

「さうです、御承知のとほり不意の出來事で、助かつた者は半數にも足りず、それも大半は女や子供だつたので、二人共助からなかつたのです。溺死者の氏名が發表された時に、二人の名前が立派に乘つてゐたんだから、そこに疑ひはないのです。それでこゝで問題になるのは、彼等が携へてゐたレガリヤ金剛石はどうなつたかといふことです。これは汽船沈沒後、間もなく分つたことですが、金剛石は丈夫な革の囊に入れて牧田かイワノフか、二人の中の何方かが肌身離さず持つてゐたといふ話です。ところで二人の屍骸は汽船沈沒の數日後、海岸に打揚げられたが、身體の何處を搜しても、寶石を入れた囊のやうなものは見つからなかつたのです。そこで問題は第二段に移つて、レガリアは汽船遭難の際、若くは屍體漂着の場合に、何者かに盜み去られたゞらうか？　それとも海中に沈んでしまつたのか？　或は又遭難の瞬間に、救助される見込みある何者かに託されたのではあるまいか？　といふ三つの疑問が起つて來たのです。

「レガリアの評判が浦鹽に傳つて以來、それを附け覘つてゐた者は決して少くなかつたのです。そして二人がそれを持つて日本に向つた時にも幾人かの惡漢が彼等の後を尾けてゐたといふ噂もありました。だから、遭難の際の騒ぎに紛れて、奪はれたといふ推定もつかんことはありません。ところが、汽船が暗礁に乘り上げると同時に、ボートが下され、泣き叫ぶ女や子供から順次に救助されつゝあつた時、牧田が甲板の上で、一人の若い婦人に向つて何か話をしてゐるのを見たといふ者があるのです。尤もそれは話をしてゐたといふだけのことで、レガリアを渡してゐるのを見たと云ふのではないんです。が、汽船は今沈みかゝつてゐる、救助される望のある者は、婦人か子供だけだといふ際どい場合ですから、彼等が生命より大切にしてゐる寶石を、その婦人に託したといふことは、先づ九分九厘まで間違ひはないと思ふのです。

「この推定に間違ひはないとして、それならその若い婦人は何處へ行つたか？　レガリアは如何なつたか？　これが極めて興味のある大問題になつて來るのです。牧田やイワノフの仲間は無論のこと、我々も必死となつてその女の行方を探したものです。が、何處へ行つたか、如何なつたか、全く行方が分らないのです。分つたのは、その女の名前だけ、それが今あなた方の疑問となつてゐる小花百合子といふ名前なんです！」

「ほう！」咲子と敏夫の口から、思はず驚きの聲が洩れた。

「それで小花百合子といふ名は、救助された生存者の名簿には、立派に載つてゐるのです。が、

名前だけで、その當人は敦賀上陸と同時に煙のやうに消えてしまつて、全く影も形も失くなつたのです。それのみか、その身許も、係累も全然判らず、つまり完全にこの世界から消え失せてしまつたわけです。と同時に何十萬圓といふレガリアのダイヤもその女と一緒にこの世界から消え去つたのです。この事實がパッと世間に公表されたならば、恐らくあらゆる人々——寶石狂や、黄金の欲しい連中ばかりではなく好奇心に驅られる人々までが、騒ぎ立てゝ必死となつてその女の行方を搜しにかゝつたに違ひありません。しかし小花百合子が行方不明になつたことは、一部の人々には知れてゐても、彼女がレガリヤの金剛石と共に行方不明になつたことを知つてる者は、鳳榮丸と共に死んだ牧田やイワノフの一味の者か、でなければ彼等からその秘密を聞いて知つてゐる極く少數の人々に過ぎないのです。」

「すると丸ビルから姿を消したあの内海といふ男は、彼等の仲間でせうか？」

「さうかも知れません。牧田の仲間に石井といふ男のあつたことは知つてゐますが、内海といふのを聞くは始めてです。」

「石井ですつて？」咲子は昨日内海の事務所で、電報を持つて入つて來た男を、内海が石井と呼んだことを思ひ出した。

「その人は眉根に大きな黒子のある人ではありませんか？」

「さうです。あなたは御存じですか？」

昨日、内海の事務所で見かけましたの。」

「ぢや間違ひない。それで内海といふ男が、小花百合子の名を聞いて、顔色を變へた理由も、その用向きが關西方面の病院を廻つて、人を捜すといふ理由もよく解つたのです。彼等はやはり牧田の仲間で、小花百合子を捜してゐるんです。が、あちこちを捜しても解らないので病院か瘋狂院を捜さうとかゝつてゐるのです。」

「どうして病院を捜さうといふんでせう？」

「それは、つまり汽船から上陸した前後に、負傷でもして何處かに靜養してゐるのだと睨んだのでせう。」

「左樣ですわ、きつと。」咲子がいかにもと言つたやうに叫んだ。「それでよく解りましたわ。それでは一生懸命小花百合子さんの行方を搜してみますわ。ねえ、お引受けしていゝわね。敏夫さん？」

「結構！ 但し報酬の點は如何でせうか？」

「月二百圓宛差上げませう。他に捜索に要する費用はいくらでもお上げします。但しこゝに一つ條件があるのです。それは如何なる場合にも警察官の助力を乞はないといふことです。つまり警察の耳に入つたら、秘密といふことは決して保たれないからです。宜いでせうね、この點は？」

「大丈夫です。斷じてお巡査さんの力なんか借りませんわ。」

「宜しい、ぢやそれで契約は出來たわけです。ちよつとお待ち下さい。」

西尾氏はつと席を立つたと思ふと、直ぐ引返して來て、手の切れるやうな紙幣束を二人の前に置いた。

「二百圓宛四百圓です。先づ今月分の給料として差上げておきませう。」

百合子の寫眞

「ちよつと宜い氣持だね。」

「何が？」

「今日から二百圓の月給取りだと思ふとサ。」

「さうね、つまらない職業婦人よりは餘程宜いわ。でも、敏夫さんは如何思ふの、あの人を？」

「解らないね。事によると内海の方で恐れてる守島といふ人ぢやないかしら？」

「さうよ、わたしも實はさう思つたところなの。」

「或はさうかも知れないよ。何だかそんな氣がするんだ――でもお腹が減つたね。」

「空腹いくらゐ我慢するんですよ。もう直ぐだわ、そこが一口坂だもの。」

自動車は靖國神社の裏手、一口坂から三輪田女學校の大通りを左へ入つて、近頃流行の文化住宅式の建物の前にぴたりと停つた。

呼鈴を押して、取次ぎの女中に用向きを述べると、そのまゝ左側の應接室へ通された。二人の來訪を待ち兼ねてゐたのであらう。女中が去ると入り代りに、つか〳〵と二人の前に現れたは、まだ二十二三の青年。細面のくつきりとした男らしい顏。

「僕が島田です。さあ、どうぞお掛け下さい。それで早速ですが、僕の從妹について、何んなことを御存じでせうか？」

「えゝ？　あなたのお從妹さんですつて？」

「さうです、小花百合子のことです。」

「小花百合子といふのは、あなたのお從妹さんですか？」

「さうです。僕の父と百合子の母とは兄妹なんです。」

「ほう！」咲子が驚きながら訊いた。

「では百合子さんが、何處にゐられるか、御存じでいらつしやいますの？」

「それが分つてをれば何も問題はないのです。あなた方は御存じぢやありませんか？」

「わたし達もそれを知りたいと思つて、廣告したのです。」

兩方で何も知らぬとあつては話は進まぬ、何とかこゝで話の緒を見出さねばならぬ。

「それでは百合子さんに最後にお會ひになつたのは、何時でございますの？」

咲子が絞り出した質問の第一矢。

「百合子には僕一度も會つたことがないのです。」

「えゝ？」驚嘆詞が二人の口を衝いて出た。

「事情をお話しないと、變に思はれませうが、實は百合子の母といふのは、若い時、小花秀男といふ人と戀仲になり、監督の任にあつた僕の父の承諾なしに結婚して、二人でシベリヤへ行つてしまつたのです。それから間もなく浦鹽から消息がありましたが、頑固者の父は返事も出さなかつたやうでした。其後父も死ぬし、爾來關係は絶えてしまつたわけでしたが、昨年の一月になつて突然百合子から寫眞と一緒に手紙が來て、兩親に先立たれて、依頼る先がないから東京へ歸りたいが、どうか父母の事は忘れてよろしく頼むといふ文面です。僕としても兩親はないし、大いに同情をして、直ぐ返事を出して日本へ歸つて來るやうにと云つてやつたんです。すると折返して次の便船鳳榮丸で歸るといふ手紙が來ましたが、その鳳榮丸が御承知のとほり敦賀の沖で沈沒したのです。尤も百合子は助かつた筈で生存者の名簿の中にも載つてゐますが、助かつてから如何なつたか、薩張り行方が分らないのです。それで僕は警察へ頼んで極力捜してみました。いや今でも捜してゐるんですが……」

「成程。百合子さんから來た寫眞はお手許にありますか？」

「ありましたが、それも今朝のこと、警視廳の方が見えて持つて行きました。」

「へえ！　警視廳の人が……刑事ですか！」

「誰と云つたつけ……名刺を見れば解るんだが。あゝ、さうさう石井さんといふ警部でした。小柄な左の眉根に大きな黒子のある人です。」

「えゝ、黒子のある！」

二人は思はず驚きの聲を擧げた。

二

見つかつた怪人物

「石井警部だなんて出鱈目にきまつた。僕、今、警視廳へ行つて調べて來たんだが、そんな警部なんかありはしないんだ」

茶目公とはね子の臨時事務所、カフエー「あやめ」の一室。ドン〳〵と階段を踏む跫音がして、扉を開けて入つて來た敏夫が、咲子を見ると何は措いても先づ第一の報告。

「おや！　わざ〳〵調べに行つたの？　御念が入つてるわねえ。石井警部なんて、出鱈目だことは最初から解つてるぢやないの。」

「だつてサ、念には念を入れよといふことがあるからね。調べてみるに越したことはないサ。」

「調べて惡いことはないけど、今はそんなことをしてゐる場合ぢやないわ。」

「どうして？　何かもつと重大な問題でもあるの？」

「あれば結構だけど、何にも問題がないから、そんな閑つぶしなんかしてはゐられないわ。」

「怪しいね。はねちやん少々頭が惡いぜ。何も問題がないから、閑つぶしに石井警部のことでも調べて來たんぢやないか」

「どつちが頭が惡いんか、ようく考へてごらんなさい。問題がない、詰り何にも手懸りがないといふ場合ぢやないの。それだのに、閑つぶしなんかして、いゝと思ふの？　お互ひに額を鳩め、頭をつかつて、何か手懸りを搜し出すやうにしなくつては、百合子さんの行方は何時まで經つたつて判りつこありませんよ。」

「それや左樣に違ひない――」

咲子の鋭い鋒先に、敏夫はいさゝかたぢ〳〵の氣味である。

「ぢや、如何しようと云ふの？　咲ちやんに何か名案があるかね？」

「その名案を、わたし昨夜から考へてゐるんだけど、何んにしたつて、もう調べて廻る先がなくなつたんだから、手の出しようがないのよ。困つたわねえ――」

「あの内海の行方が解ると面白いんだがなア？」

「それは私も考へてみたの。出會ひさへすれば、顏に見覺えはあるんだけど、何處を搜していゝか、見當もつかないんですもの。」

「多勢人の出入するところを捜すさ。二三日、東京驛の乘車口へ張込んでみたら如何だらう？」

「馬鹿々々しい。そんなことは智惠のない人間のすることだわ。」

「それぢや、何か他に巧い方法でもあるの？」

「ないわ、だから二人で頭を惱まして考へてみなくてはといふんぢやないの。」

「成程——こいつは一言もない。では、一つ考へてみよう。」

「えゝ、考へてみて頂戴。三人集れば文珠の智惠といふから二人なら文珠樣のお弟子ぐらゐの智惠は出る筈だわ。」

二人は本氣で考へ込んだ。敏夫が兩腕を組み、しかめ面をして俯向き込むと、咲子はその白い手を額に當て、眉根に皺を寄せながら、足許にぢつと目を落す。まるで試驗場に出て難解な問題にでもぶつかつた時のやう。

それも當然、苦心慘澹、やつと小花百合子の正體を突止めて、餘りにも事の意外に驚いたきりで、さて問題の主人公、小花百合子を捜索すべき段となると、手懸りとなるべきものが、何に一つないのだから、少々事は面倒である。それも新聞の廣告を見て、手紙を寄越した西尾氏から、少からぬ手當をもらつて依頼を受けた後である。手掛りがないからとて、このまゝ後へは退けぬ場合だ。乘りかゝつた舟。どうにでもして、捜索の緒を見附けなくてはならぬ。

せめて百合子の寫眞でもあれば……と思つてみても仕方がない。その寫眞は、今頃はもう石井の手から内海に渡つて、彼等のために有力な捜索の材料となつてゐるに違ひない。それにつけても間誤々々してはゐられない。さア、何か名案はないものか！　五分、十分——無言の時が約二十分も經つた時、敏夫が突然口を開いた。

「咲ちやん、守島つて人を捜してみたら如何？」

「守島つて？　如何した人なの？」

「忘れつぽい人だね、自分で言つといて——それ丸ビルへ訪ねていつた時、内海といふ男が咲ちやんに、守島の手先になつて來たんだらうつて云つたといふぢやないか。」

「あゝ、左樣々々——守島といふ人も私達の競爭者だつたわねえ。だけど、苗字だけで人を捜すのは、隨分無謀ぢやないの。」

「無謀でも他に方法はないよ。萬策盡きてと云ふ場合だもの。」

「さうとも云へないわ、も少し考へてみなくちや。でも、わたしお腹が空いてペコ／＼になつたの。敏夫さん、何か食べにいかない。」

「結構——天金？——それとも大阪壽司？」

「えゝ、あすこのお壽司がいゝわ。」

御馳走の相談は纏りが早い。二人は早速階段を下へ、山城町の角に近頃店を開いた大阪壽司屋を差して歩いてゆく、數寄屋橋を渡ると右角が自動車商會、それから小さい洋品店を一軒置い

て、次ぎが最近出來た文化式の旭アパートメント。そのアパートメントの入口まで來ると、どうしたといふのだらう。咲子が敏夫の服の袖をつと引張つて、小走りに五六歩向うへ行き過ぎた。

「何なの、咲ちやん？」

敏夫が足を早めて追ひつくと、

「あの男よ。アパートメントの中で女の人と話してた——あれが内海よ。それ、今出て來た——」

「あの男？　背の高い——宜し、ぢや僕後を尾けよう！」

「大丈夫？」

「大丈夫サ！　何處までゝも尾けてみせる！。」

お腹の空いたことなんど、忽ち忘れてしまつて、急に元氣づいた敏夫は、電車通りを右へ尾張町の方へ、ぐん〳〵と大股に歩いてゆく男の後姿を、睨むやうに見詰めながら尾行をはじめた。人の後を尾けるなんて、敏夫は生れて初てである。探偵小說では、變裝した探偵が、惡漢の後を尾行することをよく讀んだが、實際、自分でやつてみると、決して小說で讀むやうに痛快な面白い仕事ではないらしい。

眞晝間のことだから、他處見をせずに隨いてゆけば、先づ見失ふことはあるまい。しかし、途中で通りかゝつた貸自動車を呼びとめて、ふいと飛び乘つてしまつたら如何しよう。間近に他の自動車があれば何でもないが、もしその自動車が無かつたら……第一、それが心配だ。もしまた、大きなビルデイングかホテルへ入つて、そのまゝ姿を晦ましたら——それもまた心配の材料になる。

前後から自動車の來る度に、人の出入の繁い建物の前へ差蒐る每に、敏夫はびく〳〵しながら、內海の後に寄添ふやうに近づいた。が、案ずる程のこともなく、幾臺となく通り過ぎた空自動車を呼び止めもせず、ビルデイングの前に足も止めず、無論、自分の後から尾行者が隨いて來ることなんど夢にも知らないらしく、銀座通りを左へ京橋の方へ向いて步いてゆく。

玉屋の前で立ち止つて、飾窓を覗き込んだ。が、それは自分の時計を、標準時計に合すためであつた。京橋を渡つて廣小路まで來ると、何方へ向いて行つたものか少時、考へてゐる風だつたが、やつと思ひ決した風で、電車通りを踏み切ると、日本橋通りを眞直に、それからは傍見もしないで白木屋の前まで來ると、時計を出して見ながら急に思ひついたやうに、青山行きの電車に乘つた。

さア、事だ。油斷はならぬ。敏夫は內海が前方の運轉手臺から乘つたのを見て、自分は後部の車掌臺から飛び乘つて、吊革につかまりながら、乘客の肩越しに、傍目もふらず內海の方を監視する。

が、東京驛の前まで來ると、內海は電車を降りて、乘車口の方へ入つてゆく。

「汽車に乘るんだらうか？　それとも誰かと出會ふだらうか？」

敏夫は一層氣持を緊張さしながら、後を追うて構內に入ると、內海は二等待合室の入口に立つて、誰かを捜しでもする風で、きよろ〳〵四邊を見廻してゐたが、やがて向ふの片隅にゐた一人の男が、此方を向いて麾くと、つか〳〵とその傍へ行つて、ベンチへ並んで腰をかけた。

敏夫はその男に注意した。四十前後の眼鏡をかけた瘦形の男だ。背格好や、顏の樣子は何だか咲子が話してゐた石井のやうにも思はれるが、眼鏡をかけてゐる上に、眉根に特徵の黑子がないから、恐らく別人に違ひない。それにしても、二人は何んな話をしてゐるだらう？

生憎二人の兩側は、子供連れの婦人客が占めてゐるので、並んで腰をかける譯にはゆかぬ。仕方がないので、何に食はぬ顏で二人の前を通り拔けて、內海から三人目の空席へ腰を下し、ポケットの新聞を取出して擴げながら、二人の話を偸み聞かうと耳を立てた。

「……で、話はついたんだね？」眼鏡の男が訊いてゐる。

「ついたやうな、つかないやうなものだ。變な女でね――」

「一體幾歲くらゐの女だね？」

「さうだ。もう四十近いね。寫眞を見せると驚いてゐたよ。」

「それや驚く筈だ。すると、君はこれから出掛けるんだね。」

「さうだ、この次ぎの汽車で行つてみようと思ふ――それでお願ひがあるんだがね……」

急に聲が低くなつて、二人は四邊を憚るやうにひそ〳〵と話し出した。でも、とに角に內海が汽車に乘ることは解つた。それに寫眞といふのは、島田青年の處から持つていつた百合子の寫眞に相違ない。すれば、汽車での旅行も無論、百合子に關係してゐるだらう。見逃してなるものか。宜し、何處までゞも尾けてやらう。

間もなくベンチを離れて起ち上る二人の後を切符賣場へ尾けてゆくと、內海は小田原までの二等切符を買つた。時間表を見ると午後二時三十分、下關行きの急行がある。敏夫も同じく小田原までの切符を求めて、改札口に列ぶ行列の中に交りながら、內海の後を追うて歩廊へ急いだ。

疑問の女？

怪人物內海の後を追うて汽車へ乘つた敏夫の冒險は後へ廻して、話は咲子の方へ戾る。

尾けられる人、尾ける人、二人の姿が銀座街の方へ消えると、咲子は何と思つたか足を返して、內海が出て來たアパートメントの中へつか〳〵と入つていつた。

兩側は貸事務室、その間を拔けて突き當ると廻轉扉があつて、そこから直ぐ階上階下の各室へ通ずる廊下がある。

咲子がつと扉を押して中に入ると、折よく詰襟服を着た十二三歲の少年給仕が、とん〳〵と二階から降りて來た。

「ちよつと、あなたはこの家の給仕さんなの？」咲子が微笑みながら話しかけた。

「えゝ。」少年は平氣な顔で「誰方かに御用ですか？」と訊き返す。

「いゝえ、面會ではないんだけど、あなたに少し訊きたいことがあるの。今、こゝから洋服を着た丈の高い人が出ていつたのね。あの方は誰のところへ訪ねて來たお客様か、あなた知らない？」

「たつた今、出て行つた人ですか？」

「えゝ、あの方よ。」

「あの人なら二階の守島さんを訪ねて來た方でせう。」

「守島さん――？」咲子はハッと思つた。守島と云へば、十分前、敏夫と話した疑問の苗字――怪人物内海の口から洩れたその名前ではないか。しかも、その名を口にした内海が、現にその人を訪ねて來たといふ事實。これが偶然と云へやうか。さア、事が面白くなつて來た。

「守島何と云ふの、その人は？」

「やす子と云ふんでせう、家康の康の字が書てあるんですよ。」

「幾歳くらゐの女？」

「僕、歳は解らんですが、いやな女ですよ。」

「嫌な女つて、どんな女なの？」

「氣難かしい變な人ですよ。」少年は二階の方を振向きながら「女中なんか二月とゐやしないんだもの。今度の女中も今日暇をとつて行つてしまうんです。お庇様で、僕また忙しくなるんだ。いやになつちまうなア。」

「女中さんがゐなくなると、あなたを使ふの？」

「えゝ、新しい女中が見付るまでは、僕に何でも云ひつけるんですもの。」

「他に用があるのに、女中の代りに使はれては大變だわねえ。」咲子は少年に同情を寄せながら、

「わたし、その方の女中になつて上げやうかしら？　あなた巧く取り持つて下さらない？」

「あなたが女中になるんですつて？」少年は呆氣にとられた顔をして、

「戯談でせうあんな女の女中になんかなつて堪るものですか。」

「いゝえ、戯談に云つてるんぢやないの。實はね、わたしあの女のことを少し調べたいのよ。」

「ぢや、あなたは探偵？」

少年は可愛いつぶらな目を見張つた。

「えゝ、わたし女探偵よ。それでね内密で私を紹介してくれないこと。ね、あなたのお從姉さんとか、お友達の姉さんとか云ふことにして、女中奉公をしたいと言つてゐるが、使つてやつてくれませんかと、上手に話してみて下さらない？」

「眞實ですか、それは？」

「え、、眞實よ。嘘なんかわたし言はないわ。」
「ぢや、話してみませう。友達の姉さんといふことにして、——名前は何とします？」
「何でもいゝわ。あなたが勝手に宜加減の名前をつくつて頂戴。それより、あなたは誰といふの？」
「僕、水谷一郎と云ふんです。」
「さう、宜い名前だわねえ。では、わたし明日の正午前に返事を聞きに來ますからね。何だつたら大手の一〇一五番へ電話をかけて吉井と呼んで下すつてもいゝわ。使つてやると云つたら、直ぐ明日からでも女中さんに化けて來るんですから」
　咲子は胸がわく／＼してゐた。大阪壽司が緣となつて思はぬ拾ひものをしたのである。一切の手懸りを失つて、暗夜の道を彷徨ふやうな絶望の氣持に沈んでゐたのはたつた一時間前のこと。それが空腹から大阪壽司を思ひついてお蔭樣で怪人物内海の姿を見かけるし、まだその上に疑問の女守島康子の隱れ家をまで突き止めて、そこへ女中に住み込まうといふ策戰にまで事を運んだ。これが意外な拾ひものでなくて何であらう。これで敏夫の尾行が成功し、一方自分が守島といふ女から、何かの秘密を捜り得て、小花百合子の行方と共にレガリア金剛石の所在が判れば、事は萬歳、萬々歳だ。
　それにしても敏夫の方が氣にかゝる。巧く尾行をしてるかしら、何處かそこらで撒かれてしま

つたではあるまいか。いづれにしても、事務所へ歸つてその報告を待たねばならぬ。咲子は空腹を忘れて、急いで事務所へ歸つて來た。が、敏夫の姿は見えなかつた。すると、やつぱり尾行をつゞけてゐると見ねばならぬ。
　その日一日、咲子は敏夫からの報告を、どんなに待ち兼ねたことであらう、夕方になつても歸つて來ず、日が暮れても何の報告もないとなると、今度はだん／＼と心配になり不安になつて、何だかぢつとしてゐられないやうな氣がせられた。
　その矢先、夜の十時過ぎて階下から「吉井さん、お電話！」といふ聲を聽くと、咲子は飛び立つやうな思ひがして、電話口へ驅けつけた。無論、敏夫からだと思つたのだ。が、受話器を耳に當てると、それは水谷少年の聲。
守島夫人の方のお話しがまとまつたから明日の正午頃に來てくれ——といふ。それで望は叶つたわけだ。敏雄のことも氣にかゝるが、女中に住み込むことになれば、多少の準備もしなくてはならぬ。
　咲子は大急ぎで今日の出來事を、神田の西尾氏に書き送ると、事務所を出て日比谷から電車に乘り、神田の古着屋へ立寄つて女中に似合ひさうな帶や着物を買ひ整へた。髮の結方やお化粧は明日のこと——

×　×　×　×

四五年も前に流行つた時代遲れの銘仙の着物に、色の褪せたメリンスの帶をしめ、頭髮も變に無格好に結つた十八九歳の鄙びた娘が、水谷少年の後について、旭アパートメントの階段を踏んで階上第十五號室の前に立つた。

「コツ〳〵。」水谷少年が扉を叩いた。

「誰方？」中から疳高い聲がする。

「給仕の水谷です。昨夜、お話した山村磯子さんをつれて來ました。」

「あゝ、女中が來たの――」

上草履を引擦る音がして、扉が靜に内側に開くと、三十八九と思はれる色の淺黒い女が、ぬつと顏をつき出して、咲子の顏をぢつと見た。

蛇のやうな眼だ！　直覺的に咲子は思つた。あの内海氏の顏も陰險な感じの惡い顏だつた。しかし、この女の顏は、陰險以上に何處かしら恐ろしい凄味がある。目を見ただけでも唯の女でないことが判る。

「お前は今まで女中奉公をしたことがあるのかね？」

水谷少年が部屋を外に出てゆくと、守島夫人は試驗でもするやうに訊き出した。

「いゝえ――田舍へ行つてる時、ちよつと他家へ手傳ひに上つたことがあるだけでございます。」

「それでは、まだ馴れてもゐまいしお給金も最初から澤山は出せないが、その代りわたしのところは、外國式に日曜日には半日暇を上げるからね。」

「ハイ、有り難うございます。」

「それから磯子ではお孃さまみたいだから、磯と呼び切りにするから、そのつもりでね。では、私はちよつと晝食を食べに出かけるから、そこらの拭き掃除でもしてゐなさい。」

さう云ひすてゝ、守島夫人は黑革の手提を腕にかけて、扉を外に出て行つた。何といふ冷かな女であらう。溫味といふものは、少しもなく、まるで氷のやうに冷淡である。

夫人の跫音が階段の下に消えると、咲子は急にきつとなつて、部屋の樣子に目を配つた。衝立で半分に仕切つて應接室と居間を兼ねた部屋の中には、食卓兼用のテーブルと椅子が三脚、壁際に立てかけられた衣裳棚、他にこま〳〵した什器類を載つけた戸棚があるきり。見ると衝立の向ふに今一室、小さい部屋があるらしい。探偵の第一歩、先づ部屋々々の樣子から調べてみなくてはと、把手に手をかけやうとすると、突然、入口の扉を叩く音。

咲子はハイと答へて足を返した。そして扉を開けると、そこに立つた一人の男。咲子はハツとして、思はず後へ身を退いた。

驚いたも道理、それは丸ビルの内海の事務所で、ちよつと顏を合したあの石井と瓜二つの顏ではないか。咲子はたしかに左樣だと思つた。でも、

「守島さんはいらつしやいますか？」云つて差出された名刺を見ると、全くの別人「辯護士、三

宅俊二」とある。三宅辯護士といへば法曹界はもとよりのこと、犯罪學者としても世間に知られた人である。咲子も新聞や雜誌の上で、度々その名は聽いてゐる。

「たゞ今お留守でございますが……」

「お留守ですつて？　正午過ぎにお伺ひする旨を、昨日お約束してあつたんですが、何かお話はありませんでしたか？」

「いゝえ、何とも仰有いませんでしたが。」

三宅辯護士は咲子の顏を、見詰めるやうにまじ〳〵と見ながら、言葉靜に訊く。

「お出先は分つてゐませんか？」

「何方へいらつしやいましたか、お晝食にお出掛けになりましたから、今に歸つて來られると思ひますが。」

「食事は何時他處でおとりになるんですか？」

「さあ、……私、こちらへは上つたばかりなんですから、よく分りませんでございます。」

「と云ふと、何時から、こゝへいらつしたんです？」

「今日、始めてゞすの。」

「今日？」三宅氏は何故か意外な面持をして、ぢつと咲子の顏を見てゐたが「では、少時待たしていたゞきませう。また出直すのも何んですから。」

とテーブルの上に帽子を脱いで、椅子に腰を下しながら煙草を出して吸ひはじめた。咲子は食器棚の前へ行つて、お茶の道具を搜しながら、餘りにも似た二つの顏を心の中で較べてみる。

法曹界の名士である三宅氏が、名を變へて內海のところにゐた筈はない。しかし、どう考へても、二人の顏は全く見分けも出來ない程に似てゐるのだ。事によると、あの石井が三宅辯護士の名を騙つて、自分と同じく、守島夫人の秘密を搜りに來たのではあるまいか、それなら女中に化けた自分と、辯護士に化けた惡漢の腕較べだ！　これは面白いことになる！

でも、そんなことが有り得ようか？　自分が女中に化けるとは違つて、惡漢が有名な辯護士に化けるといふことは、直ぐ看破られるに決つてゐる。すると、やつぱり人違ひなんだらうか？

その時、ふと思ひ出したは、石井の眉根にあつた大きい黑子。さう〳〵、あの黑子は誤魔化しの利かない目じるしである。あれで判斷すればよい。

さう思つて、お茶を運んでいつた次手に、ぢつと左の眉根に目をやつたが、黑子なんどは何處にもない。すると明に別人なのだ。それにしても、目許から口許、全體の輪廓まで、よくもまあ似た顏があつたもの。もしかすると、双生兒か兄弟ではないかしら。

咲子が手持無沙汰のまゝ、そこらに散かつたものを片附けながら、そんなことを考へてゐると、やがて廊下に足音がして、小さい買物の包みを提げた守島夫人が歸つて來た。そして簡單な初對面の挨拶がすむと、夫人は三宅氏を別室へ案內して、扉をしつかりと閉め切つた。

二人がどんな話をしてゐるか、密談らしい低聲が時々洩れて來るだけで、內容までは解らなかつた。呼鈴が鳴つて、一度紅茶を運んで行つたが、咲子が顏を出すと話聲はぴたりと止んで、二人は啞のやうに默つてゐる。

　その內に再び呼鈴が鳴つたので、行つてみると、もう用談は終つたらしく、夫人が無愛想な顏にしひて笑ひをつくりながら三宅氏を送り出すところであつた。咲子が差出す帽子を取つて、別れの言葉を告げながら廊下に出た三宅氏は、靴紐を直す風をして、ちよつと扉口にしやがんでゐたが、夫人が別室の方へ行つてしまふと、つと背を伸して、

「あなたは田舍の方ぢやありませんね？　生粹の東京ッ兒でせう？」

　と囁くやうな聲で云ふ。

「どうして分りまして？」咲子が駭いて問ひ返すと、

「一目で分ります。どんな風をしてゐましてもね――でも、こゝは氣持よく働けさうですか？」

「えゝ――」

「しかし、當節は、女中奉公なら、いくらでも宜いところがありますよ。何んだつたら、何處かへ變つた方がいゝでせう。」

「と、云はれますと？」

　二足三足歩きかけた三宅氏は、半ば身體を此方へ向けて、同情と親切に充ちた眼で咲子を見ながら、

「惡いことは申しません。御用心なさるがいゝですよ？」

　何んだか意味あり氣な薄氣味惡い言葉である。それに田舍者に化けおほせてゐるつもりなのに、生粹の東京ッ兒と看てとつたあの言葉から判斷すれば、自分が守島夫人の秘密を探るために、女中に棲み込んでゐることまで、もう看破してゐるかもしれぬ。

　さうだ。きつと左樣だ。守島夫人は恐ろしい女だから、もし自分の素性が露れて、秘密を探りに來てゐることが分つたなら、どんな目に會ふかも知れぬ。それで用心をしろ、出來れば暇をとれといふのだらう。

　でも、乘りかゝつた舟だもの、何かの祕密を探り出すまでは、まあ踏み止まつて辛抱しよう。いざとなれば暇を取るまでもないこと、自分から勝手に逃げ出せばいゝんだから。

　それよりも敏夫のことが案じられる。もう歸つて來たかしら。それとも、なだ內海の跡を尾けてゐるのだらうか？　もしかすると、惡漢の手に捕まつて、何處かへ監禁されてゐはしまいか。

　咲子はそれが氣にかゝつて、給仕の水谷少年が用達しに出掛けるのを幸ひ、「カフエー「あやめ」へ立寄つてもらつたが、敏夫はまだ歸つて居らず、手紙も電報も來てはゐないとのこと、さう聞いては、いよ〳〵心配になつて、西尾氏か、それとも島田青年に賴んで、行方を探してもらひたいと思つても勝手に出掛けるわけには行かず、一人で胸を痛めてゐる內にもう日が暮れて夕飯を

濟すと、また來客。

それは山田といふ四十前後の短い顎髯を生したあまり人相の良くない人物、夫人とは心安い中と見えて、部屋へ入つて來ると、如才ない言葉を二言三言取交して、直ぐ別室へ入つてゆく。

食器の片附けが濟むと、咲子はそつと扉の前に近づいた。晝とは違つて、遠慮のない疳高い男の聲が洩れて來る。

「三宅俊二と云やあ本職は辯護士だが、有名な犯罪學者ぢやないか、どうしてこんな男が訪ねて來たんだい？」

「どうしてつて、或るところで知合になつて、お交際をしてるだけのことよ。」

「馬鹿だね、犯罪學者と云ふのは、探偵のお師匠さんだよ、こんな男と交際つて、襤褸を出したら如何する？　折角の苦心も水の泡ぢやないか！」

「またお前さんの取越苦勞が始まつたわね。こんな有名な人とお交際してゐれば、却つて世間の疑ひを受けないでいゝぢやないの。」

「以ての他だ！　お前さんは賢い女だが、怜悧いやうでも女だ。僕の云ふことを聞いて、今後はこの男を近づけないやうにするんだ。今日來たのも、もう僕達を疑つて、内々嗅ぎ出しにやつて來たかもしれん。」

「お前さん見たいに用心深い人もないもんだ。そんなに一々人を疑つてゐた日には、此方の壽命

が縮まりますよ。」

相手の言葉が癪にさはつたか、今まで低かつた夫人の言葉が急に疳高くなつて來た。

「いや、用心に亡びなしだ。日本でも一二と云はれる犯罪學者が、お前さんのところへ突然やつて來るなんて、どうせ尋常事ぢやないに決つてゐる。油斷はならないぜ。」

「大丈夫ですよ。いざとなれや、私が一人で背負ひこむんだから――」

「きつとだね？　ぢや、もう何にも云ふまい。ところで小田原の方はどうたね？」

「シッ！……」

急に聲が低くなつて、二人は何事かひそ〳〵と話し出した。

「小田原」とは何だらう？　あの小田原のことだらうか、それとも人の名であらうか？　咲子は扉に近く身體を寄せて、ぢつと聽耳を立てゝみたが、殘念ながら後の言葉は聽かれなかつた。

でも、彼等が、恐ろしい惡漢であることゝ、そこに何かしら大きい祕密があることは、立派に證明された譯だ。その祕密が小花百合子の問題であつてくれゝば……

敏夫の冒險

翌の日は日曜日。

敏夫のことが氣にかゝるので、まだ二日目ではあるが正午から半日の暇をもらつて、西尾氏か

島田青年のところへ相談に出かけようと思つてゐると、階段を驅け上つて來た給仕の水谷少年が、入口から手招きしながら、

「磯子さん、電話ですよ。」

と低聲で云ふ。急いで電話室へ飛び込んで受話器を取ると、

「はねちやん！」と懷しい聲、敏夫だ！

「まあ、何時歸つて？」

「たつた今、ひどい冒險をやつたよ。直ぐ來ない！」

「困つたわね？　今十時半ね。正午まで待つて頂戴。」

その正午までを、咲子はどんなにじり〳〵して待つたことぞ。お剩に例によつて、晝飯を認めに外へ出かける間、留守居をさせられ、その上きちんと午後四時と歸宅時間まで申渡され、やつと自由な身體になつて、籠を放たれた小鳥のやうに、カフェー「あやめ」へ驅けつけたのが零時五十分。

「馬鹿に人を待すぢやないか？　途中で道でも迷つたの？」

待ち草臥れた敏夫は、機嫌の惡い顏をして眞向から皮肉を浴せかける。

「勘辨して頂戴、これでも息を切して飛んで來たのよ。女中奉公つて、辛いものね。もう〳〵懲々だわ。」

「女中奉公？　はねちやんが？　成程、變な風態をしてゐると思つた。何處へ奉公してるの？」

「あの守島夫人のところよ。そのことは後で話すから、それよりも、あなたの冒險を聞して頂戴、何處かへ監禁されてゐはしなかつたの？」

「さうね、監禁も同然さ。前後不覺で一晩病院で臥てゐたんだから。」

「ぢや、惡漢と格鬪して？」

「いゝや、格鬪なら宜いが、少々風變りな冒險なんだ。まあ、最初から話さう。あれからね、內海の後を尾けてゆくと、奴さん東京驛の待合室で、變な男と會つてさ、それから二時半の下關行きの急行に乘つたんだ。」

「ちよつと、その變な男つて、どんな風の男なの？」

「それがさ、咲ちやんの話してた石井によく似てゐたんだけど、黑子がないし、それに眼鏡をかけてゐたんだ。」

「ぢや、人が違ふわね。それから、あなたも汽車に乘つたの？」

「あゝ、二等切符を奮發して、嚴重に監視をつゞけながら、小田原まで行つたんだ。」

「えゝ？　小田原ですつて？」

敏夫の言葉を遮つて、咲子が頓狂な聲を擧げた。昨夜、別室で守島夫人と山田との話の中に小田原といふ言葉が出て來たことを思ひ出したのだ。

「小田原といふことは、最初切符を買つた時から分つてゐたんだ。それからだよ、冒險は――」

敏夫は生意氣に金口の煙草を吹しながら「汽車を下りると先生直ぐ自動車に乘つたので、僕は別の自動車に飛び乘つて後を追ふと、小田原の町へ入つて、別莊の並んだ山の手の中腹へ來て停つたのだ。もう日は暮れかゝつて、四邊は薄暗くなつてゐる。自動車を下りて、内海が姿を消した建物の前まで來ると、咲ちやん、僕はハッと思つたのだ。何故つて、そこには小田原療養院といふ看板がかゝつてゐるではないか。それ、咲ちやんが最初内海に會つた時、關西方面の僧院や療養院を廻つてもらひたいと云つたんだらう。その目的が小花百合子を搜すにあることは分り切つたことだ。それがどうだ、内海自身でやつて來たのが小田原療養院ではないか。僕はしめたと思つたね。間違ひない！　きつとこゝに百合子さんがゐるんだと喜んだのだ。が、さて、まさかのこ〳〵と用もないのに、そこへ入つてゆくわけにもゆかないので、そこらをぶら〳〵散歩する風をして約二時間も見張つてゐたが、内海の奴、中々に出て來ないのだ。その内に、ふと、療養院の二階の窓が明いたので見ると、硝子窓の一つに何だか内海らしい影法師が映つてゐる。大きな立樹が邪魔をしてよく分らぬが、どうも内海らしく思はれるので、何にをしてゐるか見とゞけてやらうと思つて、暗に乘じて僕は病院の通用門を潛り拔けて、庭の中へ入つて行つたんだ。ところが庭へ入ると窓が高くて覗かれない、困つたなと思つて四邊を見廻すと、塀の外から見た時に邪魔になつた立樹が丁度窓の前にある。宜し、冒險ついでだ、その木へ上つて、窓の中を覗い

てやらうと、靴を脫いでえんやらやつと攀ぢ上つたんだ。それが又大きな樹で、中程まで上つてみたが枝の繁みで、はつきり彼方が見えないと來てゐる。それからが大事だ、僕は兩手で上の枝につかまり、下の枝を踏みながら一寸刻みに段々と窓の方へ近づいたのだ。まるで空中の綱渡りさ。それでも幹から約四五尺も行つたらう、半分ばかり開け放した窓から、内海の顏が手にとるやうに見え出した、白い服を着た看護婦の横顏も見える。が、殘念、寢臺に近く腰を下した今一人の姿が見えぬ。今少しだ、もう一尺だ――と思つて、片足を前へ出した瞬間、アッ！　と思つた時はもう遲い。僕は枯枝を踏んで、高い樹の上からすつてんころりと落ちたのだ。

「それからふと氣がつくと、これはしたり、僕は眞白い寢臺の上に横つて、傍には看護婦と見知らぬ人が立つてゐる。療養院の一室のことは分つたが、聽けば樹上から墜落した拍子に、輕い腦震蕩を起して人事不省に陷つたのを、擔ぎ込まれたものと分つた。見知らぬ人は院長の神山博士だつたのだ。

少々、極りが惡かつたが、何とも仕方のないところだ。如何して樹から落ちたかと訊かれるから、まさか内海の後を追つて來たとも云へず、僕は自分の捜してる女の人がこゝにゐると聽いたので――と頭を搔き〳〵云つたものだ。すると、院長は戀人でも捜してゐると思つたゞらう。笑ひながら、

「その女は誰です？」と訊く。

「小花百合子といふ女です。こちらにゐるんでせう。」僕は少し、大膽になつて、問ひかけた。ところが、院長は、

「小花百合子——變つた名前だから、忘れる筈はないんだが、そんな女はゐませんね。」

　との答へ。その樣子が嘘を云つてるとも思へない。僕はそこで話題を變へて、樹上から覗いた時二階の室に、何だか見知つたやうな顏の紳士がゐたが、と鎌をかけて訊いてみると、

「あゝ、內海さんのことでせう。」

　といふ。そこで何の用事で來てゐたのかと訊いてみると、姪に當る大木といふ看護婦がゐて、それに面會に來てゐたが、三時間ばかり話して歸つたといふ返事。その大木看護婦に會はしてもらへまいかと賴むと、彼女も患者に附き添うて、夜行列車で東京へ行つたといふ。話の工合が何だか變だ。大木看護婦が內海の姪だといふのは未だいゝとして、その姪の看護婦が、內海の訪ねて來た夜、患者と一緒に東京へ引揚げていつたといふのは、チト怪しいと思つたので、

『その患者は何と云ふんですか？』と訊いてみたんだ。すると、咲ちやん、その返事が如何だ、守島雪子、年齡は十八歲といふではないか！

「えゝ！　守島雪子！　ぢや——」

「さうサ。守島雪子、イクオールの小花百合子さ。」

「私もさう思ふわ。守島夫人が變なお客樣と話してゐる時、小田原と云ふ聲が洩れたので、私、

變だと思つてゐたのよ。ぢや百合子さんの名を變へて、小田原療養院へ托してあつたんだわね？」

「さうだよ。だから、僕、思ふに、內海がそれを知つて、一昨日守島夫人を訪ねて行つて、何か巧いことを云つて、二人で握手をしたんだよ。」

「さうかも知れないわ。と、その看護婦が東京の何處へ來たか判らないの？」

「それが芝の四國町十番地、上田といふ人の家だといふので、僕、品川で下りて訪ねて行つたがそんな家はないんだ。だから、僕、きつとあの守島の家だらうと思つてたんだ。」

「いゝえ、あすこへは來ないの。」

「すると、何處へ伴れ込んだかなア？　さア、また厄介な問題になつて來たぞ！」

「停車場を片つ端から調べてみたら如何？」

「大變だね、自動車の行方を一々訊いて廻るなんて。もつと何か宜い方法はないかしら——」と敏夫は少時考へてゐたが、

「咲ちやん、僕は守島夫人がきつと知つてゐると思ふがね。どうせ內海と相談した上のことに違ひないんだから。」

「左樣だわね。では私は守島夫人の方を探つてみるから、貴下は自動車の方を調べて頂戴——さうね、まだ時間が早いから、私も東京驛へ一緒に行つてみるわ。」

「よし。ぢや、早速取りかゝらう。」

何百臺とも知れぬ東京驛の自動車について、乘客の行方を一々訊いて廻るといふことは、決して容易なことではない。殊に一晩日の夜のことである。それに現在出拂つてゐない自動車もある。無論、調査は失敗に終つた。が、敏夫はそれで兵古垂れはしなかつた。これから更に新橋と品川へ行つてみると云ふ、時計を見ると、何時の間にかもう五時近くなつてゐる。

折角、秘密を探りださうといふ矢先き、守島夫人の御機嫌を損つては大變だ。歸宅時間は四時――一時間も後れてゐるのだ。咲子は大急ぎでアパートメントへ歸つて來た。

「少し齒が痛みますもので……」

咲子のお磯は、守島夫人の顏を見ると、顎の邊を抑へながら、苦しさうに言譯をした。

「齒が痛いんだつて？　私も經驗があるんだが、齒の痛いのは苦しいものね。ぢやお休み、寢臺へついたらいゝでせう。」

叱られるのかと思つたのに、夫人は案外にも親切に勞りながら、自分で別室の扉を開けて、強つても床に就けと云ふ。實は齒なんど少しも痛くはないので、少々氣拙く思ひながら咲子は痛いと云つた言葉の手前、その親切を退けもならず、言はれるまゝに寢床に就くと、

「さう〳〵、齒の痛む時にいゝ藥があつたつけ、今こしらへて上げよう。少し辛抱しておいで――」

守島夫人はさう云つて、自分の部屋へ去つたと思ふと、水を容れた洋杯を持つて來て、懷から白い紙に包んだ粉藥をその中に入れながら、

「これを飲んでごらん、直ぐ痛みが止るから。」

と咲子の前に差出した。咲子は洋杯を手にとつたが、ぷんと變な臭氣がする。それに齒が痛い時、飲服藥を用ひるといふ例を聞かぬ。何か他の藥ではあるまいか？

「怪しいな――」と思つてつてゐると、

「さあ、早くお飲み！　切角、拵へて上げたぢやないか！」

無理にも口へ入れよと云はんばかりの口吻、それでもまだ躊躇つてゐると、夫人の態度が急に變つて、

「お飲みと云つたら、お飲み！　自分で飲めないなら私が飲まして上げよう！」

と手を出しながら噛みつくやうに呶鳴り出した。いよ〳〵變だ。事によると毒藥が入つてゐるかもしれぬ――咲子はつとその手を拂ひのけて、寢床の上に起き直つた。

「否だつて！　この探偵奴が！　それを飲まないなら、これがある！　これが見えないのかね！」

さう云ふと一緒に、咲子の鼻先へぐつと突きつけたピストル――咲子は思はずアッと云つた。

「生意氣な眞似をおしでない。お前が探偵だことは、ちやんと知つてゐるんだ。さア、ピストルが怖いなら、その藥をお飲み！　飲んで朝までぐつと睡つてくれゝばいゝんだ――。」

毒薬の洋杯を

「生命が惜しかない？　えゝ、惜しいならこの薬をお飲み。さア、お飲みつたら――」

守島夫人は恐ろしい顔をして、短銃の引鐵に觸れた食指をビク／＼と動かしながら、きつと咲子を睨みつけた。

「お前さんが警察の探偵だことは、こゝへ來た時から分つてゐる！　お礒なんて出鱈目の名を使つて、私たちの秘密を搜りに來たんだらう。へん、お前さんなんかに、馬鹿にされて堪るものか。さア、これをお飲み、否といふなら、眞實に引鐵を引きますよ。見えないの、このピストルが！」

鼻先に突きつけられたピストルが、どうして見えないことがあらう。恐ろしいその銃口を見詰めながら、咲子は今必死の血路を搜し求めてゐるのである。

まさかピストルの引鐵を引きはしまい。人里離れた場所ではない。多勢の人が間借りをしてゐるアパートメントの中で、ピストルの音がすれば大騷ぎになるは決つたこと。

威嚇だ。脅迫だ。

ピストルを突きつけて、あの毒薬を飲ませようといふのだ。誰がその手に乘るものか！　と云つて、この場をどうしたものであらう？　威嚇でもピストルの下を潜つて逃げ出すわけにはいか

ぬ。さればとて、このまゝ何時までも睨みつこをしてゐることも出來ない。さて如何したらいゝだらう？

窮すれば通ず、思ひ惱んだ咲子の頭に、ふと一つの考が浮んで來た。

「御免下さい――」咲子の聲は顫えてゐた。「私、毒薬を飲んで苦しむより、一と思ひにピストルで射たれた方がいゝんですの。」

「何ですつて！　お前さんはそれを毒薬だと思つてゐるの！　齒の痛みを忘れる睡眠劑ぢやないの。さあ、お飲み！」

「眞實に毒薬ぢやないんですの？」

「誰が毒薬なんど飲めといふもんですか。齒の痛い時には、何も知らずに寢るのが一番いゝと思つて、折角こしらへて上げたぢやないか。」

「ではきつと睡眠劑に相違ありませんのね？」

「いくら云つたつて同じですよ。人の親切を無にするから、ピストルなんど持ち出したんです。さア、一息にぐつと飲んでごらん。痛いことも何も忘れてしまうから。」

「えゝ、ぢや、飲みますわ。」

さう云つて、咲子がそうと左の手を差し出すと、守島夫人はやつと安心した風で、傍の卓にピストルを置いて、その手でコップを取上げた。

コップを受取つた咲子は、觀念の眼を閉ぢて、そつと口許へ持つて行つた。と思つた瞬間、パツと投げられたコップ――毒藥か睡眠劑か、白い粉藥を溶した液體は、守島夫人の面上に、眼と云はず、鼻孔と云はず、散りかゝつた。

アッ！　と云つた時は既に遲い、つと伸びた咲子の手は、電光石火、テーブルの上のピストルを摑んで、寢臺を下に飛び下りるも一緒、扉を楯に銃口をぐつと夫人の胸先に突きつけた。

主客顚倒、勝敗の數は一瞬にして逆轉したのだ。

「かうなつたら、もう私のものよ。いくらぢたばたしたつて仕方がないでせう。抵抗へば、私、本當に引鐵を引くんだからそのつもりでゐて頂戴！」

守島夫人の面上に、むら〳〵と憤怒の表情が燃え上つた。咲子は今にも荒れ狂ふ野猪のやうに、自分を目蒐けて飛びかかつて來るではないかと思つた。が、それも數秒、意外にも夫人の態度はがらりと變つて、その口許には薄氣味惡い微笑さへ浮んで來た。

「お前さんも、案外味な眞似をするのね、若いにしては感心だ。けど覺えておいで、何時まで經つたつて忘れはしないから。」

「えゝ、何時までなと覺えてゐるがいゝわ。それは御自由です。私だつて、あなたのやうな惡黨を取つちめたことは、一生忘れはしないんだから。」

「何だつて！　その言葉を忘れないでおいで！」

薄氣味惡い眼光。夫人は顏を拭ふたハンケチを口惜しさうにぎゆつと握りしめた。

そこで沈默の數分があつた。

やがて咲子が口を開いた。

「二人で達摩さんのやうに睨めつこをしてゝも詰りませんわね。私、あなたに少しお話したいことがありますの。今度は私の云ふことを聞いて下すつてもいゝでせう。その椅子へお掛けなさい――」

夫人が澁々と腰を下した。咲子はピストルを片手に、左の手を寢臺の端に突きながら、寸分の隙も見せず、

「あなたは、先刻、私を警視廳の探偵だと云ひましたね。あれはあなたの思ひ違ひですよ。私は警視廳なんかに、ちつとも關係はないんです。」

「ぢや、何處かの私立探偵の手先だらう？」

「いゝえ、私立探偵の手先なんて、そんな安つぽい人間ぢやありませんよ。」

「それぢや、田舍娘になんか化けて、如何して人の祕密を搜りに來たの？　隱したつて駄目だ。お目見えに來たその日から、もうちやんと判つてゐたんだもの。」

お目見えに來た日に自分の素性が判つてゐた――嘘だ。あの水谷少年が祕密を喋舌る筈はない。宜加減な當て推量を云つてるのだ。

「判つてゐたつて構ひませんわ。とに角、私は警視廳や私立探偵の手先ぢやないんですから。でも、あなたの祕密を探りに來たことは事實です。そして、その祕密を捜り出したことも事實ですわ。」

「私の祕密を探り出したんだつて？　何の祕密をです！」

「それを聞きたいと仰有るの？　ぢや云つて上げてもいゝわ。守島雪子といふ女をあなたは御存知でせう？」

「えゝ！」

夫人の顏色がさつと變つた。

「御同姓だけど、あなたの親戚でも何んでもない筈ですわね。もつとはつきり云へば守島雪子といふのは假の名で、本當の名は他にあるんでせう！」

「知らない！　守島雪子なんて、私聞いたこともない！」

「口では知らないと云つても、あなたの顏にちやあんと書いてあるから駄目ですよ。尤もさうですわね。一昨日からはもうあなたとの關係は切れて、その代り雪子さんは內海の手へ渡つたでせう。でも、內海とあなたとの關係は、まだ斷たれてはゐない筈です。」

「ど、どうしてそんなことを知つてゐるんです？」

守島夫人の顏色は土のやうに蒼褪めて、聲はわな〳〵と顫えだした。咲子の言葉は、否應云はず夫人の急所を衝いたのだ。

「どうして知つたつて、そんなことは宜いぢやありませんか。それよりも、私、あなたに相談したいことがあるんですが、聽いて下さらない？」

「何です？　相談つて？」

「祕密を賣つてもらひたいんですわ。」

「祕密を？」

守島夫人が目を瞠つた。

「えゝ、でも、それはあなたの祕密ぢやありません。守島の隱れ家を敎へてもらひたいのです。それを敎へて下すつたら、あなたのことは何にも知らないことにして、お禮として一萬圓進呈しますわ。」

「一萬圓！　お前さんが？」

「いゝえ、私にそんなお金があるものですか。あの人の行方を搜してゐるお金持の親戚の方が、出して下さることになつてゐるんです。」

「あの人の所在が判つたら、一萬圓私にくれるといふの？」

「えゝ、左樣ですわ。行方さへ判れば何時でも現金で一萬圓出して下さるんです。そしてあなたのことは、何にも知らぬことにして濟して上げると云つてゐますのよ。どうです、一萬圓で內海

の隠れ家を教へて下さらない。宜いお金儲けぢやありませんの？」

「さアね、眞實に一萬圓の金をくれるならだけど――」

「眞實も噓もあるものですか。教へて下さつたら、私、その親戚の方のところへ一緒に行つて、その場でお金をもらつて上げますわ。」

「………」

慾に目がくれたか、夫人は物も云はずに考へ込んだ。咲子の計畫は圖に當つた。敏夫の冒險談から思ひついた宜い加減な想像と推理が、巧く圖星を指したのだ。守島夫人と内海との間に、深い關係のあることが先づ判つた。その内海が小田原療養院からつれ出した少女、守島雪子が問題の小花百合子であることも疑ひない。

女中に住み込んだ咲子の目的は、それだけで既に十分達しられたわけである。だが、その上に内海の隠れ家が判明して小花百合子の行方が判るなら、それに上越すことはない。

内海の隠れ家も、夫人は知つてゐるらしい。知つてゐればこそ、咲子が口に出まかせに言つた一萬圓の餌に目がくれて、思案に耽つてゐるのである。

『その親戚の方と云ふのは、東京にゐるの？」

夫人がやつと口を開いた。

「本郷にゐらつしやるんです。自動車で行けば二十分とはかかりませんわ。」

「その人はお金持なの？」

「えゝ、何十萬圓といふお金持ですわ。一萬や二萬のお金なんど、何とも思つてゐないんでせう。私が行つて百合子さんの居所が判つたと云ひさへすれば、お金は直ぐにも出して下さいますわ。」

「それが間違ひないのなら、教へて上げてもいゝんだけど……」夫人は鳥渡言葉を切つた。「でも、内海さんにも石井さんにも絶對に祕密を守つてくれるでせうね。」

「えゝ、それは無論ですわ。あなたの迷惑になるやうなことは、決してしませんわ。」

「きつとですね？　では、教へて上げませう。内海さんの住居は牛込の――」

後の言葉が出ようとした時、夫人はつと口を噤んで、扉の方に目を遣つた。

「足音がしなくつて？」

「いゝえ、足音なんかしませんわ。」

何に驚いたか、夫人は眞蒼い顔をして、きよろ〳〵と四邊を見廻してゐる。

「大丈夫ですのよ。誰が斷りなしに入つて來るものですか。」

「だつて、壁に耳ありつて云ふんだから、油斷は出來ない――」

「ぢや、低い聲で云へばいゝんですわ、牛込の何處なんです？」

「でも、私、何んだかあの人が、その邊で立ち聞きしてるやうな氣がするんですもの……」

「あの人つて、内海のことですか？」

「いゝえ、内海なんかと違つて、もつと〳〵恐ろしい人物なんです――あなたは知らないでせう。石井と云つて――おや！」

魂消るやうな恐怖の叫び。不意に右手を擧げて、扉の方を指したと思ふと、守島夫人は「うーん」と云ひ樣、よろ〳〵と床の上に打倒れた。

驚いた咲子は、夫人を顧みる閑もなく、くゝと振返つた。

と、そこに三宅辯護士と敏夫の二人が立つてゐた。

物言ひたげな口許

「これは心臓痲痺だ。ブランデイを持つて來たまへ！　葡萄酒でもいゝ！」

打倒れた守島夫人の眞蒼い顏を見ると一緒に、三宅氏が叫んだ。と同時に、入口に立つてゐた敏夫が部屋の隅にある食器棚の方へ駈け出さうとした。

「敏夫さん、こゝには何もないの。下へ行つて給仕の水谷さんに頼んで頂戴！」

敏夫が慌てゝ廊下へ飛び出すと、二人は夫人を抱へて寝臺の上に寝した。そしてタオルに水を浸して額に載せたり、手足を擦つてみたりしたが、何の效目もなかつた。

「脉は打つてるが、危いナ！」手の脉搏を診てゐた三宅氏が心配相に呟いた。「早くブランデイが來るといゝが……」

恰度、そこへ敏夫がブランデイの半分位入つた壜を持つて戻つて來た。そして咲子が靜に頭部を持上げると、三宅氏が閉ぢてゐる唇を開けて、强烈な酒を流し込んだ。すると、その刺戟に呼び醒されたか、夫人の瞼が微に開いた。

「もつと、召上れ。」

咲子が食器棚から持つて來たコップに、ブランデイを注いで、押しつけるやうに口許へ持つて行くと、夫人は云はれるまゝに、半ば無意識に二口三口續け樣に口に含んだ。と、今まで血の氣もなかつた兩の頰に、だん〳〵と紅味がさして來て、五分と經たないのに、まるで奇蹟に蘇つた人のやうに、夫人の身體がむつくりと寝床の上に起き上つた。と、思つた一瞬、

「胸が苦しい！　胸が――」

と叫ぶも一緒、苦しさうな呻吟と共に、またもやぐにやりと横になつた。

咲子と敏夫が思はず呼吸を秘めると、三宅氏はつと夫人の胸に手を當てゝ、じつと樣子を見てゐたが、

「もう大丈夫です。このまゝ、そうとしておいて、次の部屋で少時待つことにしませう。」

と云ひながら、自分から先に部屋を出た。

「でもお醫師さんを招んだら如何でせう？」

咲子は夫人がちつとも早く回復して、その口から先刻の話の續きを語つてもらひたかつたのだ。

「醫師が來ても格別仕方がないでせう。心臓の皷動も聞えてゐるんだから、あのまゝそつとしておけば、今に快くなりますよ。」三宅氏は大して心配もしてゐない風で、「それにしても一體どうしてあんなことになつたんですか？」

どうして夫人が卒倒したか。その次第を説明すれば、自然小花百合子のことに及ぶ、秘密の裡に捜索してゐる事柄を三宅氏に打開けてもいゝだらうか。咲子はちよつと思案に惑ふた。でも、考へてみれば三宅氏は有名な犯罪學者で、知名の士である。それに一昨日自分にこの家を出るやうにと云つて耳打ちをしてくれたあの親切な言葉から判斷すれば、守島夫人を怪しい女と睨んでゐることは間違ひない。或は小花百合子のことまでも知つてゐて、自分達と同じく内密で調べに來たのかもしれぬ。いづれにしても、大體の話は耳に入れても差支へのない筈。

さう思つた咲子は、東京驛で敏夫と別れて、アパートメントへ歸つて來てからの出來事のあらましを物語つた。

話を聞いて、喜んだのは敏夫である。咲子の冒險に感嘆してか、それとも意外な事實に驚いてか、ぢつと腕を組んで考へてゐる三宅辯護士にはお構ひもなく、

「惜いことをしたね。ぢや、僕たちが今一分遲く來れば、宜かつたんだね。」

「さうよ。今ちよつとゝ云ふところで、貴下方の足音がしたんですもの。」

「殘念なことをしちやつたなア。僕は水谷少年からの電話で飛んで來たので、そんなことを考へる餘裕はなかつたんだよ。」

「さう、水谷さんが電話をかけて？」

「あゝ、咲ちやんが危いから直ぐ來てくれろと云ふ電話だつたんだ。詳しいことは分らないから、僕はいきなり飛び出して來たので、様子を窺ひながら、そつと二人で入つて來たんだ。そんなことゝは少しも知らないものだから——」

「殘念でしたね、實際。」三宅氏が始めて口を開いた。「しかし守島といふ女は、金に目のない女らしいから、快くなつたらまた話すでせうよ。」

「私もさう思ひますの。それで、もし嫌な顔でもしたら、何處かで一萬圓のお金を借りて來て見せてやれば、直ぐ喋舌つてしまひますわ……だけど、如何した關係でせうね。内海よりも石井の方をずつと恐がつてゐるのよ。」

「石井？　内海の事務所で咲ちやんが會つた男ぢやないの？」

「さうよ。左の眉根に大きい黒子のある——」

咲子はさう云ひかけて、ちらと三宅氏の顔を見た。最初、名刺を受取つた時、おやと思つたあの驚駭の感をふと思ひ出したのだ。が、何度見ても、何處となく似通ふた顔である。もし、三宅

氏の左の眉根に黒子があれば、何時何處で會ふともあの石井と見間違へるに違ひない。でも、法曹界にその人ありと知られた三宅氏と、怪物石井とを苟且にも混同にして考へるのは、禮を失するも甚しいと云ふもの、怪しげな聯想は瞬時の内に、咲子の腦裡から消え去つた。

「石井といふ男のことを、何か云つてゐましたか？」

三宅氏が卷煙草に火を點けながら訊いた。

「いゝえ、何とも云つてはゐませんでした。たゞ恐しい人物で、何處で盜み聞きをしてゐるかも知れないからと云つて、急に口を噤んだのです。」

「ふむ。すると夫人の祕密でも、詳しく知つてる男ですね。」

「さうかも知れませんわ。」

その時、次の部屋から、何かしら物を云ふらしい夫人の聲がした。それを聞くと、三宅氏はつと椅子を立つて、靜に靜に扉を開けた。敏夫と咲子がその後から拔足差足、枕頭に近づくと、夫人は眼を半眼に見開いて、何かもの言ひたげた口唇をびく〳〵と動かしてゐる、咲子はじつと顏を近づけた。

「ゐて――おくれ、こゝに――ゐておくれ。」蚊の鳴くやうな呟きが聞えた。

まだ何か云つてゐるらしい。唇が動く、咲子は一層口許近く耳を寄せた。

「いし――ゐさん……」

聲は途絶えた。しかし、苦しみの中から、何か物云ひたげな藻搔き足搔く苦惱の表情がありありと見てとれた。

「もう、そろ〳〵十時です。」

三人が再び別室へ歸つて來ると、三宅辯護士が時計を見ながら云つた。

「三人で何時まで起きてゐても仕方がないから、交代に休むことにしませう。咲子さんから先づお休みなさい。疲れてゐるでせうから。」

「いゝえ、私ちつとも眠くありませんの、どうかお寢み下さい。」

「ぢや、君は？」

「僕もまだ寢かないんです。何時も宵つぱりの方ですから。」

「しかし、徹夜は出來ないから、交代で寢なくては、續きませんよ。」

「大丈夫ですわ。私、こんなに興奮してゐて、とても寢られる筈はありませんから、一人でゝも起きてゐますわ。」

誰も先に眠らうといふ者がない。興奮してゐるのは、咲子ばかりではないと見える。

それではお茶でも入れようといふので、咲子が臺所の方へ立ちかけると、突然、入口の扉が開いて、水谷少年が立派な紳士を案内しながら入つて來た。

「おや！」紳士の顏を見るも一緒、敏夫が頓狂な聲を擧げた。「神山博士ぢやありませんか！」

何といふ奇縁奇遇であらう。一昨日の晩、内海の後を追うて忍び込んだ小田原療養院の院長、しかも樹上から墜落して親しく看護を受けたその神山博士が、時も時、所も所、突然こゝへ姿を現さうとは――

博士の方でも、意外な再會に驚いたらしく、三人の顔をじろ〳〵と見較べながら、少時は無言のまゝで立つてゐたが、やがて敏夫が博士に二人を紹介して、守島夫人が重態の旨を告げると、博士はいよ〳〵驚いた顔をして、

「それは意外ですな。實は上京した次手に守島さんに少々話したいことがあつて、お訪ねしたんですが――」

と拙いところへ飛び込んだと云つた風の口吻、敏夫はそれに頓着なく、

「どうでせう、先生、鳥渡診察していたゞけませんでせうか。ちつとも早く治つてもらひたいんですが。」

「さア、お知合の仲だから診ては上げるが……」博士は困惑の面持をして、「僕は神經系統の病氣が專門だから、十分なことは分らないかも知れませんよ。」

「だつて診ていたゞくだけで結構ですわ。私たちには如何して手當をしたらいゝか、それさへ分らないんですもの。では、どうか此方へいらつして下さいまし。」

咲子は扉を開けて、神山博士を寢臺の傍に案内した。が、博士は目を近づけて夫人の顏を一目

見ると、

「や！」と叫んだ。「これは絶望です。脈搏を檢るまでもありません！」

敏夫と咲子の口をついて、思はず驚駭の叫びが洩れた。苦辛慘澹、互ひに生命掛けの冒險まで敢てして、やつと摑み得た祕密の端緒。その緒をこれから手繰り出せると思つて喜んだのは夢。守島夫人は祕密を胸に包んだまゝ、遂に返らぬ旅についたのだ。

起死回生の術はないものか。守島夫人を今一度呼び返して、怪漢内海の所在を聞き出すことは出來ぬものか。

「先生、注射をしても駄目でせうか？」

咲子が悲痛な聲で訊いた。

「もう方法がありません。心臟の働きが全然止つてゐます。」

三人は暗然として聲を呑んだ。

三

神山博士の物語

「守島さんが、こんなことにならうとは意外でした。隨分元氣のいゝ女でしたが、人間の生命と

いふものは分らんものですナ。」

守島夫人がいよ〳〵絶望ときまつて、四人が次の部屋へ引揚げて來ると、神山博士が深い嘆息と共に云つた。すると三宅辯護士が、

「實際ですね。私はつい近頃お知合になつたので、よくは知らないが、婦人にしては珍しくしつかりした勝氣の女のやうでしたが……多分、心臓に痼疾でもあつたでせうか？」

「さア、そんなことかも知れませんね。私もさう度々お目にかゝつたわけでもないので、詳しいことは知りませんが……」

博士の言葉が途切れると、ちよつと話の緒がなくなつて座が白けさうになつた。と、それを待つてゞもゐたやうに、敏夫が口を開いた。

「でも、先生はどうして守島夫人を御存知です？」

「如何してつて、君にはあの晩、説明したつもりだが、私は守島夫人の姪御さんを預つてゐたんだ。」

「あゝ、あの守島雪子さんのことですか。これは初耳ですね。僕は雪子さんは内海の姪だとばかり思つてゐました。」

「あの人にも姪に當るさうだ。つまり守島夫人と内海さんとは伯父と姪の關係なんでせうね。とに角、守島夫人から内海さんは自分の親戚だから、安心して雪子さんを引渡してくれと云つて來

たから間違ひはない筈です。」

「ぢや、左様かも知れませんが——」敏夫は今こゝで間違ひを正しても仕方がないと思ひながら、「それで、守島夫人から雪子さんを預かつたのは、何時頃のことなんです？」

「さア、あれは一昨年の春、三月の初か四月の初め頃のことゝ思ふね。」

「病氣は何でした？　普通の精神病ですか？」

「いや、頭腦はしつかりしてゐるんだが、非常に珍しい記憶喪失といふやつで、過去の記憶が全然無いんです。それも守島夫人の話では、一昨々年の春でしたが、敦賀の沖合で鳳榮丸といふ汽船が暗礁に乘り上げて沈沒したことがありましたね。あの船へ運惡く乘り込んでゐて、九死に一生を得て助かつたさうです——」

敏夫と咲子が思はず顔を見合した。神山博士はそんなことには頓着なく、珍しい記憶喪失者の話をつゞける。

「ところが、その遭難の際、大分ひどい衝動を受けたと見えましてね。私の療養院へつれてこられた時は、まるで氣が拔けたやうで、何を訊ねても返辭もしないといふ有様で、到底望みはないと思ひましたが、だん〳〵と氣が鎭まつて來るにつれて、話もすれば物事の判斷も出來ることが分りました。でも、不思議なことには遭難當時の記憶といふものがまるつきり無いのです。」

「ほう！」敏夫と咲子の口から、思はず驚きの聲が洩れた。

「まつたく珍しいことなんです。尤も醫學上ではいくらも例のあることで、強く腦を打つとか、非常な衝動を受けるとかいふ場合に、往々過去の記憶を失ふことがあるものですが、私としては初めて取扱つた珍しい患者なので、隨分いろ〳〵と手をつくしてもみました。それに守島さんもたつた一人の姪御さんなので是非舊のとほりにしてやりたいと云つて、入院當時は二月程、御自分で附添つて看護をせられましたが、遂に駄目だつたのです。」

「すると、まつたく記憶がないんですか？」

三宅辯護士が興味深げに訊いた。

「さうです。大正十一年二月以前の記憶は全然白紙も同然です。その後の記憶は普通人と少しも變りはありませんがね。」

「しますと、一番古い最初の記憶は何でございますの？」

今度は咲子が訊いた。

「他の生存者と一緒に敦賀に上陸したことをぼんやりと覺えてゐるだけです。それより以前のことは、自分が何處から來たか、何といふ汽船に乘つてゐたか、まるきり忘れてゐるのです。それどころぢやありません。守島雪子といふ自分の名前まで忘れてゐたんですから。」

「で、その記憶を呼び返すことは出來ないものでございませうか？」

「さア、いろ〳〵と手はつくしてみましたが、望みがないやうです。守島夫人も出來ることなら、どうにでもして記憶を呼び返すやうにしてやりたいと云はれましてね、一度もわざわざ敦賀まで伴れて行つたんです。それも、かういふ患者は記憶を失つた當時の狀況を思ひ出させるのが一番いゝと思つたので、私がおすゝめしたのですが、やはり駄目でした。どうも時期を待つの他はないでせうね。」

「それで話は變りますが、雪子さんは守島夫人を伯母さんと呼んでゐましたか？」

敏夫が意味深長な質問を出した。守島雪子卽ち小花百合子であることは、最早、疑ひの餘地もない事實ながら、なほ念のためにそれを確めようといふ肚である。

「さうですね。自分の名まで忘れてゐた位ですから、最初の間は守島さんの顏も忘れてゐたでせう。伯母さんとは呼びませんでしたが、その中に思ひ出したのか、それとも敎へられて覺えたのか、後には呼ぶやうになりましたよ。」

「二人の間にはほんたうの伯母さんと姪と云つたやうな親しみがありましたか？」

「えゝ、守島さんは他に親類の者はないからと云つて、自分の子のやうに可愛がつてゐましたがね。さうですね、入院せられてから半歳餘といふものは、傍も離れぬやうにして附添つてゐましたが、その後、看護婦を附けるやうになつてからも、週に一度位はお土産を持つて必ず見えられたやうです。」

「あの內海といふ人も前々から療養院へ來てゐましたか？」

敏夫はだん／＼と質問の矢を深く突き進めて行く。相手が年の若い青年だけに、神山博士の方ではその問ひに深い意味があらうとは少しも感附かないらしい。

「いゝえ、內海といふ人は初めて見えられたのです。前にもお話したやうに、守島さんからの紹介狀を持つ一、雪子さんを引取りに來られたので、お目にかゝつたのは初めてゞす。」

「餘計なことまで訊くやうですか、その紹介狀には雪子さんを渡してくれと書いてありましたか？」

「さうです。つまり雪子さんは古い記憶が無いといふだけで、他のことは普通の人と同じですから、引取りたいと思ふ。それで自分は今忙しいから親戚の者で、やはり雪子の叔父に當る內海といふのを遣るから、看護婦と一緒に退院さしてもらひたいといふ手紙だつたのです。」

「どうも怪しいですね。たゞ今のお話では、守島夫人には雪子さんより他に親戚はないとのことでしたが、新しく內海といふ叔父さんが出來たわけですね？」

「……」神山博士がグッと詰つた。いかにも左樣である。他に身內の者は誰もない伯母と姪との仲だと云つたのに、急に叔父の出來るやうな道理がない。「成程、これはチト怪しいですな。しかし守島さんは雪子さんを伴れて來られた時、確にさう云ひましたがね。」

「それは嘘ですよ。內海が雪子さんの叔父さんだなんて、眞赤な嘘なんです！」

敏夫は誰に遠慮もなく大きい聲で云つてのけた。

「嘘だつて、でも守島さんの紹介狀には明にさう書いてありましたがね……」

「それや、あなたと雪子さんを欺すためにさう書いたんです。內海と雪子さんとは見もしらぬまつたくの他人です。それに內海といふ奴は大變な惡漢で、雪子さんを連れて、もう何處かへ姿を晦してしまつたんです。」

「えゝ？　眞實ですか、それは？」

今度は神山博士が驚きの聲を擧げた。

「眞實ですとも。あなたは內海の家が三田の四國町十番地だと仰有つたでせう。僕、あれから東京へ歸ると直ぐ四國町へ行つて調べてみたんだけど、十番地に內海なんて家はありませんよ。出鱈目を云つといて隱れてしまつたのです。」

「それは怪しいですな。私は東京へ來たついでに、變りはないか樣子を訊かうと思つて、こちらへお訪ねしたんですがね。すると守島さんも亡くなられたとすると、雪子さんの所在は判らなくなつたわけですね？」

「左樣です。雪子さんは行方不明になつたんです？」

「どうも怪しい。合點がいかん——」神山博士はぢつと何事か考へ込んでゐたが、「左樣云へば、成程、退院をして行く時の雪子さんの樣子が變だつたやうな氣がしますよ。しかし、君達はどう

して雪子さんのことを、そんなに心配してゐるのです？」

「それには大分理由のあることで、今はまだ申上げられませんが、とに角、僕達は雪子さんの所在を突き止めるために、非常な苦心をしてゐるのです。今頃、雪子さんは悪漢たちのために、きつと苦しい目に會はされてゐるでせう……」

敏夫の言葉が終るか終らないに、入口の扉をトン／＼と叩く音がした。

「誰方？」

咲子がさう云つて立ち上ると、扉がすつと開いて、給仕の水谷少年が顏を出しながら、

「今、自動車の運轉手がこんな手紙を持つて來ましたが。」

と云つて一通の手紙を差出した。手に取つて見ると、小形の西洋封筒の表に、「守島樣へ——内海」とある。

咲子は急いで封を切つた。と、中から出て來た用箋の文言は、

至急お目にかゝりお話いたしたきこと有之、自動車を差出し申候。もし、お差閊へも候はば御信頼ある代理の方にてもよろし、即刻御遣し下され候樣願上候。

内海拜

慌てゝそゝくさと認めたらしい筆の跡、咲子と敏夫が思はず目と目を見合した。

「あたし行つて來ようかしら？」

「いや、僕が行かう！」

「大丈夫？」

「大丈夫さ。家を見とゞけてから、飛んで歸ればいゝんだもの。」

「では、行つて頂戴。」

「オーライ。」

ハテ行先は？

「内海さんからの迎への自動車だね？」

敏夫は階段を驅け下りると、アパートメントの入口に待つてゐる自動車の傍へ近づきながら訊いた。

「左樣でございます。奧さんのお代理の方でございますか？」

運轉手が丁寧な言葉で答へた。

「あゝ、奧さんは急病で臥つてゐられるから、僕が代理で伺うんだ。」

「では、どうかお召し下さい。」

敏夫が扉を開けて中に入ると一緒、運轉手はハンドルをぐつと撚つて、自動車はそのまゝ電車通りを左へ、數寄屋橋から日比谷へ、公園前から左へ曲つて芝方面へ向けゝ駛つてゆく。「ハ、ア、やつぱり芝の方だナ……」

敏夫はひとり心に首肯いた。それが何處であらうと宜い。とに角、自動車は内海の隱れ家へ向けて全速力で走つてゐるのだ。自分と咲子が苦心に苦心を重ねて捜し廻つてゐる小花百合子——その百合子が俘虜の身となつてゐる怪漢内海の隱れ家が、刻々として近づきつゝあるのだ。

何といふ愉快なことだ。苦は樂の種。自分が樹上から墜落して昏倒すれば、咲子はピストルを突きつけられて嚇される。さうしたいろんな苦しみも、今こそやつと酬ひられる時が來たのだ。

自動車が停る。内海の家を見とゞける。何に喰ぬ顏をして内海に會つて、顏を見知られてゐないを幸ひ、夫人への傳言を聞く風をして外へ飛び出す。その足で警察へ飛び込んで事の次第を報告する。それだけで、もう十分なのだ。その一時間後には、守島雪子、即ち小花百合子を怪漢の手から奪ひ返して、彼女の口からレガリア金剛石の所在を聽き出すことが出來る——

敏夫が愉快な空想にひたつてゐると、自動車がくるりと曲つた。見ると櫻田本郷町である。やがて虎の門を過ぎた。お馴染の活動寫眞葵館の前を通つた。

はテ？　芝の方ではなかつたのか？　さう思ふ間もなく自動車は赤坂見附を左へ、青山一丁目を突破して、尚も全速力で走りつゞけてゐる内に、急に四邊が寂しくなつたと思ふと、何時の間

にか電車通りを離れて、薄暗い通りへ入つてゐた。

もう内海の家も遠くないぞ——でも、一體こゝは何處だらう？

敏夫が扉から目まぐろしく過ぎ去る兩側の家並をのぞいてゐると、自動車は大きい石の門を潛つて、玉川砂利を敷き詰めた前庭を靜に、眞暗い玄關の前に停つた。

たうとう内海の家へ來たのだ。百合子さんの匿はれてゐる家を突き止めたのだ——さう思ふと、敏夫は運轉手の手も待たず、自分から扉を開いて飛び下りた。見ると、和洋折衷のかなりに大きい建物であるが、窓にも障子にも、燈火は一つも點いてをらず、何だか薄氣味惡い屋敷である。

敏夫が聲をかけようとすると、内から足音が聽えて、電燈がパッと點いた。と同時に、玄關の硝子戸が半分位開いて、小間使らしい女が顏を出した。

「誰方樣でございませう？」

「僕、守島さんの代理で伺つた村井といふものですが——」

内海が自分の名を知つてゐる筈はないと思つたものゝ、萬一の用心に敏夫は變名を使つて何にくはぬ顏で答へた。

「では、守島さんの奧さんはお見えにならないのでございますか？」

「ハア、急病でお伺ひすることが出來ませんので。」

「左樣でございますか。それでは、どうか此方へ――」

守島夫人が來なければ、誰か代理の者が來るといふことを主人から聞かされてゐたであらう。女中は何の怪しむところもなく、敏夫が靴を脱ぐと先に立つて、薄暗い廊下を眞直ぐに、階段を踏んで二階へ、西洋間の扉を開けて、少時こゝに待つやうにと云つた。

敏夫は云はるゝまゝに、つか／＼と部屋の中に進んで、粗末なテーブルを前に椅子に腰を下した。

女中の足音が階段の下に消えてゆくと、四邊はしいんとして物音もない、敏夫は主人を待つ間を、じろ／＼と部屋の周圍に目を配つた。隣の部屋へでも通じてゐるであらう、向ふの片隅に今一つ扉があつて、その右手より背の高さ位のところに小さい窓がある。周圍の壁は震災當時のひび割をそのまゝ修繕した跡もなく、裝飾と云つてはその壁の上部に額縁に入つた古風な外國の風景畫がかゝつてゐるきり。それのみか、部屋の隅々や、頭上に垂れた電燈を見ると、い、くもの巣が一面に糸を張つて、まるで掃除などした樣子もない。

「こいつ少々怪しいぞ？」

敏夫はふと小首を傾げた。これだけの邸である。他に部屋はいくらもある筈。それだのに、いかに自分が守島夫人の代理とは云へ、こんな汚ない部屋を選んで通すとは合點がゆかぬ。これには何か理由があるかもしれない……

さう思つて、今一度部屋の中を見廻した時、階段を踏む足音が聽えた。最初は、女中がお茶でも運んで來るのだと思つた。しかし、それにしては足音が重過ぎる。女の足音とは思はれない。すると、あの內海が自分でやつて來たのかもしれぬ。

四日前に東京驛から小田原まで尾行したあの怪人物內海と、いよ／＼面と向つて顏を合す時が來たのだ。さう思ふと、敏夫は急に尋常ならぬ心の緊張を覺えて、扉の開くのを今や遲しと待ちうけた。

階段を昇りつくした足音は、やがて扉の前まで來た。敏夫はときめく心臟を押へながら、きつと扉を睨みつけた。

その瞬間、開くと思つた扉の鍵孔がカチリと鳴つた。と同時に、カラ／＼と聲高い笑ひ聲がして、重い足音はそのまゝ階段の方へ歸つて行く。

椅子を離れるも一緒、敏夫は扉へ走り寄つた。が、既に遲い。鍵孔には嚴重な鍵が下りて、扉がビクとも動かないのだ。

「しまつた！」敏夫は思はず聲を擧げた。

敵を釣らうとして、却つて敵に釣られたのだ。流石は惡漢、自分が僞りの使者であることを看破したのか、それとも最初からの計畫か、巧みにもこの密室に連れ込んで、まんまと監禁してしまつたのだ！

敏夫は地團太を踏んで口惜しがつた。

餘りにも深入りをしすぎたのだ。内海の隠れ家さへ突き止めれば、それで目的は達したものを

――それには自動車が停ると一緒に、足を返せばよかつたものを――つい、深入りを仕過ぎたばかりに、惡漢内海の陥穽にかゝつてしまつたのだ。

美しい少女

敵を計らうとして、却つて敵のために計られたのだ。内海の隠れ家を突き止めたゞけで、逃げて歸ればよかつたものを、つい深入りをしすぎたばかりに、捕虜の身となつてしまつた。

口惜しい、殘念だ！　と地團太を踏んでみても、今更どうなるものでもない。それよりも、如何かして逃げ出す途はあるまいか。片隅にある扉、背後の壁に開いた小さい窓、その何方からでもいゝ、もし逃げ出すことが出來るなら……

敏夫は一縷の望みをいだいて扉の前へ近づいた。そしてハンドルを握つて、そうと廻すと鍵はかゝつてないと見えて、扉はわけなく手許へ開いた。

躍る心を抑へながら、敏夫は薄暗い廊下へ向けて、一歩足を踏み出した。と、ふと手先に觸れた冷たい鐵棒。おや！　と思つて、ぢつと眼を近づけてよく見ると、同じやうな鐵の棒が、三本、四本、五本――

算へてゆけば八本もある。たゞの鐵棒と思つたは誤り、それは嚴重な鐵の格子であつたのだ。すると、こゝは單なる密室ではなくて、人を監禁するために、特別に設けられた恐ろしい牢獄であつたのか！

しかし今更、それと氣がついても仕方がない。取り殘された一つの希望は、見上げるばかりの高さにある壁の上の小窓である。

敏夫はテーブルの傍の椅子を持つて來て、それを踏臺に窓の外を覗いてみた。

右の方は高い建物にさへぎられて見えないが、左の方は遠い遥かの彼方まで一眸の裡に見渡される。その中央に廣い道路を挾んで、兩側に明い電燈が果しもなく續いてゐる。電車線路のやうでもないのに、さて何だらうと、電燈の盡きるところを見ると、こんもりとした黒い森。

敏夫はやつと氣がついた。それは明治神宮の參道なのだ。すると、自分の今ゐる位置は、青山六丁目の附近である。

が、それは先づよいとして、窓の下はどんなになつてゐるだらう。直ぐ下に屋根があるか、それとも芝草の庭でもあれば、逃げ出す望みもあるのだが――さう思つて、ぢつと眼の下を見ると、そこは碧々とした水。

池だ！　きつと池に違ひない。

うつかり逃げ出して、池の中に落ち込んでは、その場で捕るにきまつてゐる。療養院の場合と

異つて、惡漢に捕まつたら、それこそどんな目に遭はされるかもしれない。急いては事を仕損ずるとは、かうした場合をいふのであらう。

自重が一番、どうせ監禁された身だもの、冒險ついでだ。度胸をきめて夜の明るのを待つてやれ！

さう肚をきめてしまふと、何にも慌てることはない。敏夫は椅子を舊のところへ持つて來て、ゆつたりと腰を下し、テーブルに凭れかゝつて、そのまゝぐつすりと眠つてしまつた。

×　×　×　×

コツ〳〵！　コツ〳〵！

何だか扉を叩くやうな音がする。敏夫はふと目を覺した。何時の間にか夜は明けはなれて、壁の小窓から朝の光がまぶしいばかりに射してゐる。腕時計を見るとかつきりと八時半。

コツ、コツ、コツ！

やつぱりノックの音である。それも、耳をすますと、あの鐵格子の入つた扉を叩いてゐるらしい。

敏夫は大きい欠伸を一つして、むつくりと椅子から立ち上るとつか〳〵と扉の前に近づいた。そしてハンドルを掴んで開けようとして、ふと考へた。

もしかすると、惡漢内海がピストルでも構へて待つてゐるかもしれぬ。犬死はしたくない。用心に亡びなし――

さう思つて、扉をそうと細目に開けて、向うを覗くと、これは意外！　鐵の格子を隔てゝ、扉の外に立つたのは、恐ろしい惡漢の姿ではなくて、邪氣ない顏をした十七八の美しい少女であつた。

二人の眼と眼がぱつたり會つた。

互ひに物言ひたげな顏――しかし、言葉を交すには、餘りにも意外な初對面であつたのだ。二人は少時の間、互ひの顏と顏とを見合して、無言のまゝ身動きもせず立つてゐた。

「お辨當をお上りなさいまし。」

やつと彼女が口を開いた。そして手にした朱塗りの辨當箱を、鐵格子の間から、敏夫の前に差出した。

敏夫は默つてそれを受けた。何か云はうとしたが、言葉が口から出ない中に、彼女はそのまゝ足を返して、廊下を向うへ行つてしまつた。

樂しい夢の途中で、目を覺されたやうな、殘り惜しい氣持でテーブルの傍へ戻つて來た敏夫は、辨當をそこに置きながら、自分が捕虜の身であることも忘れて、恍惚として今の少女の姿を、幻に描いてゐた。

何といふ可愛い邪氣ない少女であつたらう！　顏や姿の美しさよりも、心の美しさがその容貌

の中に自然と現れてゐたではないか！

それも、ぢつと自分の顔を見つめた時のあの眼光、それは明に自分に對する同情の瞳ではなかつたか！　言はぬは言ふに勝る！　あの物言ひたげな口許から、もし言葉を聽くことが出來たなら、それは必ずや自分を慰め勞つてくれる温い優しい言葉であつたに違ひない。

それにしても、何で自分から話をしかけなかつたらう？　口を開かうと思ひつゝ、言葉が口に出なかつたのは、一體どうしたわけといふのだらう？

また正午にも、辨當を持つて來てくれることであらう。その時こそ、いろ／＼と話をしてみよう。惡漢内海の家にゐても、あの少女だけは、決して心の惡い性質ではない。自分をこの密室から救つてくれることは出來ないまでも、自分に對して同情だけは寄せてくれるに相違ない。すれば内海の秘密や、百合子のことなど訊いても見ようし、或は彼女の手を通じて、咲子に救ひを求めることが出來ないものとも限らない。

しかし、何にしてもお腹が空いた。昨日の夕方、手輕な食事をしたゞけで、アパートメントへ驅けつけるやら、自動車に乘つて飛ばすやら、空腹を覺えるのに無理はない。何にはともあれ、萬事は饑餓を滿してからだ。

敏夫は辨當の蓋をとつて、香の物と煮豆のお菜に舌皷を打ちながら、食ひ足らぬ辨當飯をペロリと輕く平げた。

が、さて、辨當を食つてしまふと用がない、部屋の中を見廻しても、額縁に入つた古ぼけた風景畫がかゝつてゐるきり、天井や部屋の隅々は、昨夜見たよりも一層ひどい蜘蛛の巣だらけ。目は自然に壁の上の小窓へ向く、敏夫はまたもや椅子を持ち出して、窓口に頭をつき出した。夜の展望とは異つて、明治神宮の森は直ぐ間近に、そして坦々たる參宮道路をぞろ／＼と續く人人の群が手にとるやうに見えてゐる。

窓の下はと見ると、昨夜睨んだとほり、一ぱいに水を湛へた池で、飛石傳ひに向ふの庭へ行かれるやうになつてゐる。その植込みの庭を隔てゝ、隣家との間に高い／＼塀がある。窓の外に拔け出すとすれば、無論その池に落ち込むばかり。でなくて、人を監禁しようといふのに、惡漢たちが窓口を開け放しておかう筈がない。

かうなれば、最早や逃げ出す望みは全然ない。今はもう天運を待つばかり。それにしても、早く正午が來てくれゝば……

密書

待ち侘びたその正午がやつと來た。正午の號砲。あちこちで鳴る工場の號笛――

敏夫は廊下の足音を、どんなに頸を長くして待つたことぞ、しかし、二十分、三十分、いや一時間近く經つても、人の近づく氣配はない。

午飯はぬきといふのだらうか？　それとも忘れてゐるのであらうか？　いや〳〵、親切らしいあの少女が、食事のことを忘れよう筈がない。きつと内海の命令で、自分の勝手にならないだらう。

　時計の針はそろ〳〵一時を指さうとしてゐる。敏夫は張りつめた氣もゆるんで、ぐつたりと椅子によりかゝつた。

　と、その時、そつと階段を昇る足音がして、誰かしら拔足差足、扉の前へ近づく氣配、敏夫はきつと耳を立てた。やがてコツ〳〵と四邊をはゞかる低いノック！

　電氣にでも打たれたやうに飛び上つた敏夫は、把手を握るもおそし、サッと扉を開け放した、と、やつぱり左樣だ。待ちこがれたあの少女が、格子の前に立つてゐる！

　敏夫が嬉しさに胸を躍らせながら話しかけようとすると、少女はつと右手を上げてそれを制へた。そして紙にくるんだ食パンをそつと敏夫の手に渡した。

「有りがたう。僕はもう午飯は食してもらへないかと思つてゐましたよ。」

　敏夫は初めて口を開いた。

「えゝ、上げてはならないと云はれたんですけど――」

　少女は後を氣にしながら低聲で囁くやうに云ふ。

「さうですか、どうも有り難う、御親切は忘れません――で、あなたにお訊きしたらと思ひます

が、こゝに守島雪子といふ方はゐませんか？」

　守島雪子の名を聞くと、少女はびつくりした風で、ぢつと敏夫の顔を見てゐたが、

「存じませんの、わたし――」

「では、小花百合子といふ方を、あなた御存じぢやありませんか？」

「えゝ！」少女はいよ〳〵驚いた顔をして、「わたし、そんな方、存じません……でも、どうしてそんなことをお訊きになりますの？」

「僕、その女を搜してゐるのです。小花百合子といふのが本名ですが、理由があつて守島雪子といふ變名をつかつてゐます。僕たちその女の所在を搜すのに、どんな苦心したかしれません。あなたにこんなことを云つては何んですが、御主人の内海さんは大變な惡漢で、やつぱり百合子さんの行方を搜してゐるのです――」

「低い聲で仰しやつて下さい……聽かれると困ります。」

　敏夫の聲がだん〳〵高くなるので、少女は心配相に注意した。

「えゝ、低い聲で話しませう。それで、僕達と内海さんとは競爭で、百合子さんの所在を搜してゐたんですが、内海さんの方が先へ知つたんです。それも僕が内海さんの後をつけて行つたんで分つたことですが、百合子は守島雪子と名を變へて、小田原の病院に入つてゐたんです。僕はそれとは知らずに内海さんの後を尾けていつて、病院の樹へ上つて中を覗いてゐる中に、足を踏み

外して何も知らなくなつてゐる間に、内海さんは雪子さんをつれて東京へ來てしまつたのです。ですから、雪子さんは、この家にゐなくてはならん筈ですが、そんな女はゐませんか。」

「わたし存じませんの……」

「内海さんは一昨日の夜晩く歸つて來たでせう？」

「え丶……」彼女は僅に首肯いた。

「その時、若い女の人をつれては來ませんでしたか。」

「存じません――わたし、早く寢てゐたものですから。」

「怪しいなア。すると――」

敏夫の頭にふと或る考へが思ひ浮んだ。それは百合子も自分と同じやうに、何處かこの家の一室に人知れず監禁されてゐるのではあるまいかといふことだつた。

何故と云つて、内海にとつては、雪子は大切の大切の寶である。何十萬圓とも知れぬレガリア金剛石の所在を知つてゐる雪子、その雪子を自分の眼のとゞかないところへ匿つておく筈がない。

それは第一逃亡される危險がある。もしまた警察にでも感附かれたら、取返しのつかぬことになる。内海ほどの悪漢だもの、それくらゐのことは百も承知の筈。すれば、雪子はやつぱりこの家の何處かに監禁されてゐると見ねばならぬ。

「この家には、祕密の部屋がまだ外にもあるでせう？ そこへ監禁されてるやうな樣子はありませんか？」

「わたし、よく知りませんけど……」

彼女は言葉を濁しながら、ツと後を振向いて耳を立てたと思ふと、急に怯えた顏をして、

「おや！ 足音がします。見つかつたら大變です……」

と云ひも終らず、そこ〳〵階段の方へ下りていつた。

「――よく知りませんけど……」最後の言葉が、敏夫の耳には強く殘つた。それは何か云はうとして、躊躇つた言葉である。

この外に祕密の部屋があるといふのか、それとも小花百合子について、何か思ひ當ることでもあるといふのか、とに角彼女は何か祕密を語らうとして、途中で口を噤んだのだ。

その後を聽きたい。早く夕方が來ればよいが……そして百合子の所在を搜りつゝ、彼の少女と近づきになつて、こゝから逃げ出す工夫をせねばならぬ。

逃げ出す工夫――それは咲子に通信をする外はない。しかし手紙を書かうにも、紙もなければぺんもない。その紙やペンを手に入れるまでが苦心である。何にしても、あの少女に取り入つて、漸々とことを運んでゆくより外に仕方はないのだ。

さう云へば、咲子はどんなにか自分のことを案じてゐるだらう、一時間もすれば歸つて來ると

云つたのに、夜が明けても、正午が來ても歸つて來ないのだもの、今頃は定めし、昨夜の自動車を一生懸命捜し廻つてゐることだらう。

さうした心配をかけるのも、自分が深入りをしたからだ、自分が惡い。でも、過ぎ去つたことは仕方がない。それよりも早く夕方になつてくれゝばいゝに……

敏夫は部屋の中をぐる／＼と歩いてみたり、テーブルに凭れて天井の節穴を數へたりして、時間の經つのを待ちわびた。

退屈な一日がやつと暮れて、窓の外が薄暗くなる、電燈が部屋の中を照しだすと、今度は階段の足音が、今か／＼と待たれだした。

時計が六時を指した時、待ち兼ねたその足音が廊下の方に聽えると、敏夫は合圖のノックもよう待たずに、自分が扉を開けて顏を出した。

すると靜に格子の前に近づいた少女は、朝と同じ辨當箱を默つて敏夫の手に渡すと、そのまゝくるりと踵を返して、すたすたと彼方へ行かうとする。

「モシ／＼、僕、訊きたいことがあるんですが……」

敏夫はあわてゝ聲をかけた。しかし少女はちらと此方を振向いたきり、返辭もせずに階段を下へ降りていつた。

一體どうしたと云ふのだらう？　あの親切な少女が、急に打つて變つたあんな態度を見せるとは？　正午に自分の傍へ來たことが判つて、叱られでもしたのだらうか？　それとも、晝間の親切は表面だけで、內々自分の祕密を探りにでも來たのであらうか？　いや／＼、あの少女に限つて、そんなことがあらうとは思はれぬ、言葉も云はずに去つてしまつたあの態度には、何にか深い理由がなければならぬ。

敏夫は解きがたい謎に思ひ惱んで、悄然とテーブルの傍へ引返した。そして元氣のない樣で椅子に腰を下しながら、辨當の蓋を取り上げた。と同時に敏夫の眼はきらりと光つた。

そこに――お惣菜の上に四つに折つた小さい紙片が載かつてゐるのを見たのである。敏夫は急いで、その紙片を取り上げた。開いてみると、鉛筆で走り書きの女文字。

あなたのお身に危險が迫つてゐます。御用心をなさいませ、今夜十一時に扉の前へ綱を置いておきますから、窓からそうと下へ降りて、池の中の飛石傳ひに築山へ上つて、裏門口へお逃げなさい――

二度三度四度、繰返し／＼讀み返すと、敏夫はその紙片を押しいたゞいて、舊のやうに四つに折つて、上衣の內衣囊へしまひこんだ。

決死の冒險

夜はだん／＼と更けてゆく。

宵の口は雜音に打消されて聞えなかつた電車の音響が、こう／＼と耳元近く響いて來る。

猫のやうに忍びやかな跫音――その跫音が廊下の下に消えてゆくと、敏夫はそうと扉を開けて、暗い足許を手さぐりながら、そこに置かれた綱の束を手にとつて、電燈の下へ歸つて來た。

細くはあるが丈夫な麻繩、長さも十尋は十分ある。敏夫はニッコリ微笑んで、椅子とテーブルを窓の下に運ぶと、綱の一端を椅子の脚にしつかりと結へつけ、テーブルを足場にひらりと窓に飛びついた。そして脚に結へた綱を手ぐつて椅子を窓口に吊上げ、それを支棒の代りにして大丈夫と確めると、今度はしつかり綱を握つて、靜に／＼池の面へ下りていつた。

身の輕いのは自慢であるが、綱を摑む掌は切られるやうにづき／＼と痛む。しかし生命を賭しての冒險だ、密室に監禁されて、恐ろしい危險を待つことを思へば、掌の痛むくらゐは何でもない。

敏夫の身體は宙ぶらりんのまゝ、一尺二尺と下つてゆく。やがて池の面が近くなつた。そして夕方見ておいた飛石を足先で探りながら、やつとその上に兩足を下した時、敏夫は肩にかゝつた千鈞の重みを一時に取つて除けたやうな思ひがして、手にした綱を思はず放した。

千慮の一失、綱を放すと、一緒、窓口につり上げた支柱棒の椅子が、ガタンと大きな音を立てて床の上に落ちた。

ハッと思つたが、もう遲い。あれだけの音響がすれば、家中の誰かゞ目を覺すのはきまつてゐる。間誤々々してゐられない。敏夫は星明りに池の面をすかして見て、飛石傳ひに、危い足許を踏みしめ／＼、やつと築山の上へ這ひ上つた。

と、その折も折、二階の窓から、

「やア、逃げ出したゾ！　築山にゐる！　築山に！」と叫ぶ聲と同時に廊下を走る音、雨戸を繰る音、家の中は忽ち上を下への騷ぎになつて、誰かしら池を廻つて此方へ向いて追驅けて來る樣子、敏夫は植込や庭石の間をくゞり拔けて裏木戸の方へ夢中で走つた。と突然横手から聲がした

「此方です！　こちらへいらつしやい！」

つと足を止めて振返ると、傍の繁みの蔭に、此方を手招く白い手。顏を近づけると、あの少女だ！「有り難う！　感謝します！」敏夫は聲もきれ／＼に感謝の辭を繰返した。「お禮なんかようございます。それよりも早くお逃げなさい！　誰かゞ追驅けて來ます！　少女は先に立つて植込みの中を縫ひながら、裏木戸の前まで來ると、鍵を外し、戸を開けて、

「さア、早く！　早く！」敏夫は木戸を外に飛び出した。が、親切なこの少女とこのまゝ別れてゆくことが出來ようか！

「あなたも僕と一緒に逃げませんか！ こんな家にゐたつていゝことはないでせう！」感激と感謝と、少女を思ふ眞心から、さう云つた敏夫の聲はふるへてゐた。

「わたし逃げられません。女の足では直ぐ捕まるにきまつてゐます。さア、早くお逃げなさい！もうそこへ來ました！」

「大丈夫です。僕がきつと引受けます！」

「いゝえ、捕まつたらどんな目に會ふかしれません。それよりも早く逃げて下さい。」

彼女はさういふと一緒、つと身を退いて、今駈けて來たとは反對の植込へ、搔き消すやうに姿を消した。

それと同時に、バタ〳〵と駈けて來る黒い影、追跡者だ！ 油斷はならぬ、敏夫は少女のことが氣にかゝりながらも、裏木戸を離れて暗い小路をまつしぐらに駈け出した。

と、十間も來ないのに、ズドン！ といふ音、續いてまた一發！

敏夫はパッと身を伏せた。が、それも一瞬、つと身を起すと、今度は猫のやうに身をかゞめて一生懸命走り出した。

再びピストルの音がした。ピューンと彈丸が耳許を掠めた。しかし、もう二度と立ちどまる氣はしなかつた。間誤々々してゐて、捕まれば生命はない。少しくらゐ負傷はしても、逃げ出すに越したことはない。

何處をどう走つたか、敏夫は見當もつかなかつた。眞暗い寂しい通りを、無我夢中で走つてゆくと、軒燈の竝んだやゝ明い横町へ出た。敏夫はホッとして、足をゆるめながら四邊を見廻すと、直ぐ筋向ふの町角に交番の赤い燈が見えた。

「お願ひです！ 本署へ電話をかけて下さい！」敏夫は息を切らして交番へ飛び込んだ。「僕、昨日から監禁されてゐて、今逃げ出して來たんです。惡漢を捕へて下さい！」

「監禁されてゐた！ 君が！」

交番の巡査は眠むさうな眼をこすりながら、敏夫の顏をにらみつけた。若い女か子供ならこそ、相手は鼈甲緣の眼鏡をかけた瀟洒たる洋服姿の青年である。監禁されたなどゝ聞いては、却つて疑ひの眼をもつて見たに相違ない。

「何處へ監禁されたのです？」

巡査は半信半疑の態で訊く。

「あすこです。こゝを眞直ぐに行くと、左側に裏門のある家です。」

「裏門のある家はいくらもある。誰といふんです、その家は？」

「内海といふ家です——」

「内海？ 四丁目の何番地です？」

「番地は知りません。迎への自動車が來て、つれられて行つたんですから。」

「怪しいなア、四丁目に内海といふ家はない筈だが――」巡査はさう云つて、相變らず訝し相に敏夫の顔を見てゐたが、

「とに角、本署へ行つて、直接、話して下さい。こゝでは仕方がないんだから。」

と突放すやうに云ふ。その本署へ今一度電話をかけてくれるやうに賴んでみたが、巡査の方では元來、敏夫の言葉を疑ぐつてかゝつてゐるので、容易に應じてくれさうな模樣もない。

いくら賴んでも無駄だと知つた敏夫は、たうとう交番に諦めをつけて、深夜の道をとぼ〳〵と赤坂警察署に出頭した。しかし、警察でも、やつぱり敏夫の言葉を本氣で聽いてはくれなかつた。

當直の警部補は、敏夫の住所姓名から内海との關係や、どうして内海の家へ自動車でつれられていつたのか、まるで罪人を訊問でもするやうに根掘り葉掘り訊きだした。

が、敏夫には、内海との關係をはつきりと答辯することが出來なかつた。それを說明するためには、小花百合子の名を出さねばならぬ。百合子の名前を出せば、自然、話はレガリア金剛石のことにも及ぶわけ。

ところで、この事件に携つたそも〳〵の最初、讀者の方々も御記憶のとほり、敏夫と吹子が新聞に廣告を出して西尾禮助なる人から百合子の行方を捜すやうにと賴まれた時、いかなる場合にも警察官の助力を乞うてはならぬといふことを嚴重に申し渡されてゐるのである。つまり、警

察へは飽までも秘密にしてくれといふ條件附きで依賴されてゐるのである。

決死の思ひで、惡漢の手を逃れて來た敏夫は、一刻も早く内海を逮捕して、自分の怨恨を報ひたいばつかりに、他を考へる閑もなく勢ひ込んで警察へ飛び込んでは來たものゝ、さて、内海との關係はと訊れると、西尾氏との約束が思ひ出されて、十分な說明が出來なくなつた。

それを何とか彼とか、宜い加減な話をこしらへ上げて、やつと警部補を納得さして内海の家へ臨檢するやうになつたのは、もう午前の二時を大分過ぎてゐた。

藻脱けの殼

敏夫が警部補と二人の刑事を案内して、やつと内海の門前へ辿りついた時は、もう東の空がボツと仄白くなりかけてゐた。

「この家です！」

敏夫が嚴重に閉された門の前に立ち停つてさう云ふと、警部補が一歩前に進み出で、手にした提灯をかざして傍の門札を見上げた。

「おや！　古瀨順造とあるぢやないか。この家ではないだらう？」

成程、門札には古瀨順造と書いてある。しかし敏夫の記憶に間違ひはない。

「門札は何とあつても、この家に違ひありません。確にこゝです！」

「間違ひないね？」

警部補が念を押すと、刑事が拳を固めて、門の戸を叩き出したが、中からは起き出して來る模樣もない。その時、今一人の刑事が、傍の潜戸に目をつけて手をかけると、鍵がかゝつてなかつたと見えて、ガラリと開いた。

刑事を先頭に、門内に入つた四人は、正面玄關に立つて、またもや玄關の戸をトン／＼と叩きながら、大きな聲で呼んでみたが、やつぱり應へる聲はない。

「怪しいナ？　これだけ呼んでも目が醒めないとは？」

警部補は呟くやうに獨言を云ひながら、何氣なく提灯を前に差出した。と、戸を叩いてゐた一人の刑事が、

「おや！　この戸も開いてるぢやないか！」

と頓狂な聲を擧げた。見ると、成程、戸と戸の間が、五分位開いてゐる。そこへ手をやつて、ぐつと引くと、重い戸が雜作なくぐつと右に開いた。

「古瀬さん！」

「内海さん！」

二人の刑事が大きな聲で、交る／＼二つの名を呼んだ。が、誰も起き出して來る樣子はない。

「宜いから踏込んで見たまへ！」

警部補はさう云つて、自分から眞先きに玄關を中へ入つていつた。二人の刑事が後につゞく。

電燈一つ點いてないがらんとした眞暗い家の中を、提灯の明りを頼りに、彼等は正面突き當りの部屋から、右に折れた廊下に沿ふた部屋々々を一つ々々調べていつたが、何處にも人の氣配はない。それに不思議なことには數多い部屋々々の何處を搜しても、家具らしいものが一つも置いてないことだ。

「これは空家ぢやないか！」

廊下に沿ふた部屋を一つ殘らず調べてしまつて、二階へ上る階段の下へ出た時、刑事の一人が叫んだ。

「どうも、左樣らしいナ」警部補が合槌を打つた。「君、家を間違へてはしないかね？」

「間違へてはゐません。確にこの家です。僕、この階段を上つて、二階へ監禁されたんですもの――」

論より證據、敏夫は先頭に立つて、二階へ向いて上つていつた。例の部屋の前まで來ると、幸ひにも扉は開け放しになつてゐる。察するところ、物音を聞いて目を醒した惡漢が、敏夫がゐるか如何かを確めるために、驅け上つて來て、中を覗くとそのまゝ急いで飛び出していつたのだらう。

「この部屋です。それ、あの椅子に綱を結へてあるでせう」敏夫は窓の下に横樣に倒れた椅子を

指しながら「僕、あの綱につかまつて、窓から逃げ出したんです。ほんとうに命懸けでしたよ。下は池なんですから、手を放したら池の中へ落ち込むにきまつてゐますもの。」

「成程、これで見ると嘘ではない。しかし、それなら内海といふ男はどうしたんだらう？」

「僕、きつと逃亡したと思ひます。」

「逃亡？　君がこゝから逃げ出したのが十二時だらう、今四時十分だ。四時間位の間に家財道具をまとめて逃げ出せるわけのものではないんだ。」

「それも左樣ですが、事實、誰もゐないとすれば逃亡したと見る外はないでせう？」

「何にしても、怪しい。何處かに隱れてゐるかもしれん、今一度、すつかり搜してみよう。」

警部補の命令で、三人は手別けをして、階上階下はもとより、築山から庭の隅々まで調べてみたが、怪漢内海の姿は勿論、二人の女も、家財道具らしいものも、遂に何處からも發見することが出來なかつた。

「不思議だ！」

「何としても不思議だ？」

邸の内外を搜しあぐんだ四人は、口々にさう云つて、夜の明け放れた街へ出た。そして今一度疑問の家を振返つた時、筋向ふの八百屋の店前に立つてじろ〳〵と此方を見てゐたそこの主人らしい老人が、とぼ〳〵と四人の前へ近づいたと思ふと、

「お前さん方は何を調べにおいでなさつたかね？」と何か物言ひたげに問ひかけた。

「少々用があつて來たんだが、古瀬さんは留守のやうですね。」

然り氣ない風で警部補が答へた。

「へえ！　誰方もゐませんかね？　實は夜半頃でしたよ。鐵砲を射つたやうな音がして目が醒めると、間もなくそこの戸が開いて、誰かゞ走つて出たと思ふと、少時して自動車がやつて來て、何か積み込むやうな音がしてゐましたがね。その中に、この前を通つて行つてしまひましたよ。」

「ふむ、ぢややつぱり夜逃げをしたんだナ。」

敏夫が思はず齒軋りをして口惜しがつた。

「一體、古瀬といふ人は何時引越して來たんです？」

「何時つて、ほんの四日ばかり前のことですよ。それも、こんな大きな家を借りて入るのに、荷物も何にも持つて來ないので、皆で不思議がつてゐましたがね。何んにしても、この家は變な人の入る家ですよ。この前は獨身者の女が、これもやつぱり空手で一月ばかり入つてゐて、家賃も拂はずに逃げ出すし、それから半年以上も空いてゐて、やつと借手がついたと思ふと、主人といふのが自殺をするし、今度の借手は五日位でまた夜逃げをするなんて、何にしても縁起の惡い家ですよ。」

縁起が善からうと惡からうとそんなことは、敏夫にとつてはどうでもいい。

たゞ殘念なのは大切な鳥を逃したことだ！
たつた一つの手懸り——その手懸りがなくては、問題の少女、小花百合子を搜し出すべき由もない大切の〳〵手懸り、怪漢內海を逃してしまつた。殘念だ。何としても殘念だ。
あの警部補が直ぐ自分と一緒に行つてくれたなら、こんなことにはならなかつたらうに……。敏夫は愚圖々々して、用もないことを何時までも〳〵訊問して、時間を移してしまつたあの警部補が今更のやうに恨めしかつた。しかし、それは今更云つても追つかぬこと。所詮は自分が惡いんだ。

內海の家を突留めただけで、さつさと歸つてくれば宜かつたものを、つい家の中まで入つたので、こんなことにもなつたわけ。小田原療養院の場合と異つて、無益な深入りをしすぎたのだ。咲子に申譯がない。二人の苦心と冒險が、やつと成功しようといふ場合、重大な責任を負ひながら、まんまと失敗して、監禁の憂目を見たのか、おまけに內海を逃してしまつて、折角の手懸りを滅茶々々にしてしまつた——

何と云つて咲子に謝つたいゝだらう？　いや、それよりも、咲子は一昨日の晩から昨日一日、どんなにか自分のために心配をしたことだらう。勝氣な咲子のことだから、自分が歸つて來ないとなると、內海のために恐ろしい目に會はされてゐることゝ判斷して、きつと狂氣のやうになつて自分を搜し廻つたことだらう。

それにつけても、ちつとも早く咲子に會つて、安心さしてやらねばならぬ。內海の所在を探ねることは、それからでも遲くはない。

敏夫はさう思つて、警部補の一行と別れると、折柄通りかゝつた割引電車に飛び乘つて、數寄屋橋際の二人の事務所、カフエー「あやめ」へ歸つて來た。

場所柄とは云へ、職業が職業だけに、まだ戶締りがしてあるのを、敏夫は構はず叩き起した。すると寢呆け顏をしてカフエーの女主人が、何かぶつ〳〵云ひながら出て來たが、敏夫の顏を見るなり、

「おや！　笹井さんなの？　もう歸つていらつしたの？　お樂しみでしたわね。」
「えゝ？」敏夫は相手の言葉に面喰ひながら「咲ちやんは宿つてゐますか？」
「咲ちやん？」今度は女主人が變な顏をして「咲ちやんと一緒ではなくつて？」
「何ですつて？」
「ぢや咲ちやんと會はなかつたの？」
「判らないなア、一體どうしたといふんです？」
「わざと呆けてるのぢやないの？」女主人はにや〳〵笑ひながら敏夫の顏を覗き込んでゐたが、敏夫が餘りに眞面目な顏をしてゐるので、「怪しいわねえ。では、あなたは咲ちやんに電報を打つておいて、待たないで歸つていらつしたの？」

「どうも解らないなア、僕、電報なんか打ちはしませんよ。」
「御戯談でせう、わたしが電報を受取つて、咲ちやんに渡したんですもの。」
「合點がいかん、何時のことです。それは？」
「ほんとに知らないの、あなた？」
「知るもんですか、僕、電報なんか打つた覺えはありませんよ。」
「怪しいわね。昨日の正午過ぎでしたわ。わたしが張場にゐると、郵便屋さんが電報を持つて來たので、見るとカフエー「あやめ」内吉井咲子、發信人はトシヲとあるのです。ところで、咲ちやんは昨日の朝からあなたのことを心配して、彼方此方飛び廻つてゐて二時頃にやつと歸つて來たのです。その時、わたし張場にゐたら、直ぐ渡して上げるんだつたけれど、ちよつと用があつて内へ引込んでたもので、おみよに電報を持たしてやつたんですの。すると、五分と經たないに、咲ちやんが下りて來て、あなたの居所が分つて、迎へに來てくれと云つて來たからこれから直ぐ出かけると云つて、大急ぎで飛び出していつたんです。」
「何處へ行くとも云はなかつたですか？」
「えゝ、わたし訊いたんですのよ。すると、千葉の方へと云つて、そのまゝ出かけてしまつたのです。」
「怪しいなア。千葉なんどへ行つてはゐなかつたのだ――」

「では、あなたが打つた電報ぢやなかつたんですの？」
「無論ですよ。僕、電報なんか打つた覺えはないんだ。」
「だつて、確にトシヲとあなたの名前があつたんですよ。」
「僕の名を騙つたんだ！　僞の電報ですよ、それは！」

紙屑籠の中から

不思議だ！　何と考へてみても、電報なんど打つた覺えはない。電報を打たうにも、昨日の正午は、惡漢内海の家に監禁されてゐたではないか。

僞りの電報だ。誰かゞ僞電を打つて、咲子を誘き出したのだ。すると、今頃は昨日の自分と同じやうに、恐ろしい運命に會つてゐないとも限らない――

でも、一體、僞の電報を打つたのは誰だらう？　内海かしら？　いや、内海は昨日は家にゐた筈。すれば内海が誰か配下を使つて電報を打たしたかもしれぬ。さうだ、内海には石井といふ仲間もある。何うしても彼等一味の所業には相違ない。

自分達がだん／＼と彼等に肉薄しだしたので、彼等の方でも逆襲に出はじめたのだ。宜し、それならそれで此方にも覺悟がある。

敏夫は思はず、拳を固めた。しかし、何と云つても、相談相手の咲子がゐないでは、どうする

ことも出來ない。この際何にはともあれ、咲子の行方を突きとめることにしなくてはならぬ。が、それには如何したら宜いだらう。たゞ千葉の方だと聞いたゞけでは、さつぱり見當もつかず、捜してゆくべき當度もない。

敏夫は事務室の椅子に身體を投げて、腕組みしながら、じつと天井を睨んでゐた。と、ふと思ひついたは昨日電報を頼んだといふ女給のおみよだ。そのおみよに訊いてみれば、或は何か分るかもしれぬ。

さう考へた敏夫は、急いで階段を驅け下りると、拭掃除をしてゐた女給の中でも一番年の若い可愛い丶顔をしたおみよを呼んで、二階の事務室へつれて來た。

「みよちやん、お前、昨日お女主人にたのまれて、咲ちやんのところへ電報を持つて來たんだらう？」

「え丶、持つて來たわ。」

「咲ちやんは、その電報を讀んで何とか云はなかつた？」

「云つてたわ。」

「何と云つてた？　覺えてゐる？」

「え丶、さうだわ――」おみよは邪氣ない顔を傾けて考へながら「さう〱電報が打てる位なら歸つてくれ丶ばい丶のに――もしかしたらまた怪我でもしたかしら――つて云つてたわ。」

「さう、それで、電報に何と書いてあつたか知らない？」

「知らないわ、わたし見ないんですもの。」

「ぢや知らない筈だ。ところで、咲ちやんはその電報をどうしたか知らない？」

「電報の紙なの？」

「あ丶。」

「紙なら讀んでしまうと、圓めてそこの紙屑籠へ投げ込んだわ。」

「紙屑籠へ！」

敏夫が思はず大きな聲を擧げて、部屋の片隅にある紙屑籠に走り寄つた。そして少時、籠の中をがさごそと掻き廻してゐたと思ふと、

「有つた！　有つた！」

と嬉しさうに叫びながら、皺苦茶になつた電報紙を取上げた。そしてテーブルの上に展げて、丁寧にその皺を伸しながら、きつとその面に目をやると、三行にわたる電文、文句は次のとほり、

チバケン　カトリジンシヤノチカク

コケイソウマデ　スグキテクレ

發信局は香取、發信者はトシヲとある。正しく千葉縣香取局から發信したもの。咲子が自分と

思つたのも不思議はない。

でも、コケイソウとは何だらう？　旅館の名だらうか、それとも別莊の名であらうか？　とに角、咲子の行方が分つた以上、油斷をしてゐる場合でない。一時も早く出かけよう。何にも準備はいらないのだ。このまゝ兩國へかけつけて一直線に香取へ向いて飛べばよい。敏夫は朝飯も驛の近くで認めるつもりで、電報をポケットへ入れて起ち上つた。

と、たつた今階下へ下りていつたばかりのおみよが、再び階段を上つて來て、

「笹井さん、朝つぱらからお客様よ。」

と云つて一枚の名刺を差出した。

「誰だらう、今頃訪ねて來るのは？」

さう思ひながら、名刺を受けとると、「島田三千夫」とあつた。

四

咲子を救ひに

「やア！」

「やア！」

扉が開いて、顏見合せるも一緒、殆ど同時に、島田三千夫と敏夫が兩方から驚きの聲を擧げた。

そも〳〵の最初、この事件の發端に、小花百合子の身の上について、新聞へ廣告を出した時、返事をもらつて、一度、こつちから訪ねたきりで、その後、會つたこともない島田三千夫が、こんな朝つぱらから、どうして訪ねて來たのであらう？

敏夫がそれを不審に思ひながら、何か話しかけようとすると、大きな眼を瞠つて入口に突立つてゐた三千夫が、

「君、無事でしたか？　何時歸りました？」

とさも驚いた風で訊いた。

「僕？　僕は今歸つたところですが――」

「それは結構でした。もしかすると惡漢につかまつてやしないかと思つて、大變に心配してゐましたよ。」

これは又意外である。自分が惡漢の罠にかゝつたことを、三千夫はどうして知つてるだらう。

「僕が監禁されたことを、どうして御存じです？」

「どうしてつて、咲子さんが昨日見えられたんですもの。大變心配をなすつて、相談にいらしつたんです。」

「えゝ、咲ちやんが！」敏夫はいよ〳〵意外な面持をしながら「それは何時頃のことでした？」
「さア、一時半頃だつたでせう。ぢや、君はまだ咲子さんには會はないんですか。」
「會ふどころぢやないんです。今度は咲ちやんが誘拐されたんです。」
「誘拐！　咲子さんが？」
三千夫は自分の耳を疑ぐるやうに、思はず頓狂な聲を出した。
「えゝ、これを見て下さい。」
敏夫がたつた今四つに折てポケットへ入れた電報を取出して渡すと、三千夫はじつとその文句を讀んでゐたが、
「へえ、これは君が打つたんぢやないんですか？」と怪訝さうに顔を見る。
「僕が打たうにも、僕は昨夜の眞夜半まで内海の家に監禁されてゐたんです。」
すると――」
「無論、惡漢が打つた僞の電報です。彼等は僕たちを邪魔にして、先づ僕を誘き出して監禁し、今度は咲ちやんを電報で誘き出したんです。」
「成程、咲子さんはあんなに君のことを心配してたんだから、この電報を見れば欺されたのも無理はない。で、どうします？」
「どうつて、これから直ぐ香取へ行つて、コケイソウといふのを調べてみようと思ふんです。愚

圖愚圖してはゐられませんからね。」
「香取と云やア、兩國からですね。行きませう。僕も――！」
「行つて下さる？　君も？」
「行きませう、一人よりは二人がいゝでせう。さア、今は。」三千夫は腕の時計を見ながら、「七時四十分です、急ぐなら香取まで自動車で飛しませう。」
「汽車で大丈夫ですよ。自動車では彼等に疑られるかも知れない――」
「でも、咲子さんに危險はないでせうか？」
「その點は大丈夫でせう。咲ちやんの生命が欲しくて誘拐したんぢやないんだから、ぢや出掛けませう。」
兩國から千葉を經て佐倉へ、更に成田線に乘り換へて佐原へ。
のろ〳〵と停車場毎に停つてゆく總武線の汽車は、先を急かるゝ二人には、堪へられないほどもどかしく感じられた。それに狹い窮屈な客車の中は、その線路には珍しい多勢の乘客、考へて見ればそれも當然、恰度日曜日に當つて成田山の參詣や房總方面へのその日歸りの遊覧客である。
移りゆく窓外の景色を迎へ送つて、はしやぎ廻る人々の中で、二人は大きな聲で話も出來ず、惡漢内海の家での冒險を、聲をひそめてひそ〳〵と語り合ひつゝ、やつと佐原へ着いたのは午後

の一時。
　どや〳〵と降り立つ人々の中に交つて、改札口を出ようとした敏夫は、切符を渡しながら、
「香取にコケイソウといふホテルか別荘がありますか？」と訊いてみた。
「コケイソウ——さア」改札係は頭を傾げて考へてゐたが、「あゝ、ありますよ、香取神社の直ぐ手前にある古い別荘で古を敬ふ荘と書くんです。」
　二人が停車場を出ようとすると、折柄雨がポロ〳〵と降り出した。香取神宮へは、東へ三十二丁の道程、三千夫が手を擧げて貸切の自動車を招んで乘らうとすると、敏夫は何を思ひ出したか自動車をそこへ待たしておいて、急いで改札口へ引返した。
「昨日の多分六時十分の下りだつたらうと思ふんですが、十八九の女がこゝへ下りませんでしたか。」
　改札係は變な顔をして、敏夫の顔を見てゐたが、
「どんな風の方ですか？」と訊き返した。
「何處と云つて特徴はないんですが、面長のくつきりした容貌で、頭髪はオールバックに結つて、確か絣のお召を着てゐる筈ですがね。そんな風の女が古敬荘への道を訊きませんでしたか？」
「さうですね。そんな女は覺えてゐませんが……それに昨日は土曜日なもので、多勢下りたもの

ですからね、古敬荘への道を訊いた人はありませんでしたよ。」
　三十二丁もの道を人力車に乘る筈はないとは思つたものゝ敏夫は念のためにそこらにゐた俥夫にも、同じことを訊いてみた。しかし、誰もそんな若い女を乘せた覺えはないといふ。自動車に乘つてから運轉手にも訊ねたが、夕方、香取神社への客は一人もなかつたといふ答へ。
　何だか怪しい氣がせられる、しかし古敬荘の所在が判つた以上、何はともあれ、そこを訪ねてみる外はない。
　兩傍に櫻の樹の植つた平坦な道を、自動車は小雨を衝いて氣持よく走つてゆく。十分とかゝらないで、もう神宮の深い森が前面に見え出したと思ふと、案内を知つた運轉手が三叉路になつたところに自動車を停めて、左に見える小高い丘の森を指して、あすこが古敬荘だと教へてくれた。二人は自動車を下りて、畑中の道を二丁もゆくと、古ぼけてはゐるが、見る目にはもの〳〵しい冠木門の前へ突き當つた。近頃住む人もなかつたか、門前には雜草が生えて、伸び放題に枝を伸した植込の樹木が、破れかゝつた板塀の外まで繁つてゐた。
　見ると右側の小門が五寸ばかり開きかゝつてゐたので、二人はそれを押し開けて門前よりも一層雜草の生え繁つた庭の中へ入つていつた。
　前面は植込の樹木に、後方は神宮につゞく杉の森につゝまれて、いやに森閑とした建物である。敏夫と三千夫は雨に濡れた雜草を踏み分けて、舊式な硝子戸の入つた玄關に立ちながら、傍

の呼鈴へ押してみた。

リ、ン――リ、、ン

がらんとした手廣い家の奥で、呼鈴の鳴る音が微に聽えたが、誰も出て來る樣子はない。三度四度、續け樣に押してみたが、その都度電池の弱つてゐるらしい低いベルの音が、薄氣味惡く家の中に響きわたるばかりで、更に答へる聲はない。

二人は雨の止んだのを幸ひに、家の周圍をぐるりと廻つてみた。裏の方は、狐か狸でも出て來さうな程、叢や竹藪が繁つてゐた。その中を蜘蛛の巣をはらひ〱一と廻りしてみたが、窓も雨戸もすつかり閉め切られて、まるで人の住んでゐさうな模樣はない。

「これぢや問題にならないや、ねえ君。」

「無論、空家としか思へませんね。」

「それにしても、一應、内部を調べてみる必要はあるが、誰かこの近くに管理人がゐるんだらうから、訊ねてみたら――」

「それは宜い考へだ。ぢや行つてみませう。」

二人が門を出ると、折柄、そこへ一人の百姓が通りかゝつた。

空別莊の捜索

「あ、この別莊ですかい、これはもう四五年も空家になつてゐるんですよ。」

鍬を肩にした百姓はそこに立ちどまつて敏夫の訊くまゝに話し出した。

「古い話ですよ、露西亞と戰爭した時分のことですよ、山村といふ東京の方が戰に勝つやうにといつて香取さまへお願をかけ、戰爭中、毎日のやうに一日も缺かさず參拜してゐましたがね。たうとう大願成就で戰に勝つたもので、お願解きのために一生をこゝで送ると云つて、この別莊を建てたんですよ。それから五六年前に死ぬまでずつとこゝにゐましたが、老人が亡くなるともう誰も住人がなくなつて、ご覽のとほり荒れ果てゝゐるんですよ。」

「ほう、そんな篤志家があつたものですかね。」

敏夫はさも感心したやうに言ひながら「それで、今、誰がこの家を預つてゐるんです。」

「管理人ですかい、それやあの向ふに郵便切手を賣つてるお民婆さんに訊けばいゝだ。婆さんが鍵を預つてるといふ話だから。」

教へられた路を歩いてゆくと、婆さんの家は直ぐ分つた。

「コケイ莊の中を見せてもらひたいんですが――」と言ふと、見るからに人の好さ樣な婆さんは詳しい用向きも訊かずに、頭から別莊を借りに來たものと思ひ込んだらしく、

「あの別莊はご覽になつても無益でございますよ。大變な荒れ方で、何しろ古い上に、一昨年の地震で壁は落ちるし、建具は壞れるし、滅茶々々になつたのを、手も入れずに、そのまゝにして

あるのですからね。お住ひになるには、餘程お金をかけなければなりませんよ。」

「金はいくらかゝつてもいゝんですがね。僕が入るんぢやないんだから、とに角、一寸内部を見せてくれませんか。」

「左様でございますか、それでは御案内致しましてもよろしうございますが、誰も留守居がありませんから、鍵をお持ち下さつて勝手にご覽下さいませんか、内玄關から入れるやうになつてゐますので……」

それは此方の望むところ。二人は婆さんの差出す鍵を受取つて、足を返さうとしたが、敏夫はふと振返つて、

「お婆さん、變なことを訊くが、昨日あたり誰か別莊を借りたいと云つて來た人はありませんでしたか？」

「昨日？ いゝえ、誰方もお見えにはなりませんでございますよ。」

「左様ですか、ぢや、途中で聽いたのは間違ひだつたんだ――」

婆さんの言葉に僞りはないらしい。敏夫は出鱈目を云つて言葉のしまひを濁しながら、再び別莊をさして引返した。

赤く錆ついた錠前を、やつとのこと開けて、薄暗い内玄關に入ると、敏夫はマッチを擦つて目の前の上り框をじつと見た。そこには埃が眞白くなつてたまつてゐた。

「足跡がついてゐない」敏夫が呟くやうに言つた。

「無論こゝから入つたものぢやありませんね。」三千夫が低い聲で應じた。

二人は障子を開けて、靴のまゝ部屋の中へ上つた。久しい間、閉め切られた黴くさい臭氣がぷんと鼻を打つた。

「暗いなア。懷中電燈を持つて來るとよかつたのに――」

敏夫が二本目のマッチを擦りながら言つた。そして仄暗いマッチの灯をたよりに、二人は幽靈でも出て來さうな陰氣な家の中を、手でさぐるやうにして、それからそれと調べていつた。しかし、だゝッ廣い家の中には鼠一匹ゐなかつた。

二度三度、咲子の名も呼んでみた。もしかすると、猿轡でもせられて、何處かの片隅に監禁されてゐるかもしれぬと思つて、襖や押入の中まで一つ殘らず調べてもみた。でも咲子の姿は、遂に何處にも見當らなかつた。

「怪しい、どうしたといふんだらう？」

結局、勞して効なき草臥れまうけと判ると、敏夫が先づがつかりしたやうに言つた。

「不思議ですね、途中から何處かへつれてゆかれたんぢやないでせうか。」

さう言つた三千夫の聲にも力がなかつた。二人は張りつめた氣もゆるんで、内玄關を外にすごすごと門の方へ歩いて來た。そして小門の前まで來ると、先に立つた敏夫が、何を見つけたの

か、突然、おや！　と云つて立ち停つた。と思ふと急に身體をかゞめて雜草の中を睨みつけた。

「どうしたんです？」

その態度に驚いて、三千夫が後から覗きこむと、敏夫はものも言はずに、目の前の叢から何かしら拾ひ上げた。見るとそれは寶石の入つたヘアピンであつた。

「ヘアピンぢやありませんか！」

今度は三千夫が頓狂な聲を擧げた。

「えゝ、これは咲ちやんのですよ。」

「え！　咲ちやんのですつて？」

「間違ひないんです。咲ちやんが始終やつてたから、僕覺えてゐるんです。それに青玉が三つ入つてゐるんでせう。これで僕と口論をしたことがあるんです。僕がこの寶石を擬ひだと云つたので、咲ちやんが怒り出して――」

「ぢや咲子さんが、こゝへ來たことは事實ですね？」

「どうも左樣考へる外はありませんね。」

「すると、こゝまで來て欺されたことを知つたんで、僕たちのために手懸りに殘しといたんでせうか？」

「さア、手懸りは手懸りだが――」敏夫は何か言はうとして、口ごもりながらじつと考へてゐた

が、「僕は何だか左樣簡單には考へられないやうな氣がしますがね。」

「と言ふと？」

「つまり、このヘアピンがある以上、咲ちやんがこゝへ來たことは疑ひないんですが、これを、僕達が捜しに來ることを豫期して、手懸りとして殘していつたのか、それとも偶然落ちたかといふことは餘程考へてみなくてはなるまいと思ふんです。たゞ、こゝまで來たといふ證據を殘しておくのなら、何もヘアピンをこゝへ置かなくとも、外にいくらも方法がある筈です。電報を打つもよし、あの婆さんに言傳を賴んでおいてもいゝのです。さうした方法をとらずに、これを殘しておいたといふのは、今言つたやうな方法をとる閑がなかつたのではあるまいかと思ふんです。またたゞ落ちたとすれば、これがひとりで落ちたのを氣附かん筈はないんだから、拾ひたくても拾ふ閑がなかつたではないかと考へなくてはならんのです。」

「すると、つまり惡漢に誘拐されたと言ふんですか？」

「左樣です。咲ちやんは平常このピンを生命から二番目に大切だと言つてたくらゐですから、むざ〳〵と打棄てゝゆく筈はないんです。だから、故意に殘していつたとしても、偶然落ちたとしても、とに角、必死の場合、已むを得なかつたものと見るのが至當です。つまり、僕を捜して昨日の日暮頃にこゝまで來ると、惡漢が待伏せてゐて、無理矢理に何處かへつれて行かうとしたのでせう。その時、他に採るべき方法がなかつたので、これを手懸りに殘しておいたんだらうと僕

は思ふんです。」

「いかにも――」三千夫は敏夫の推斷にすつかり敬服した風で「確に君の言はれる通りでせう。ところで汽車の中のお話では內海は昨日東京にゐた筈ですね。するとその惡漢といふのは一體誰でせうね？」

「さア、昨夜僕の後を追驅けてピストルを射つ放したのは內海と見なくちやならんから、多分仲間の石井といふ奴だらうと思ふんです。」

「石井？ 聞いたやうな名ですが？」

「それ、何時かあなたのところへ、警視廳の警部に化けて、百合子さんの寫眞を借りに行つた奴ですよ。」

「あゝ、あの男ですか。彼奴なら僕顏を知つてゐます。」

「僕も內海の後を尾けて小田原へ行つた時、東京驛であの男が內海と話してるのを見たんですが、有名な犯罪學者の三宅辯護士とそつくりの顏をしてゐますね、たゞ黑子があるとないと違つてゐるだけなんです。」

「さう〳〵、石井といふ男には――左の眉根に大きい黑子があつたつけ――ところで、これから如何します？」

「仕方がないから、この附近を搜してみるんですね。第一、東京方面へ連れてゆかれたか如何かですが、連れてゆくとなれば汽車でゆく筈はないから自動車に違ひない。自動車なら道筋を調べてみれば分ることです。それでももしその形跡がないとなれば、この附近に監禁されてゐると見るべきでせう。それも佐原か成田か、外に町らしい町はないんだから。」

「ぢや、早速この附近で自動車を調べることにしませう。」

意外な電報！

やつと、これからの作戰計畫をたてた二人は、雜貨店へ立寄つて、宜加減な口實を言つて鍵を返すと、早速、附近の人人について昨日の夕方から夜にかけて、怪しい自動車を見かけた者はないかと訊ねてみた。すると自動車の通るのを見たといふ者は幾人もあつた。しかしその自動車の記號が何か、若い婦人が同乘してゐたか如何かといふことになると、誰も確とした返事をする者はなかつた。つまり、要領を得ることが出來なかつたのだ。

日が暮れてから、二人は佐原から成田へ通じる國道の要所要所について調べて廻つたが、その結果もやはり同じであつた。たゞ一つ稍や信用のおける證言は、成田の町はづれに近い成田自動車屋の主人が、昨日の夕方から四臺自動車は通つたが、東京の自動車は一臺もなかつた。三臺は佐原のM自動車會社のもので、一臺は千葉縣廳の公用自動車であつたといふ話だつた。そこで敏夫と三千夫は直ぐ樣、そこの自動車に乘つて佐原へ引返した。そしてM自動車會社について調べ

てみると、前夜、千葉方面へ王臺の自動車が出たことは事實だが、十八九の若い婦人客はなかつたとの答へ。

最早、それ以上、調べやうにも方法はなかつた。從つて、東京方面へ連れてゆかれた形跡は先づないと見て、此上は香取を中心として、佐原から成田の町を取調べる外はないこととなつた。

そこで、その夜は佐原の旅館に宿つて、二人でいろ／＼と協議の末、夜が明けるのを待つて取り敢へず警察へ捜索願ひを出し、一方二人で佐原から成田の宿屋を調べて歩くことゝした。田舍の町とは云へ、佐原は利根川に沿うた北總第一の繁華な土地だけに、大小旅館の數も多く、それを一々調べて廻るのは中々容易なことではなかつた。正午過ぎまでかゝつて、やつと全部の宿屋を廻るには廻つたが、咲子らしい泊客は何處の宿屋にも見當らなかつた。二人はその足で成田へ飛んで、同じく旅館の戸別訪問をしてみたが、やつぱり無駄な骨折であつた。

敏夫と三千夫はがつかりして、再び佐原へ歸つて來た。考へてみれば、旅宿を捜して廻つたのは、意味をなさない徒勞な業であつたやうにも思はれだした。といふのは、咲子は子供ではない。

いかに嚇しつけられたとて、惡漢の言ひなりになる氣遣ひはないのだから、惡漢の方でも多勢の人の出入する宿屋なんどへ監禁しよう筈はないのだ。

すれば、やつぱり空別莊か、貸家を捜すの外はない。二人はその翌日を再び別莊と空家捜しに

費した。しかし、それは旅宿廻りよりも一層困難な仕事であつた。たま／＼一昨日借手があつたとか、二三日前、約束をすましたとかいふ貸家や空別莊があると、二人は雀躍して心臓のときめきを覺えたが、さて行つてみるといづれも全然關係のない人達であつた。

かうして無駄な骨折をして二日の日は暮れた。この上は辛抱強く捜してみるの外はない。

事によると利根川を下つて銚子の方へ行つたかも知れぬ。さうとなれば更に捜索の範圍は廣くなるわけ、時日もまだ大分かゝると見なければならぬ。

敏夫はそれでもいゝとして、無斷で家を飛び出して來た三千夫は、兩國驛から葉書を出したゞけなので、一度、東京へ歸つてまた出直すことにしなくては、留守居の者が心配してゐるに違ひない。それに、もしかすれば咲子の消息が東京の方で知れないものでもない。

そこで、歸京旁、三宅辯護士や百合子の行方を調べることを二人に頼んだ西尾氏や、それから事務所のカフエーなどを訪ねた上で、直ぐ引返すことゝして、三千夫は三日目の朝の一番で東京へ歸ることゝなつた。

停車場に三千夫を送つた敏夫は、その足で、利根川通ひの汽船會社や船宿へ廻つて、咲子の行方を調べてみたが、やつぱり何の手懸りもなかつた。そして元氣のない歩調で、悄然と宿屋へ歸つて來たのは、もう午後の二時過ぎであつた。

三千夫がゐてくれる間は、まだ相談の相手があつて氣も心も張つてゐた。

それが急に一人ぼつちになつては、何だか寂しい氣がせらるゝ。それに匆忙として日は暮れたが、考へてみれば此方へ來てからもう四日だ。その間、足を棒にして心當りを搜してみても、まだ何一つ手懸りを得られないことを思ふと、流石の敏夫もいつしか力拔けがして、飯を食ふ元氣もなく、宿屋の欄干にもたれたまゝ、落日に映る大利根の流をぼんやりと眺めながら、淡い旅愁をさへ感じてゐた。

一體、咲子は何處へ連れてゆかれたどらう？　古敬莊へ來たことは、間違ひもない事實である。自動車で東京へ連れ去られたでなく、舟で誘拐されたでなく、この町に監禁されてゐるのでないとするならば……

敏夫の頭にふと恐ろしい考が思ひ浮んだ。と同時に、古敬莊の裏手の寂しい深い森や、目の前に見る大利根の濁江の河底が、忌はしい不吉な聯想を呼び起した。

「馬鹿々々しい。そんなことがあつてたまるものか！　いくら惡漢だつて、人殺しはしまい！」

敏夫は不吉な聯想を拂ひ除けようとして、つと欄干を離れた。そして部屋の中をぐる〳〵と歩いてゐると、入口の障子が開いて女中がそこへ顏を出した。

「笹井さん、電報です！」

敏夫は急いで目をやつた。發信人はミチヲとある。開けてみると、これは意外。

ユリコノアリカ　ワカツタ　スグカヘレ　七ジ　ジムシヨデアヒタイ

自動車を飛ばして

敏夫の乘つた汽車が、兩國驛に着いたのは午後の六時十分であつた。四邊はもう薄暗くなつて、長いプラットホームには電燈の灯がまたゝいてゐた。人群を縫ひながら、敏夫が改札口へ近づくと、そこに待ち受けてゐる出迎人の中から、

「おう！　敏夫君！」

と呼ぶ聲。見ると、意外にもそれは島田三千夫であつた。

「おや、わざ〳〵出迎へてくれましたか？」敏夫が嬉しさうに答へて近づくと、

「時間が變更になつたのでゆつくりしてはゐられなくなつたのです。」

「時間つて？　何の時間です？」

「會見の時間です――が、まあ、自動車に乘りませう。もう二十分しかないんですから。」

二人が急いで自動車に乘り込むと、運轉手は行先を承知してゐるらしく、そのまゝハンドルを捻つて、まつしぐらに夕暮の街を走り出した。

「一體、どうして分つたんです？　眞實ですか、百合子さんの所在が判つたと云ふのは？」

自動車が動き出すと、敏夫が訊いた。

「僕もまだ半信半疑ですが、しかし三宅辯護士から左樣言つて來たんだから、間違ひはあるまい

と思ふんです。」

「え？　三宅さんからですつて？」

「左樣です。それも正午前に僕が自宅へ歸りついて間もなくのことでした。女中が三宅さんといふ方から電話だと言ふので、最初は僕誰だか分らないで電話口へ出たんです。すると先方から辯護士の三宅ですが百合子さんのことで、鳥渡お話をしたいといふので、直ぐ分つたんです。」

「成程、で、その話といふのは？」

「極めて簡單でした。百合子さんの所在が判つたから取り敢へずお知らせをする。それで御一緒に訪問したいから、晩の八時に日本橋の自分の宅まで來てもらひたいと云ふだけのことでした。」

「どうして所在が分つたか云ひませんでしたか？」

「何にもそんな話はありませんでした。」

「それから今何處にゐると云ふことも？」

「えゝ、それは此方から訊いてみたんですが、いづれお目にかゝつてから話すといふことでした。それで、僕、晩の八時なら大丈夫間に合ふと思つたので、あなたと一緒にお伺ひする旨を答へて置いて、直ぐ電報を打つたんです。それも多分六時十分の汽車だらうから、七時に事務所で落ち合つて、一緒に行くつもりだつたのです。ところが五時過ぎになつて、また三宅さんから電話がかゝつて來ましてね、少し都合があるからきちんと六時半までに來てもらひたいと云ふので

す。だゝもので、僕、大急ぎで自宅から自動車を飛して、あなたを迎へに來たわけです。おう、十分しかない。」

三千夫は腕の時計を見ながら、運轉手に向いて、

「大丈夫かね、君、後十分だから急いでくれたまへ！」

「十分あれば大丈夫です。」

二人の乘つた自動車が、三宅辯護士邸へ着いたのは、きちんと六時半であつた。早速應接間に通されると、待つ間もなく和服姿の三宅氏が二人の前に現れた。

「やア、島田さんですか。初めてお目にかゝります。先刻は電話で失禮しました――」

三宅氏は如才ない初對面の挨拶をしてから、今度は敏夫の方に向いて、

「君も來て下さつたですか。島田さんから一緒にといふお話だつたが、何處かへ旅行中とのことだつたから、迚も間には合ふまいと思つてゐたんです。旅行先は何方でした。」

「千葉の方です。」

「千葉？　何の用事で？」

「咲ちやんが、惡漢の僞電に欺されて、香取へ行つたきゝ行方が知れなくなつたので、それを搜しに行つてたのです。」

「えゝ！　咲子さんが。眞實ですか、それは？」

三宅氏はさも驚いたやうに眼を瞠つた。

「眞實ですとも。で、僕、島田さんと二人で三日もあの附近を調べたんですが、さつぱり手懸りがないのです。」

「それは困つたなア。一體、僞電に欺されるつて、如何したといふんです。咲子さんが私を訪ねて來られたのは三日も前のことでしたよ。その時は、君が内海のところへ行つたまゝ歸つて來ないと云つて、大變に心配をして搜してゐられたやうでしたがね。」

「それから、惡漢に欺されたんです。僕の名で電報を打つて來たもので、つい引つかゝつたのです。その後へ僕が内海のところから逃げ出して來たといふ譯で、危ふく二人とも俘虜になるところだつたのです。」

「そいつは困りましたねえ。で、何にも手懸りがないんですか？」

「古敬莊」といふ空別莊へ行つたことは分つてゐるんですが、それから先が全然不明なんです。だから、僕、その方も氣にかゝるんですが、百合子さんの所在が判つたとのことなんで咲ちやんの方はゆつくり搜すことにして、大急ぎで歸つて來たんです。が、眞實ですか、百合子さんが見つかつたといふのは？」

「眞實ですとも、私は戲談や噓は云はない――」

三宅氏は卓上の莨盆から卷煙草を取つて、火を點けながら

「百合子さんが見つかつたことは間違ひありません。それも全く偶然の機會からでしてね。」

「偶然の機會つて、一體どうして判りました？」

「それが不思議なこともあるものでしてね――」

三宅氏はゆつくりと煙草を喫ひながら「まあ、奇縁奇遇とでも云ふのか、百合子さんが自動車に轢かれて負傷したところへ、偶然私が通りかゝつたのです。」

「えゝ！　自動車に！」

敏夫と三千夫の口から、殆ど同時に驚きの聲が洩れた。

「それも昨日の夕方でしたよ。少々用があつて市ケ谷の方へ出掛けたのです。その歸り途でした。電車通りへ出ようと思つて、士官學校の前を歩いてゐると、背後から一臺の自動車が來たのです。ところが、あそこは道幅の廣い割に寂しい通りなもので、自動車を走らすには誂へ向きなところへもつて來て、餘程急いでゐると見えて全速力を出して走つてゐるのです。私は隨分走らしてゐるナと思つたゞけで、格別氣にも留めなかつたですが、自動車が私の傍を走りぬけて、二三十間も行つたと思ふ時でした。右側の横町から黑い影がパッと飛び出して來たのです、アッと思つた時はもう遲い、黑い影は自動車にはね飛ばされて、聲も立てずに打倒れ、自動車はそのまま向うへ行つてしまひました。事實、自動車の方では餘りに速力を出してゐたので、そんなことには氣がつかなかつたかもしれません。

私は驚いて驅け出しました。傍へ行つてみると、まだ十七八の少女ですが、何にも知らずに、ぐつたりとなつて倒れてゐるのです。折柄、そこへ通りかゝつた三四人の人々と一緒に、いろいろと介抱をすると、やつと呼吸を吹き返したので、私が住所と姓名を訊ねると、低い聲で小花百合子——と云ふのです。

私は自分で自分の耳を疑ひながら今一度訊いてみると、やつぱり小花百合子と答へるのです。もう疑ふの餘地はない、見ればはね飛された際に後頭部に負傷をしてゐるし、それに大變衰弱もしてゐる樣子なので、取り敢へず附近の病院へ擔ぎ込んで直ぐ敏夫君のところへ電話をかけたが留守とのこと、今朝になつて島田さんのことを思ひ出し、電話帳を調べて急いでおしらせをした次第です。」

「それはどうも——で、百合子さんの負傷は大したことはありませんか？」

「後頭部を少々擦り剝いてゐる位のもので、心配するほどのことはないさうです。それよりも自動車に衝突した時に受けた衝動から、今まで失はれてゐたあの女の記憶が、急に甦つたのです

——」

「えゝ、記憶が甦つたんですつて？」

敏夫が昂奮した聲で叫んだ。

「左樣です。甦つたのです。小花百合子といふ自分の本名を想ひ出したのが、その證據です。」

「では、ダイヤの所在も云ひましたか？」

「いや、意識を回復して、自分の名を云つただけで、後はまた朦朧としてしまつたのです。と、云ふのが大變に身體が疲勞してゐるところへもつて來て、自動車にぶつかつてはね飛される。幸か不幸か、それが原因で長い間、忘れてゐた記憶を喚び返したので、つまり心身共に混亂してしまつたでせう。たゞ昏々として眠つてゐるのです。」

「ぢや、未だに眠りつゞけてゐるでせうか？」

三千夫が心配相に訊いた。

「いや、眼は覺めてゐるやうです。今朝ちよつと訪ねてみた時には、まだ眠つてゐましたがね、其後、電話で訊いてみると、段々と元氣を回復して、ボツボツ話もするやうになつたさうです。」

「では、これから直ぐお伴をしませうか。病院は市ケ谷ですか？」

「市ケ谷は市ケ谷ですが、その訪問がちよつと困るんださうでしてね。」

「えゝ、困るんですつて、如何してです？」

敏夫の顏がサツト曇つた。百合子の所在が判つた以上、面會が出來ないといふ理由が何處にあらう。彼女のために、筆にも口にも盡せないほどの苦心をつづけて來た自分ではないか。まして三千夫は百合子のたつた一人の親戚ではないか。それが如何して面會してはいけないだらう？

「誰が不可ないと云ふんです？ 百合子さんが自分で云ふんですか？」

氣にかゝる咲子のことも打棄てゝ、東京へ飛んで歸つた敏夫は、慌てた樣子もなくゆつたりと煙草の煙を吹く三宅氏の顏を見つめながら、もどかし相に繰返した。

「百合子さんが、そんなこと云ふ筈はありませんがね。醫師が禁めるんです。私は大概いゝだらうと思つたから、島田さんに今晩一緒に病院へ行くやうにお約束したものです。で先刻念のために病院へ電話で問ひ合してみたんですよ。すると、今晩だけ絕對安靜にして置けば、もう大丈夫だから、面會は明日の朝にしてもらひたいと云ふのです。折角、お二人で來ていたゞいたのに、甚だお氣の毒ですが、かういふ事情だから、明日の朝の八時に、今一度御足勞を願ひたいんですが。」

さう事情が解つてみれば、强つてと云ふわけにもゆかぬ。

「承知しました。それでは明朝またお伺ひすることにいたしてもよろしうございますが、市ケ谷なら宅から直ぐですから何なら、病院を承つて置いて、敏夫君と一緒に八時に向ふへ行つてもよいと思ひますが。」

市ケ谷とは目と鼻の麴町に住んでゐながら、わざ〱日本橋まで廻り道をする必要もないこと。三千夫はそれを思つて云つたのであるが、三宅氏の方ではちよつと意外な顏をしながら、

「さう〱お住居は麴町の三番町でしたね。それではと――明朝、私がお誘ひすることにしませう。向ふでお會ひしてもいゝが、分りにくい道ですから。」

「では、さう云ふことに願ひませう。一口坂を右へ折れ、靖國神社の裏手まで來て七十四番地とお訊き下されば直ぐ分りますから。」

それで話はきまつた。二人は三宅氏に送られて、待してあつた自動車へ乘つた。

三千夫の疑惑

「僕たちの苦心を考へれば、もつと親切に云つてくれても宜ささうなものだに……」

自動車が三宅氏の門を離れて、電車通りへ出ると敏夫が呟くやうに言つた。

「第一、病院の名ぐらゐ敎へてくれてもいゝんだ。此方から訊いたつて、道が分りにくいなんて云つて――何だか、平常の三宅さんとは人が異つてたやうだなア。」

「えゝ！　人が異ふんですか？」

一人で何か考へ込んでゐた三千夫が、驚いたやうな聲を擧げた。

「いゝえ、三宅さんは三宅さんだけれど、前に會つた時とはまるで感じが違ふんですよ。」

「さうですか。僕はまた初めて會つたんだが――何だかあの人の顏が、何時か警視廳の警部だと云つて、百合子さんの寫眞を持つていつた石井といふ男の顏に、そつくりなやうな氣がしてならないんです。左樣〱、この間、君もそんなことを云つてゐましたね。」

「えゝ、實際、よく似てるでせう。あれで黑子があつたら誰だつて間違ひますね。」

「いや、僕は黒子がなくつたつて石井だと思ひました。石井といふ男の顔は、ほんの印象だけなんだけど、はつきり頭へ殘つてゐますが、顏全體の輪廓から、眼鼻立ち、口許、それに身體の恰好から年頃まで、三宅さんとそつくりそのまゝです。事によると双生兒ではないでせうか？」

「まさか！　三宅辯護士と悪漢の石井とが双生兒だなんて、そんなことはないでせう。」

「だつて分りませんよ。双生兒の一方が非常な秀才で、一方が似もつかぬ鈍物だなんて例もありますからね。」

「しかし、いくら何んでも有名な犯罪學者と石井との間に關係があらうとは思へないが、二人が似てゐることは確ですね」

「こんなことを云つては失禮だけど、僕には双生兒だとしか思へませんが、まつたく瓜二つですよ。どうも、不思議だなア。」

「いや、似てるやうでも、二人並べてみたら何處か異つたところがあるものですよ。それは左樣と、百合子さんの在所が判つて肩の重荷が下りたやうな氣がしますね。これで咲子ちやんの行方さへ解れば、何にも云ふことはないんだけれど——おや、もう日比谷ですね。ぢや、僕はこゝで下してもらつて、明朝お伺ひすることゝしませう。」

「いゝぢやありませんか。僕のところで今晩はお宿りなさい。八時といふと餘りゆつくり出來ませんよ。」

元來が朝寢坊の上に、こゝ數日、夜も碌々寢ずに走り廻つて草臥れ切つてゐる敏夫は、勸められるまゝに、その夜は三千夫の宅で厄介になることにきめて、久々で氣持のいゝ寢臺に快い夢を結んだ。

翌朝、眼が覺めたのは七時過ぎ、匆々に朝飯をすますと、もう八時の自動車まで呼んで何時でも出られるやうに準備して待つてゐたが、三宅氏の姿は見えぬ。五分、十分、たうとう八時半になつて、待ち草臥れた二人が、三宅氏の宅へ電話を掛けようと電話帳を繰つてゐると、折柄、三宅氏からの電話。

今朝になつて、急用が出來て處他へ廻つたので、直々病院の方へ來たから、どうか此方へ來てくれるやうに。市ケ谷見附の交番で細田醫院と聞けば、直ぐ分るから——とのこと。

二人は早速、自動車に飛び乘つた。

交番で尋ねるまでもなく、細田醫院は直ぐと判つた。交番の前を一町も行くと、左へ曲る通りの中程に、ちよつと人目を惹く木造の西洋建築がそれであつた。

二人が受附に立つて、三宅氏の名を云ふと、看護婦が此方へと云つて、患者待合室兼用らしい應接室へ導いた。そして看護婦が出てゆくと、入り代りに三宅氏と白い手術服を着た四十前後の醫師とが入つて來た。

「どうも濟みませんでしたね。突然急用が出來たものでお約束を違へて——」三宅氏は簡單に違

約を詫びて「こちらが院長の細田先生です。島田さんと笹井さんです。」
「初めまして、ではこちらの方が百合子さんの御親戚でいらつしやるんですね。」
「左様です。従兄妹の間柄になりますので。」
「あゝ、左様ですか。此度はどうも飛んだことでして――でも、もうずつとおよろしい方で、決して御心配はいりません。三宅先生からちよつとお話を伺つてゐましたので、今朝初めてそれとなく遭難當時のことをお訊ねしてみたんですが、汽船は沈んでしまつたかとか、何人ぐらゐ救はれたかとか、反つて逆にお訊きになるのです。ですから、記憶は元へ戻つたんですが、そこに大きな溝があるわけで、つまり御當人は汽船が沈沒した當時のつもりでゐられるんです。それに何か心にかゝる心配事でもある御樣子ですから、あなたからボツボツお話でもなさつたら段々と氣が確かになつて來られるだらうと思ひます。」
「どうも有難うございます。大變御厄介をおかけしたことゝ思ひます。それでは、病室へ參つてよろしいでせうか？」
「さあ、どうぞ。御案内をいたしませう。」
院長は扉を開けて先に立つた。三千夫の後から敏夫が、その後に三宅氏がつゞいて、四人は足音を靜に階段を上つてゆく。
敏夫の心臓は階段を踏む一歩毎に、高鳴るやうに鼓動し出した。やつと小花百合子が見つかつ

た！　長い間、捜し求めた小花百合子は、今この病院の中にゐるのだ。しかも、彼女は失はれた記憶から奇蹟的にも喚び返されたといふではないか。
消えたダイヤ――その金剛石の在所も、彼女と相見る一瞬の後に判るであらう。苦しかつた冒險の目的は、遂に達せられたのだ。これで、辛苦を共にしたあの咲子がゐてくれたなら、どんなに喜ぶことであらう。
あれを思ひ、これを考へると、何だか凡てが夢のやうな氣がせられる。
おう、扉が開いた！　部屋の中央、眞白い寢臺、その上に横たはる繃帶をした少女の顔！
三千夫の肩越しに、チラと蒼白い少女の顔を覗いた時、敏夫は思はずアッと叫んだ。叫んだも道理、血の氣も淡く蒼褪めては居れ、その顔こそ敏夫の生涯忘れることの出來ないあの恩人の顏ではないか！
内海の二階に監禁された時、三度の食事を運んでくれ、救助の綱を與へてくれ、そしてピストルの音を聞きながら、裏木戸まで自分を導いてくれたあの健氣な少女ではないか！
では、あの少女が小花百合子であつたのか！　さてこそ自分が小花百合子の名を云つた時、彼女の瞳が怪しくも輝いたのだ！
夢だ、夢だ！　眞實に自分は夢を見てゐるのではあるまいか。
餘りの奇縁奇遇に敏夫は、事實夢の中にあるやうな氣持で、ぢつと彼女の顔を見つめたまゝ瞬

きもせず立つてゐた。

多勢の足音に眼を覺された彼女は、その圓な兩の眼を見開いて、自分を取り卷く四人の顏をじろ〳〵と見廻した。その眼には、明に何物をか恐れるやうな怯えた表情があつたが、その視線が、一番近くにゐた院長から三千夫へ、次いで三宅辯護士へ、そして最後に三千夫の背後に立つた敏夫の顏に移つた時、彼女の瞳は、ほんの一瞬ではあつたが、驚駭とも喜悅ともつかぬ異樣な輝きを見せた。しかし、それは恐らく敏夫の外には、誰も氣がつかなかつたに違ひない……

その時、三宅辯護士が靜に口を開いた。

「百合子さん、この方を御存知ですか。あなたの從兄さんの島田さんですよ。」

彼女の面に、今度は誰の目にもそれと知られぬ喜びの表情が浮んだ。

「僕は三千夫です、飛んだことでしたね。氣分はいかゞです？」

三千代は寢臺に近く寄りながら、優しい聲で話しかけた。しかし、百合子はまじ〳〵と三千夫の顏を見てゐるだけで、少時は返す言葉も知らぬ氣であつた。たつた一人の親戚と初めて相見る嬉しさに、彼女の小さい胸は、今、千萬無量の感慨が一杯になつてゐるのであらうか。

ダイヤの在所

「ほんたうに、あなたは三千夫さんでございますの？」

彼女の口唇から力ない聲が洩れた。

「えゝ、僕、島田三千夫です。百合子さんの手紙と寫眞をもらつて、歸つて來られる日を待ちわびてゐたのです。」

「では、あの寫眞も着きまして？」

「たしかに受取りました。御返事も差上げたつもりですが。」

「その御返事を見ないで、わたし浦鹽を立つたんですの……でも、もうあなたにお目にかゝることは出來まいと思つてゐましたのに……」

彼女の聲も顏も曇つてゐた。敏夫はその眼に淚の露の光るのを見た。

「ほんたうと恐ろしい目にお會ひになりましたね。あの時のお心持は十分にお察しが出來ますよ。」

「えゝ、全く生きた心地はありませんでしたの——そのために、わたしすつかり記憶を失くしてしまひまして、一年餘りの間、まるで外の人になつてゐたのでございます。今でも、わたしは汽船からボートに乘せられた時のやうな氣持がしてなりません。深い霧の中から助けを呼ぶ恐ろしい聲が、耳元に聞えてゐるやうな氣がします。」

彼女の眼には、汽船沈沒の刹那の悲壯な光景が、まざ〳〵と浮び上つて來たであらう。やつと、それ丈け云ふと今更のやうに身顫ひしながら目を閉ぢた。

その時、三宅氏がちらと三千夫に目配せした。三千夫は默つて首肯いた。

「でも、もう心配することはありません。それよりも、百合子さん、あなたにお訊ねしたいことがあるのです。それはあの鳳榮丸が沈沒しかゝつた時に、ボートへ乘り移らうとしてゐたあなたに、何かしら品物を賴んだ人があつたでせう？　記憶えてはゐませんか！」

百合子は再び大きな眼を見開いて、やつと三千夫の顏を見た。が、直ぐその後から視線を三宅辯護士と敏夫の方に移しながら躊躇ふ風で口をつぐんだ。

「この方々に御遠慮はいりません。笹井さんはあなたの在所を捜さうとして大變な苦心をして來られたのです。三宅さんはまたそのために、いろ／＼と御力添へをして下さつた方ですから、記憶えてゐられるなら、どうかすつかり話して下さい。誰かあなたに品物を賴んだ人があるでせう？」

「えゝ、見なれぬ露西亞人が傍へ來て、大切な貴重品を持つてゐるが、このまゝ海の底に沈めたくないから、どうか預つてくれと云ひました。」

「で、それを預つたんですか？」

「ハイ、鞣革の小さい嚢を預りましたの。」

「鞣革の嚢！　で、その嚢をどうしました？　まだ持つてゐらつしやるんですか？」

「いゝえ、わたし――」百合子はまた躊躇ふやうに言ひよどんだ。四人は目を瞠り耳を立てゝ返

事如何にと待つてゐる。

「どうなすつたのです。上陸の際にでも失くしたんですか？」

三千夫が心配相に追つかけて訊いた。

「いゝえ――わたし隱してしまひましたの。」

「えゝ！　隱したんですか？」

「えゝ、それを賴んだ露西亞人が、何十萬圓もする貴重品故、誰かゞ自分の後をつけてゐるかもしれないから、用心をするやうにと云つたのです。それで、わたし大切にして誰にも見られないやうにしてゐましたが、棧橋へ上ると、澤山の人が集つて來て、がや／＼と騷ぎ立てるんです。わたし、その人達の中に恐ろしい敵がゐるやうな氣がして、心配になつて來ましたから、そつと群集の中を脫け出して、右手の海岸の方へ行つて、誰も氣のつかないところへ、嚢を隱してしまひましたの。」

「ほう、海岸の何處へ隱したのです？　砂の中ですか？」

「いゝえ、棧橋を出ると、右の方へ向いて海岸傳ひに小さい道がついてゐます。その道を一町も行くと、左側に大きい岩があつて、その中に隧道のやうな孔が開いてゐました。わたし、その孔の中へ入つて行つて、四邊を見廻すと中央のやつと手がとゞく位のところに小さい孔があるのです。多分火藥で岩を碎く時に、開けた孔だらうと思ひますの。わたし、それを見つけると、宜い

隱し場所だと思つたので、その中へ嚢を押し込んで、人に氣附かれないやうに孔の口へ礫で蓋をして置きました。それから直ぐ棧橋へ取つて返しますと、もう皆が汽車に乘るところでしたので、急いで待合室から改札口の方へ行かうとしますと、そこへ見知らぬ女の方が來て、何か落し物をしたのと云つてくれたのです。で、わたし何氣なく背後を振向くと、その拍子に何かで頭の後を打たれたやうに思ひました。それつきりで、わたし後の事は何にも覺えて居りませんの——」

百合子はやつとそれだけ云つて、さも草臥れたやうに口を閉ぢた。

「いや、それでよく分りました。」三宅氏がその時初めて口を開いた。「笹井さん、それだけ承れば結構でせう。百合子さんもお疲れだらうから、この邊でお暇しようではありませんか。」

「左樣ですね。餘り長く話しては、よくないと思ひますから——」

細田院長も傍から口を添へた。

「ではお暇しませう。ぢや、百合子さん、お大切に——」

五

敦賀を指して

「八時半だ。間に合ふかしら？」

病院を出ると敏夫が腕の時計を見ながら云つた。

「間に合うつて、何にです？」

三宅辯護士が傍から不審氣に訊くと、

「特急にです。確か八時四十五分でしたね。下關行きの特急は？」

「ぢや、君はこれから敦賀へ行くつもりですか？」

「えゝ、愚圖〳〵しちやゐられません。まだ咲ちやんの行方も搜さなくてはならないんですもの。」

「さうですね、片つ端から片をつけてゆく方がいゝ。それでは僕も行きませう。」

「君も行つてくれる。敦賀まで？」

「えゝ、行きませう、乘りかゝつた船ですもの。」三千夫が元氣な聲で答へた。

「でも百合子さんの方は？」

「まだ二三日は入院してなくてはならんでせうから、それは宜いんだが、それよりも間に合ふかしら、もう十五分ですよ。」

「どうだね、君、十五分あれば大丈夫だらう？」

「東京驛ですね、全速力でやれば大丈夫ですよ。」

「ぢや、大急ぎでやつてくれたまへ。さア、三千夫君乘らう！」

敏夫と三千夫が急いで自動車に飛び乘ると、三宅氏が、
「もう慌てることもないんだが、善は急げといふから行つて來たまへ。しかし、油斷をしたまふな。何處に敵が隱れてゐないものでもないからね。十分に用心して、現場へ踏み込む場合には餘程大切をとつて、人に氣づかれないやうにしたまへ。油斷大敵といふことがあるから、くれ〴〵も云つて置くが、敦賀へ着いても、直ぐに目的地へ驅けつけるやうなことはしないで、落ちついて仕事をしたまへ。それからだ――」
敏夫は腕時計を睨みながらじり〳〵してゐる。たつた十五分――限られた僅かの時間は、その間にも容赦なく經つてゐる。二十秒。三十秒。一分二分を爭ふこの場合に、お說教は大いに有難迷惑と云はざるを得ない。しかし、相手は三宅辯護士だ。宜い加減に聞きすてゝ突走るわけにもゆかぬ。
「それからだ。目的物を手に入れたら、特に注意をしたまへ。君達二人が、敦賀の海岸をぶらついて、にこ〳〵しながら歸つてゞも來れば、誰だつて不審を起すにきまつてゐるからね。九仞の功を一簣に缺いては、取返しがつかない――」
「ハイ、解りました。十分注意をします。」
敏夫はいら〳〵しながら答へた。心はもう東京驛へ飛んでしまつて、三宅氏の言葉なんど、一つも耳へは入らない。

「ぢや、折角お大切に……成功を祈つて待つてゐますよ。」
「えゝ、それでは行つて來ます！　さア、全速力だ！」
自動車は文字通りに全速力で走り出した。四つ谷見附から半藏門へ日比谷へ、まるで矢のやうに疾驅して、東京驛の乘車口へ乘りつけたのは、かつきりと八時四十五分。
二人はマラソンの競爭でもするやうに、改札口へ駈けつけたが、時は旣に遲かつた。下關行一二等特急は、二人が改札口を中にくゞるも一緒、發車の汽笛を後に殘して、ホームを靜に辷り出した。
「しまつた！　もう一分早かつたら！　三宅さんが餘計なお說教なんかするものだから――！」
改札口を後戻りして、精養軒の食堂へ入つてからも、また敏夫はぶつ〳〵と云つてゐた。
「まア、宜いぢやないですか。乘りおくれたつて、間に合はんといふではないんだから。」三千夫は慰める。
「間に合ふ合はんの問題ぢやないんです。僕はまだ咲ちやんを搜しに、千葉へ引返さなくてはならんですからね。今の特急に乘ると乘らんとでは、歸りの時間が大分違ふんです。」
敏夫は何としても諦めがつかないらしく、一人でぷん〳〵怒つてゐる。
「それや左樣だけれど、三宅さんも親切から云つてくれたんですからね。」
「親切も時によりけりですよ。十五分かつきりしか時間のないことは分つてるんだもの。分りき

つたお說教なんかしなくつたつて宜ささうなものだ。三宅さんはわざ〳〵僕たちを乘り遲らしたやうなものだ！―

「まさか！　そんなこともないでせうが……おや、そろ〳〵次の列車が出ますよ。今度は九時半でしたね。」

　三千夫のいふとほり、次の列車は九時三十分發の神戸行き二三等の普通急行、紅茶を喫みながら、愚痴をこぼしてゐる中に、もう發車時刻がやつて來た。

　特急に乘りそこなつたことを思ふと、殘念でもあれば、まだるつこくも感じられるが、それでも急行は急行。東海道を一と走りに、米原で北陸線に乘り換へて、二人が目的の地、敦賀へ着いたのはその日の午後九時四十分であつた。

　夜はおそく、それに初めて見る不案內な土地である。どの町筋をどういけば海岸へ出られるか、棧橋はどこの方向にあるか、二人には皆目見當もつかなかつた。そこで、三千夫は一先づ旅館へ落ちついて、海岸へ行くのは朝にしようと云ひ出した。しかし敏夫はそれに贊成しなかつた。

「一分でも早い方がいゝのです。それに夜だと、人に見附る心配がなくて、却つていゝんですよ。そこらで懷中電燈を買つて、直ぐに行つて見ませう！」

　人に見つかる憂ひがない――成程、それにも一理はある。三千夫は東京を出る時に、三宅辯護士から懇々と言ひきかされた注意を思ひ出して、早速敏夫に同意した。

　停車場を出て左へ二三町もいつて、明い敦賀の町へ入ると二人は一軒の電氣商會を見つけて、そこで懷中電燈を購ひ求めた。そして棧橋への道を訊くと、電氣屋の主人が、ちよつと變な顏をして、

「へえ、あなた方も棧橋へいらつしやるんですか。先刻もお一人やはり棧橋へ行くといふ方かあつて、道を敎へて上げましたがね。これを眞直ぐに行くと海岸通りへ出るので、それを右へとつてずつとおいでになると、ひとりでに突き當りますよ。」

「大分ありますか、道程は？」

「さア、十二三町ぐらゐのものですが、初めてならあなた方も俥でいらつしやる方がいゝでせう。町を出端れると暗いところがありますから。」

「いや、有難う！」

　俥に乘らうと乘るまいと勝手なお世話だ。人に隱れて、寶石を搜しにいくところだ、俥になんか乘つて、大切な目的をさとられたらおしまひだ。十二三町の道なら、急いで歩けば二十分とはかゝるまい。

「三千夫君、さア行かう！」

　二人は敦賀の町を突つ切ると、敎へられたとほり海岸通りを右へ〳〵と進んで行つた。四五町も來ると、兩側の家並がだん〳〵と少なくなつて、その間から暗い靜な海がのぞき出した。やが

て四邊に人家の途絶えた寂しい松原にさしかゝつた。と、向ふから轍の音がして、人力車の灯が近づいて來た。二人はふと電氣屋の主人の言葉を思ひ出して、擦れ違ひながら車上の客に眼をやつた。すると不審相に二人を見送つてゐるやうだつた。しかし、月もない暗路の、お互ひの顏などみわけられやう筈はなかつた。

穴から取り出されたは

「あれが棧橋でせう？」

三千夫が暗を透しながら、突堤のやうに海の中に突き出た長い〱棧橋を指して言つた。

「左樣だ〱。船が繫つてゐる。すると、何處かこの邊に右へ廻る道がある筈ですね。あゝ、そこに道がある！」

敏夫は先に立つて、暗い小道をぐん〱と歩いて行つた。二三丁も來たと思ふと、道は山の麓に突き當つて、二つに分れ、一方は右へ、一方は山蔭に沿うて、海岸傳ひに左へ行く。

二人は道を左にとつた。道巾が急に狹くなつて、足下にひた〱と波の寄せる音がする。二人は足許に用心しながら、三四十間も來た。と、敏夫がふと足を停めて振返つた。

「こゝらしいですね？　洞穴でせう？」

さう云はれて、四邊を見廻すと、成程、空の星も見えぬ眞暗闇、波の音も後の方から聽えて來

る。

「どれ、懷中電燈で照してみよう。」

敏夫の手からパッと明い光線が流れた。やつぱり左樣だ。兩側も頭の上も岩の壁で、長さ三間あまりの鑿道トンネルである。

「きつとこゝですね！」

「間違ひありませんね。それでと、中央のところと云ひましたね？」

「えゝ、中央のやつと手のとゞく位と云つたから——」

「右側かしら、それとも左側だらうか？」

二人は懷中電燈の光線を眼の高さにさしつけながら、蚤取り眼で兩側の岩壁を檢べはじめた。

と、五分とも經たぬに、三千夫が、

「や！　この孔は？」

と大きな聲で叫びながら、眼の前を指した。

いかにも！　そこに、目どほりよりやゝ高く直經二寸位の小さい孔が開いてゐる。

「ほら、これだ〱、これに違ひない！」

さう云ふと一緒、飛び立つばかりに喜んだ。敏夫は爪先き立つて、いきなり左の指を孔の中に差し入れた。と、何かしら指先に觸るものがある。その感觸が何だか紐のやうに思はれる。

しめた！　嚢の紐だ。レガリア金剛石の入つた嚢の紐に違ひない！

敏夫は躍る心を抑へながら、紐の一端を指先にしつかりと挾んで、靜に〱引き出した。

やつぱり紐だ。が、紐は紐でも、それは革嚢の紐とは似ても似つかぬ小さな眞田の紐であつた。しかも、する〱と引出されたその紐の先には、意外も意外、消えたダイヤの代りに半分に折つた封筒が、しつかと結へつけられてあるではないか。

「おや！」

緊張し切つた二人の唇から、思はずも驚きの聲がもれた。と同時に、サツと封を切つた敏夫の手に取出されたは一枚の用箋。見れば、その面に萬年ペンの走り書き。

二人の眼は吸ひ寄せられたやうに、その上に注がれた。と、その文字は、

一足先きに參上いたし候。はる〲と御苦勞樣。

石井生

呆然自失！　敏夫と三千夫は、皮肉な手紙を睨んだまゝ、電氣にでも打たれたやうに立ち竦んだ。

ダイヤの入つた嚢とばかり思ひ込んで、引き出した紐の端に、こんな手紙がくつついてゐようとは誰が思はう！　まして、その手紙が、この事件に携つたそも〱の最初から、敏夫と咲子

の仇敵である石井の筆であらうとは！

それにしても、その石井が、どうしてこゝへ來たのだらう？　いや、如何してレガリヤ金剛石がこゝに隱されてあることを知つたであらう。

「不思議だ。百合子さんが、僕達以外に秘密を洩した筈はないんだが――」

敏夫が呻くやうな聲で云つた。

「無論、そんな筈はありませんよ。」

「すると、いよ〱合點のいかんことになつて來る。もしかすると、百合子さんの病室に秘密口寫機が据ゑつけてあつたぢやないかしら？」

「秘密口寫機つて何です？」

「寢臺の下や、部屋の隅なんかへ取りつけておいて、さうと他人の話を偸み聞く機械ですよ。」

「ほう、そんな機械がありますかねえ。だつて、百合子さんが、あの病院へ入院したのは一昨日の晩ですもの、そんなのを取りつける隙なんかないでせう。僕は惡漢が看護婦を買收して、手先きに使つたのではないかと思ふんですが……」

「僕も最初さう思つたんですが、もし左樣だとしても、内海なり石井なりに如何して通信したでせう。病院から電話をかければ直ぐ分るし、自分で出掛けていつたとすると、かなり時間をとる筈だから、石井が僕たちより早く來られる理由がないんです。」

「それも左樣だ。しかし、一足お先きになんて、一體、石井はあの特急で來たでせうか？」

「無論さうですよ。だから、僕たちよりは一時間も前に着いたんです。先刻の松原で擦れちがつた俥がありましたね。あれが石井だつたらうと思ふんです。」

「えゝ、あれが？」

三千夫がびつくりしたやうに聲を擧げた。

「きつと左樣ですよ。電氣屋の主人が棧橋への道を訊いて車に乘つた男があると云つたぢやありませんか。あの時は、石井が來ようなんてことは夢にも思はなかつたので、平氣で聞き流したけど、今から考へるとあれが石井だつたんです。」

成程、さう云へばその男も懷中電燈を買つたと云つた。懷中電燈――棧橋――道を急いで俥に乘つた事實、それが石井であることは想像するに難くない。が、左樣なれば石井がどうしてダイヤの在所を知つたかといふことが、いよ〳〵不思議になつて來る。

相手は二人の惡者だ。目的のためには手段を撰ぶ筈がない。三宅氏の話によれば、百合子は暗い小路から駈け出して來て、自動車にぶつかつたといふ。駈け出して來たといふことは、後から惡者に追つかけられてゐたことを語るものだ。さすれば、惡者の方では、百合子が病院へ舁ぎ込まれたことを知つてゐたと見ねばならぬ。いや、それのみか、百合子が意識を回復すると同時に、失はれた記憶をも喚び返したことも、知つたであらう。すれば、どうにでもして百合子の口から洩れるであらうダイヤの祕密を知らうとして、あらゆる方法を講じたに相違ない。

もし出來たなら祕密口寫機も備へつけたであらう。三千夫の云ふとほり看護婦に金を與へて手先に使つてゐたかもしれぬ。或はまた惡漢の一人が患者に化けて病院の中にゐたのかも分らない。それはあらゆる場合が想像される。

しかし、彼等がどんな方法を講じたにせよ、自分たちより早くこゝへ來られる筈はないのだ。自分たちも三宅氏の話を聽いてゐたゝめ、一分の差で特急に乘り遲れはした。でも、百合子の病室を出てから、二十分とは經つてゐない。その間に、彼等が如何なる手段を講じようとも、石井が自分たちより早く東京驛へ駈けつけられる道理がないのだ。

不思議だ。いくら考へてゐても、そこに解きがたい謎がある。

「解らない！」敏夫が遂に吐き出すやうな吐息をついた。「何んにしても、三宅さんのお説教を聽いてゐたのが取返しのつかない失策でしたよ。でも、過去は追ふべからずだ。濟んだことは仕方がない。それよりも、今夜はもう汽車はないんだから、石井の奴明日の朝までは敦賀にゐるに違ひないんです。これから一つ宿屋を搜してみようぢやありませんか。」

二人は急いで敦賀の町に取つて返すと、早速ホテルを搜しにかゝつた。最終には何十といふ大小の旅館を一軒々々廻り兼ねて、警察へ行つて、旅館から來てゐる止宿人の名簿を見せてもらつた。しかし、石井といふ名前は何處を搜しても見出すことが出來なかつた。落膽しつゝも二人は

まだ幾分の希望をつないで、翌早朝から停車場へ出掛けて、一番列車から二番三番と、正午近くまで改札口を見張つてゐたが、左の眉根に黒子のある石井の姿は、遂に停車場には現れなかつた。そして二人は悄然として、午後一時發の汽車に投じて、敦賀を後にしたのであつた。

長い間の苦心、必死の冒險、それが悉く水泡に歸したことを思ふと、敏夫はもう何を考へ、何をしようとの元氣もなかつた。が、たゞ案じられるのは咲子のことである。それも亦頼み少い限ではあるが、もしかすると何處からか、嬉しい便が來てゐないものとも限らぬ。萬々が一、虎口を脱して逃げ歸つてでもゐてくれたら……

一縷の望みを抱きながら、その夜十時、三千夫と東京驛で別れると、敏夫は直ぐ數寄屋橋のカフエー「あやめ」へ行つてみた。しかし、そこには敏夫の心を慰めてくれる何ものも待つてはゐなかつた。

敏夫は深い／＼谷底へ投げ落されでもしたやうな氣持で、留守の間に白く埃のたまつたテーブルを睨みながら、呆然として坐つてゐた。一切は終つたのだ——消えたダイヤは內海の手に奪はれてしまつた。戰はもう終りを告げたのだ。

これからは咲子の在所を搜し出して、長い間、苦しくも亦樂しかつた冒險の後始末をするだけだ。今夜はぐつすりと眠つて、明日はまた千葉の方へ行つてみよう。敏夫はさう心を決めると、次の室へ入つて、服の上着を脱つて、ごろりと寢臺の上に横になつた。目を閉ぢても、敦賀の

町、松原で行き交ふたあの俥、皮肉な手紙——さては、今、何處にか、どんな苦しい思ひをして自分を待つてゐるであらう咲子の顔が、眼の前にちらつく。

敏夫は眠られぬまゝに、汽車の中で買つた夕刊を、上衣のポケットから取り出した。そして仰向けになりながら、睡魔を誘ふべく夕刊の記事をそれからそれと讀んでゆく中に、ふと目についたは三面の下段にある四號活字の表題。

その短い記事を半分も讀まない中に、敏夫は何に驚いたか、ガバと寢臺から飛び下り樣、つかつかと電燈の下へ近づいた。そしてわなゝく兩手に新聞を持ちながら、われとわが眼を疑ぐるやうに、きつと記事の面を睨みつけた。

忌しい新聞記事

敏夫を驚かしたのは『厭世自殺か』と題する四號活字の表題の短い記事であつた。

昨二十一日午後十時頃千葉縣佐原渡船場の上流堤防上に、婦人用の洋傘と下駄の脱ぎ棄てあるを通行人が發見し大騷ぎとなつたが、附近に落ちゐたる紙入の刺繡文字より右は東京者吉井咲子の遺留品なること判明せり。同人は數日前行方不明となり、千葉方面に潜伏せる模樣にて搜索中なりし由なれば、多分金に窮し投身自殺を企てたるものならんとの見込みにて、目下死

體搜索中（佐原電話）

敏夫は自分で自分の眼を信ずることが出來なかつた。しかし、いくら讀み返してみても、その記事の主人公が咲子であることに間違ひはない。

洋傘や下駄が、果して咲子のものかどうかは疑問としても「紙入の刺繍文字」といふ七字で、それが咲子の遺留品であることは、寸分疑ふ餘地はない。咲子は學校卒業の記念に仲のいゝ友達とお互ひに縫ひ合つて交換したと云つて、平假名で自分の名を縫ひとつた綺麗な紙入をもつてゐた。

それから數日前より行方搜索中といふ記事文句も、三千夫と二人で警察へ取調べを願ひ出た事實と符節を合すものがある。その時、詳しい事情を告げなかつたので、警察では、てつきり不良少女とでも早合點して、新聞記者に宜加減な話をしたであらう。とにも角にも、新聞の記事が誤りでないとするなれば、利根川に身を投げたといふその少女が、咲子以外の人間でないことは餘りにも明かな事實である。

でも、咲子が身投げをする筈がないのだ。自分で自分を殺す必要なんぞ、決してあるべき筈がない。投身するといふ以上、惡漢の手から遁れ得て、自由になつたに相違ない。それならば、何は措いても東京へ逃げ歸つて來るべきである。また、さうする筈の咲子である。

怪しい。何と考へても合點がゆかぬ。しかし、咲子の名の入つた紙入があるからには、これを打消すことは出來ないが……

「待てよ――」敏夫は寢室の緣に腰をおろして、呟きながら考へこんだ。

物には考へ樣といふものがあるぞ……自分は、この新聞の記事を無條件でそのまゝ受け容れたからいけないんだ。この新聞では咲ちやんが身投げをして死んだものと定めてかゝつてゐるが、どうだ、反對に身投げの稽古はしたかもしれぬが、當人はちやんと生きてぴん／＼してると考へてみたら……さうだ、てつきり左樣に違ひない。咲ちやんのことだもの、死ぬにしたつて、利根川の濁つた水なんど吸ひ込んで土左衞門になんかなるものか。きつと、惡漢の目を晦ます手段に――芝居演つたんだ。

惡漢の看視をのがれて逃げ出した。が、追跡される恐れがある。女の足では逃げおほせぬ。そこで利根川の堤防から身を投げたやうに見せかけて、その實、そつと東京へ歸つて來るといふ策略……成程、咲ちやんのやりさうなことだ……

すると、これは今日の新聞で、昨夜の出來事だから、もう東京へ歸つてゐなければならぬ筈だが――歸れば無論第一にこゝへ顏出しするにきまつてゐる。すると、途中で再び惡漢の手に捕つたかしら。いや、それとも、追つかけられて、捕るよりはと身を投げたんではないかしら――」

善い方へ考へても、惡い方へ考へても、結局は事實の裁斷にまつ外はないのである。利根川に

死體が浮いて上るか、それともひよつくりと夢のやうに眼の前へ無事な姿を見せてくれるかどうか……さうであつてくれゝばいゝが……

敏夫は咲子の無事を祈りながら、再びベットに就いたが、とろ〳〵とまどろみかけたと思ふと、今度はドン〳〵と入口のドアをたゝく音。目は再びぱつちり開いた。

「敏夫さん、起きて下さい！　僕、三千夫です。大變なことが――百合子さんが、また誘拐されたのです！」

部屋の中に飛び込むと一緒、三千夫は聲をふるはせた。

「えゝ？　百合子さんが――眞實ですか、それは？」

敏夫も駭いて訊き返した。

「眞實ですとも。僕百合子さんのことが氣にかゝつてゐたので東京驛であなたと別れると、自動車に乘つて、市ケ谷の細田病院へ行つてみたのです。すると百合子さんはずつと經過がよくて今日の夕方退院したといふのです。

退院して何處へ行つたと訊くと、三番町の島田といふ親戚の家だといふでせう。冗談を云つちやいけない、三番町の島田は僕なんだ、百合子さんを迎へになんど來た筈はないと云つてみたが一昨日行つた時ゐた看護婦まで來て、確に自動車でお宅へ行らつしやつたと云ふのです。

迎へが來たか、それとも自分から自動車を招んで出掛けたかと訊くと、一時間ばかり前に電話

で院長さんに話があつて、當人の意見を訊くと行つてもよいなら行きたいと云ふので、その旨を返事すると、七時頃に貸自動車で迎へに來てつれて行つたと云ふのです。どうも怪しいとは思つたが、一應、自宅の方を確めた上でと、急いで自宅へ歸つてみると、無論電話をかけたなんて眞赤な嘘です。一昨日の朝――汽車へ乘る時、東京驛からちよつとハガキは出して置いたんですが、それにしても留守の者が僕の命令も待たないで勝手に病院へ電話をかける筈がないのです。僕は驚いてしまつて、直ぐ又病院へ引返して、いろ〳〵と調べてみたんですが、院長はたゞ僕だと思つたので直ぐ許可したといふだけで、迎へに來た自動車の番號が二四八〇番だつたといふことの外には何にも判らないんです。」

「ホウ、二千四百八十番！　よくそれが判りましたね」

「それも一番年の若い看護婦が知つてゐたのです。何でも夕方外へ買物に出て歸つて來ると、病院の前に自動車があるので、何氣なく番號を見ると二千四百八十番なので、二四が八とふと覺え込んださうです。」

「成程、それは宜かつたですね。ぢや、まだ手懸りがあるといふものですよ。しかし困つたことが出來ましたね。まるで泣面に蜂だ。」

「まつたくですよ。ダイヤは石井に持つてゆかれるし、百合子さんがまた誘拐されるし……」

「いや、それだけならまだ宜いんです。これを見て下さい。咲ちやんが利根川へ投身したといふ

記事が出てゐるんです。」

「えゝ？　咲子さんが？」

目の前に雷でも落ちたかのやうな驚きの聲を擧げながら、三千夫は差し出された新聞を受取つた。

「僕はその記事をそのまゝ承認はしたくないのです。」敏夫は三千夫が新聞を讀み終るのを待つて口を切つた。「何故つて、咲ちやんはそんな氣の弱い女ぢやないんですもの。だから、きつと惡漢の手から逃げ出して、一時行衞をくらますためにそんな芝居を演つたんだらうと思ふんです。で、幾分安心はしてゐるんですが、たゞ心配なのは、もし左樣だとすれば、今頃はもう東京へ歸つてゐなければならないのに、まだ何の便りもないのです。」

「さうですね。これは一昨日の夜の出來事だから、無事に逃げ出して來たとすれば、もう東京へ着いてゐなければなりませんね。」

「そこが一つ心配なんです。だから、僕は明日の朝まで待つてゐて、咲ちやんが歸つて來ないやうなら、また佐原へ行つてみようと思つてゐます。それであなたは自動車の番號を手懸りに百合子さんの行方を調べて下さい。かうなつたら、別々に活動する外はありませんよ。」

「已むを得ないことです。仕方がないから、三宅辯護士にでも相談して、出來るだけのことをしてみませう。」

「左樣ですね、三宅さんに相談すれば、いゝ智惠が出るかもしれません。しかし、これでダイヤを手に入れる望でもあれば樂しみだけど、後始末だと思ふといやですね。」

「でも、僕、今自動車の中でふいと考へたんですが、事によると、まだ內海たちの手には入つてないかもしれませんよ。」

「入つてないんですつて？　どうしてゞす。」意外な三千夫の言葉に、敏夫の眼が急にぎら〳〵と光つて來た。

「どうしてつて、ふと考へたことですが、守島夫人をはじめ內海や石井たちが、今まで百合子さんの行方を搜したり、監禁したりしてゐたのは、つまりダイヤの所在がわからなかつたからでせう。ですから、ダイヤが手に入れば、もう百合子さんには何にも用はない筈です。それだのに、また百合子さんを病院から連れ出したのは、まだダイヤを手に入れてない證據ではないでせうか？」

「成程――さうとも考へられますね。」

「目的はダイヤですから、それさへ手に入れば百合子さんなんかに構つてゐないで、直ぐアメリカへでも飛んで行くのが本當ですよ。」

「確に――すると石井の奴、我々を欺すつもりであんな手紙を殘しておいて、大急ぎで東京へ取つて返して、內海と相談して百合子さんをつれ出したかな。何んにしてもダイヤが彼等の手に入

つてないとすると、まだ大いに樂しみがあるわけです。これは宜いことを聞してくれました。ちや、僕明日の朝まで待つて咲ちやんの消息がなければ、佐原へ急行して一應取調べた上で、直ぐ引返して百合子さんの行方を搜すことにしませう。」

「すると明後日頃には會へますね？」

「無論です。僕はきつと咲ちやんの芝居だらうと思ふんですよ。だから、今にもひよつくりと歸つて來るかもしれません。」

「それだと萬歲ですが——もう遲いからこれで失禮します。」

謎の手紙？

咲子の身投げは敵を欺く芝居だ——

レガリア金剛石はまだ敵の手には入つてゐない——

心の慾目かは知らぬが、その二つの推定が、何だか動かすことの出來ない確實性をもつてゐるやうな氣がせられて、今まで沈んでゐた敏夫の心は急に晴れやかに浮き立つて來た。そしてそれからそれと希望に充ちた幻想を追ひながら、やつと眠りついたのは、もう拂曉に近かつた。

騷々しい都會の躁音に目を醒されて時計を見ると午前九時過ぎ、慌てゝベットを飛び下りて顏を洗ふもそこ〳〵珈琲を飲みに階下へ行くと、帳場にゐた女主人さんが、

「おや！　もうお目覺め！　ちや、今の小僧さんを待たしとくと宜かつたのに。」と意外なことを云ふ。

「誰か訪ねて來たんですか、僕を？」敏夫が訊き返すと、

「えゝ、たつた今、あなたに會ひたいと云つて、何處かの給仕さんらしい少年が訪ねて來ましたのよ。だけど、わたし昨夜晩くまでお客さんがあつたから、今日はゆつくりお寢みだらうと思つて、ことわつて歸しましたのよ。」

「給仕つて幾歲ぐらゐの少年でした？」

「さうね、あれで十五六でせうかね。詰襟の服を着て、氣の利いた顏をしてゐましたよ。」

「名前は云ひませんでしたか？」

「わたし訊いたんだけど、また來ると云つて、そのまゝ行つてしまひましたわ。今に訪ねて來るでせう。」

女主人さんは何の興味もなささうに云つて、新聞を讀みだしたが、敏夫にはその少年が何者であるか氣にかゝつてならなかつた。

自分の知つてゐる少年——それも十四五の少年と云へば、田舍にゐる咲ちやんの弟か、それとも吉永といふ親友の弟ぐらゐのものである。しかし咲ちやんの弟が田舍から出て來る筈もないし、友達の弟が給仕になんぞなるわけもない。すると、一體誰だらう？

もしかすると、咲ちゃんの秘密の使者ではあるまいか。敵の看視が嚴しいために、自分で姿を見せることが出來ないため、誰か少年を賴んで使ひに寄越したのではあるまいか。それならば、少しも早く會つてみたい。

敏夫は少年のことが氣にかゝりながらも、帳場にある今朝の新聞を取上げて夕刊の記事のつゞきが出てはゐないかと、殘る隈なく捜してみたが、身投げ女の記事などは何處にも出てはゐなかつた。

「やつぱり咲ちゃんの芝居だ！」

敏夫は口の中で呟きながら、ふと顏を上げて表を見た。と同時に、彼は思はず「やア！」と、云つて立ち上つた。

店の前に、こつちを覗きこむやうにして立つてゐる少年の顏、何だか見たやうだと思つたも道理、それは惡漢の一味、守島夫人が宿つてゐた旭アパートメントの給仕水谷少年ではないか、少年の方では、もう敏夫と氣がついたか、

「笹井さんでせう、久時です。」と鳥打帽を脱りながら、店の中へ入つて來た。

「さつき來てくれたさうだね？」

「えゝ、ちよつとあなたに訊きたいことがあつたものですから……」

「訊きたいつて？　何んな？」

しかし、少年はもぢ／＼して、四邊をはゞかる樣子である。それと見た敏夫は、氣を利して自分から先に階段を踏んで二階の一室へ上り、少年に椅子をすゝめながら、

「水谷君、こゝなら大丈夫だ。一體、何んの用かね？」

水谷少年は服のボタンを外し、内かくしへ手を差し入れて何か取り出さうとしてゐたが、つとその手を止めて、

「變なことを訊ねますが、吉井咲子さんは、今、東京にいらつしやるんですか？」

唐突に意外なことを訊き出した。

「東京にゐないんだ。が、どうしてそんなことを訊くんだね？」

「ぢや、何處にゐるんです？」

「それが判らないんだ。實は十日前程、惡漢に連れ出されて何處へどうなつたか見當もつかんで困つてゐるところなんだ。君、何か咲ちゃんのことに就て聞き込んだことでもあるのかね？」

「いゝえ、何も聞きはしないんですが、變な手紙が僕のところへ舞ひ込んで來たのです。讀んで見ると、女文字で何だか謎のやうなことが書いてあつてよく解らないんですよ。ところが、手紙のおしまひに磯子とあるのです。いくら考へて見ても、僕はそんな名前の女に知合はないんですが、ふと思ひついたのは咲子さんが亡くなつた守島さんのところへ女中奉公に來てゐた時、磯子といふ假名を使つてゐたでせう。そこで、もしかすると咲子さんではないかと思つてこゝへ持つ

て來たんです。まア見て下さい。咲子さんにしては何だか合點のいかんことが書いてありますよ。」

水谷少年はさう云つて、內かくしから一通の封緘はがきを取り出した。見ると表面の宛名を書いた肉筆は、確に女文字に相違ないが、咲子の筆蹟とは似ても似つかぬ拙い字である。裏面は眞白。消印を見ると千葉とある。日附は前日の二十日の午後六時から八時、急いで中を開けると、表面と同じ拙い筆蹟で、

しばらく御ぶさたして居ます。お變りありませんか。御うかゞひ申します。わたしはその後稲毛へ來て、望水樓へ奉公してゐます。おひまがあつたら、橋向ふのロイドさんへよろしくお傳へ下さい。ちよとごぶさたのおわびまで申上げます。

磯子より

「變な手紙でせう。僕はいくら何でも吉井さんが、そんな拙い字を書く筈はないと思ふんですが。」

「うん、字は確に拙いがね。」

敏夫は何か考へるところがあるのか、言葉を濁してじつと手紙を見詰めてゐる。

「それから吉井さんなら、たつたそれだけのことを封緘はがきになんど書きはしませんよ。それに橋向ふのロイドなんて、何の事だか解らないぢやありませんか？」

「いや、橋向ふのロイドはは解つてゐるよ。」

「えゝ？　何のことですロイドつて？」

「僕のことさ。僕のロイド眼鏡を云つたんだよ。橋は數寄屋橋さ。ね左樣だらう。間違ひないんだ。水谷君、有り難う、これは咲ちやんが君の手をわづらはして、僕に送つて來た秘密通信なんだ。」

「だつて、それにしては——」

「いや、これで宜いんだ。咲ちやんも餘程考へたんだよ。直接、僕に寄越したんでは感づかれる心配があるし、それに現在自由に手紙を書くことが出來ないので、わざ〱こんな拙い文字で、途中で見つかつても意味の解らないやうなことを書いて來たんだ。」

「ぢや、吉井さんは悪漢のために監禁でもされてゐるんですか？」水谷少年が驚きの顏を上げて訊いた。

「さうだよ。もう十日も監禁されてゐるんだ。僕たちは一生懸命捜してゐたんだけど、何にも手懸りがなくて、もう殺されでもしたかと思つてゐたのだ。それがこの手紙で無事でゐることも、稲毛の望水樓に監禁されてゐることも判つたのだ。」

「さうでしたか。それでは手紙を持つて來て宜かつたなア。僕、今少しで破つて棄てるところだつたのです。」

「破つたら大變だつたんだ。それは左樣と、水谷君、君はあのアパートメントから四五日暇はもらへないかい？」

「もらへますよ。何とでも云つて――」

「さう、では、君一つ四五日暇をもらつて、僕を援けてくれないかね。咲ちやんを救ひ出すのに、僕一人ぢや少々具合が惡いんだ。第一、僕では惡漢たちに顏を知られてゐて彼等に近づくことも出來ないから、君が力を藉してくれると大いに助かるんだが。」

「僕で出來ることなら何でもしませう。僕は、そんな冒險は大好きです。それに吉井さんなら、よく知つてるんだから、頼まれないでも援けて上げたいんです。」

「よし、それでは夕方の五時頃までに暇をもらつて、僕のところへ來てくれたまへ。それまでに僕は作戰を考へておいて、君が來れば直ぐ出發するとしよう。」

怪自動車2480

その日の夕方、敏夫が水谷少年を伴うて、咲子救援のために兩國驛へ向けて出發した時、一方島田三千夫は從妹の百合子を捜すべく、今朝から三度目の足を日本橋の、三宅辯護士邸へ運ぶ途

中であつた。

たつた一縷の望みに希望をつないでゐた敏夫の方に、思ひもかけぬ幸運が見舞ひ、おまけに時にとつての有力な援助者さへ現れたに反し、三千夫の方は何といふ運の惡いことぞ。直ぐにも見附ると思つた手懸りが意外な結果を招來し、捜し求めるまでもない援助者は幾度訪ねても不在で會ふことが出來なかつた。世の中のことは凡て思ふにまかせぬものである。

手懸りは二千四百八十號の自動車である。その自動車さへ捜し出せば、百合子の行方はだんだん手繰り出されるわけである。

惡漢たちのことであれば、病院から隱れ家へ眞直ぐに百合子を連れ去つたのではないかも知れぬ。しかし一度途中で下したにしても、最初の自動車さへ見附れば、またそこに第二の手懸りがあらうといふもの。とにも角にも、第一なすべきことは、二千四百八十號の自動車の所有主を捜し出すこと。そして次には三宅辯護士を訪ねて、智惠を借りること。

三千夫は朝飯を濟ますと、身輕い背廣姿で三番丁の自宅を出て、直ぐ近くの麴町自動車商會へ立寄つた。始終そこの自動車に乘りつけてゐるので、顏馴染の運轉手も多く、自動車の番號を調べてもらうことなどは、雜作もないことであつた。

「二千四百八十番ですか、」タイヤの掃除をしてゐた運轉手は、直ぐポケツトから番號帳を取り出してページを繰りながら、

「それは京橋區木挽町二丁目桃井禎二といふ人の自動車です。」
「桃井禎二？　聞いたやうな名だが――すると貸自動車ではないんだね。」
「えゝ、貸自動車ではありませんよ。」

三千夫にはそれが先づ不審であつた。しかし番號に間違ひはないのだからと思つて、早速、そこから自動車に乘つて、木挽町へと急がせた。二丁目まで來ると、桃井といふ家は直ぐ分つた。本願寺の方へ入つてゆく大通りの左側に、誰の目にもつく木造洋館の建物がそれで、正面に立つまでもなく、それが病院であることは一目で判つた。

内科婦人科專門、醫學博士桃井禎二――自動車を降りて鐵門の柱にかゝつた大きい看板を見た時、三千夫はひどい失望を感じた。いくら何でも、堂々たる醫學博士が惡漢たちと關係があらうとは思はれない。これはきつと何かの間違ひだといふ氣がせられたのである。

でも、博士自身が知らない間に、博士の自動車を惡漢たちが利用するといふことはあり得ることである。折角、こゝまで來たのだから、念のため運轉手になりと訊ねるだけは訊ねてみよう。三千夫はさう思つて、病院の門を中に、博士の運轉手を捜してもらつて訊いてみると、その答へはまつたく意外千萬であつた。

主人の桃井博士は、所用で一昨日から大阪へ出張してゐるので、自動車はもう三日も車庫から出さないといふのである。

車庫から出ない自動車が街中を走る筈はない。運轉手の言葉に疑ひを抱いた三千夫は、更に受附について訊いてみると、博士が不在であることは事實で、自動車を使用しないことも間違ひないといふ。

それでは二千四百八十號の博士の自動車は、單獨で車庫を出て、京橋から牛込まで運轉なしで走つていつたのであらうか？　そんなことが有り得やう筈がない。それなら惡漢たちが勝手に車庫から博士の自動車を取り出して、内密で使用したのであらうか？

何にしても合點がゆかぬ。解き難い謎だ！　思案にくれて、再び自動車に乘つた三千夫は、運轉手に命じて日本橋の三宅辯護士邸へと廻つた。が、三宅氏は折惡しく早朝から出掛けて不在とのこと。

三千夫はがつかりして一と先づ、自宅へ歸つて來て、正午過ぎに三宅邸へ電話をかけたが、電話の故障で通じない。仕方がないので再び自動車を雇つて出掛けてみると、やつぱり不在でまだ歸つて來ないところを見ると、多分夕方になるであらうとの返事。そこで四時過ぎに三度自宅を出て、銀座で輕い晩飯をとり、電燈の點つた明い街をぶら／＼と歩きながら、三宅辯護士邸へ三度目の訪問に出かけたのである。

日本橋の通り三丁目、丸善の筋向ふの横丁を右へ入つて突き當ると、割合に靜かな廣い通りへ出る。その通りを左へものの一丁もいくとバラックではあるが、立派な門構へ。それが辯護士三

宅駿二氏の邸宅である。

三千夫は寂しい往來をとぼとぼと三宅氏の門前まで來ると、ちよつと足を止めて自分の裝服を直しながら、つかつかと門内に入つていかうとした。

と、その折も折、直ぐ背後で自動車の徐行して來る音がしたので、何氣なくつと振返つた。すると五六間後を一臺の自動車が、そろ〱ストツプでもしようとするかのやうに、速力をゆるめて徐に〱近づいて來る。

「三宅氏が歸つて來たのかしら？」

三千夫はさう思つて、一歩後へ引返してじつと自動車の近づくのを待つた。

一間二間、自動車はだん〱と門前に近くなつて來る。夕暗の中から、もう運轉手の顏も見えやうと云ふ時、どうしたことぞ、自動車は急に速力を出して、エンヂンの音を高く、三千夫の眼前をパツと矢のやうに走り過ぎた。

呆氣にとられた三千夫は、思はず目を瞠つて、その後を見送つた。と、ふと眼についたは赤い警戒燈の傍に黒地に白い2480の番號。三千夫は思はずアツと叫んだ。

No. 2480！ それは今朝から自分が血眼になつて、搜してゐる自動車ではないか。百合子を細田病院から誘拐し去つたその自動車なのだ！

三千夫は一散に驅け出した。人にぶつかることも知らずに夢中で後を追つかけた。しかし、全

速力で走つてゆく自動車に、どうして追ひつくことが出來ようぞ。狹い横町を息急き切つて、やつと大通りの四つ角へまで出た時には、自動車はもう夕暗の街上を通り魔のやうに消えてゐた。

「殘念だ！」三千夫は地團太を踏んで口惜しがつた。「こつちも自動車に乘つてゐたら、何處までも追かけてやるものを——」

何と云つても仕方のないこと。それが不運といふものである。三千夫は人通りの劇しい四つ角に、少時は呆然として立つてゐた。

その時、ふとある考が三千夫の頭に閃いた。折も折、そこへ通りかゝつた辻待自動車が、空車の札をかゝげてゐるのを見ると、彼はつと手を擧げて呼び止めながら、

「木挽町だ！ 大急ぎでやつてくれ！」

と叫ぶと一緒、自分から扉を開けて、飛び込んだ。

自動車は燈火のついた街を、まつしぐらに走つてゆく。銀座尾張町を左へ、歌舞伎座前を眞直に、桃井病院の前まで來ると、彼は自動車を停めて、病院を中に受附の前に立つた。

「院長さんはお歸りになりましたか？」

三千夫の發した第一の問ひはそれであつた。

「いゝえ。」何か書きものをしてゐた受附の男は、顏も上げずに答へた。「多分、明日でせう。」

「では、誰方か院長さんの自動車に乘つて、お出掛けになりましたか？」

「え、？　そんな筈はありませんよ。」

「でも、二千四百八十號の自動車を、僕、今日本橋で見たんです。」

「それは何かの間違ひでせう。」さう云つて、ふと顔を上げた受附子は「おや、あなたは今朝程も見えた方ですね。何か院長の自動車について用でもあるんですか？」

「二千四百八十號といふ自動車について、少し調べてゐるんです。では、こちらの自動車は、今朝からずつと車庫を出ないんですね？」

「あれは院長の自動車ですから、院長の不在は使ふ筈はありません。何なら行つてタイヤでも調べてみるがいゝでせう。間違ひですよ、きつと。第一、運轉手なんか正午過ぎから歸つてしまつて、こゝにゐないんですから、自動車が一人で動く筈もないでせう。」

さう言はれては一言もない。しかし、自分の見た眼にも誤りはない。さすれば2480號の自動車が、東京市内に二臺もあると見なければならぬが、そんなことのあるべき筈は斷じてない。

「甚だ厚釜しいやうですが、それではちよつと車庫を覗かしていたゞきます。」

調べるだけは調べてみないでは氣が濟まぬ。三千夫は受附子にことわつて、右の方にある車庫の前へ行つて、電燈のスウヰッチを捻りながら、タイヤへじつと目を止めた。すると拭ひとつたやうに泥の跡一つなく、それもきれいに乾き切つてゐるところを見ると、餘程前に洗ひ落したものらしい。

三千夫は受附にお詫びと一しよに禮を言つて、解きがたい謎に惱みながら桃井病院を外に出た。

自動車を買つた人

それから十分の後、三千夫は警視廳の交通課の一室で、若い警部補と會つてゐた。「それは怪しいですね。同じ番號の自動車が二臺もあるべき筈はないんですからね。」

「それで實はお訊ねに上つたのです。最初に見たといふ看護婦も確に二千四百八十號だつたといふし、僕が見たのもやつぱり二千四百八十號だつたのです。それで、直ぐ木挽町の桃井病院へ飛んでいつたんですが、病院の自動車は車庫に入つたまゝ使つた模樣がないのです。それに何型といふか知りませんが、車體から全で違ふんです。」

「不思議な話ですね、ちよつと待つて下さい。」

若い警部補はさう云つて起ち上ると、手をのばして隣のテーブルから自動車の番號帳を抜きとつて、パラ〳〵とページを繰つてゐたが、

「成程、二千四百八十號は木挽町二の十五桃井禎二となつてゐますね。これは間違ひつこないと――すると、怪しいナ……」

じいつと小首を傾げて考へ込んだ警部補は、突然何か思ひついたらしく、

「ハ、ア、それは事によると數字を見違へたんではないですか？　時々あることですが。」

「見間違へると言ひますと？」

「つまり3と8を讀み違へるんです。似てゐますからね。夕方や夜分なんかは、よく見間違へますよ。」

　いかにも！　それは氣がつかなかつたことである。確に8だつたとは思ふけれど、左樣言はれれば、或は3だつたかもわからない。夕暗の中のホンの一瞬間の觀察である。それが見間違へでなかつたと、どうして言ひ切ることが出來ようぞ！

「成程、さう仰有られると見間違つたかもしれません。しますと2130號の自動車の持主の名前は誰でせうか？」

「ページが違ひますから待つて下さい——」人のいゝ警部補はページを前に繰りながら「あゝ、貸自動車ですね。蓬萊自動車商會——麹町區飯田町三丁目七番地、棚橋喜助といふ名義になつてゐます。どうせ、小さい自動車屋でせう。餘り聞かない名ですから。」

　それだけ聞けば用はない。三千夫は再び自動車を飛して、九段に近い蓬萊自動車商會といふのを訪ねた。すると、警部補が云つたとほり、せい〳〵二臺位しか自動車の入らない車庫をもつた小さい自動車屋で、それも今は二臺とも出拂つて空の巢である。

　三千夫が自動車を停めて下り立つと、自分の自動車が歸つたとでも思つたのであらう。五十五六のでつぷり肥つた主人が、ひよいと中から顏を見せた。

「二千四百三十號といふのは、こちらの自動車だね？」

　三千夫がちよつと威嚴をつくつて訊いた。

「へえ、私の方のでしたが……」

「どうかしたと云ふのかね？」

「へえ、實は買ひ人があつて始末をしたんです。」

　年齡こそ若いが、相手の態度が何だか權柄づくで來るので主人は少々薄氣味惡くなつた樣子。三千夫には、そこが付け込みどころである。思ふ壺にはまつたのだ。

「賣り拂つたと？　まだ屆けが出てないではないか？」

「それが、實は一昨日の晩話が出來たばかりでして——」

「それで買手は何處の誰と云ふんだね？」

「市川町の東といふ方でした。」

「市川——稻毛の手前の市川かね？」

「はい。」

「東誰だと云つた？　番地は？」

「名前は市藏と云ふんで——番地は二百二十五番地で、電車を降りて海岸の方へ向いて一丁もゆくと直ぐ分ります。」

「東市藏といふのは、どんな男だね？」

「さア、四十前後のがつしりした方ですが、何處と云つて變つたところはありません。」

「その男と一しよに、左の眉根に大きい黒子のある男はゐなかつたかね？」

「存知ませんです。」

「いや、有り難う。それだけ聞けば澤山だ。お邪魔樣！」

三千夫は僞刑事の化の皮が剝げない中に、さつさと店を外に出て、急いで自動車に飛び乘ると、訝しさうに後を見送る主人の耳に聞えぬやうに、

「市川へやつてくれ！」と運轉手に向いて呼びかけた。

望水樓の偵察

三千夫が怪自動車の正體を摑まうと、東京の市内を駈け廻つてゐる時、敏夫と水谷少年は千葉行きの電車を、稻毛の停車場で下りて、暗い夜道を右へ、松林の中の小道を拔けて稻毛の町へ着いてゐた。

通りかゝつた人に、望水樓のことを訊くと、町端れに近い松林の中にある貸別莊だと敎へてくれた。望水樓の位置が分れば、次は自分たちの泊りこむべき宿屋である。

咲子が果してそこに監禁されてゐるか如何かを確めるのが第一の問題、事實監禁されてゐるな

れば、番人の目を避け、何等かの方法で咲子と聯絡をとつて、巧く救ひ出さねばならぬ。それまでには、早くて三日や四日はかゝらう。その間、二人が身を隱すべき場所の選定は、容易なやうで難かしい。

稻毛と云へば、海岸に沿うた狹い一本町である。戶數も高々知れたもの、宿屋らしい宿屋は僅に二三軒あるきり。それも海水浴で賑ふ夏場ならとも角、寂れ切つた秋も半ばの今頃その宿屋へ泊り込んでは直ぐにも人の注意を惹く。自分の姿を見せないで、敵の秘密を發くべき二人にとつては、それは決して得策でない。

「さて、何處へ宿をとつたものか？」

思案しながら、とぼ〳〵と歩いてゆくと、ふと眼についたのは「二階貸します」と書いて張つた貸間札。見ると田舍町には珍しい菓子商である。敏夫はつか〳〵と店の中へ入つていつた。交涉は極めて簡單。家人同樣の待遇で三度の食事附、向ふ十日間、二人で二十圓と話はきまつた。

部屋は海に向いた裏二階で、木戶があつて海岸へ直ぐ出られるし、眺望がよくて便利で、誂へ向きの部屋である。

「この近くに望水樓といふ別莊があるさうですね？」

内儀さんが、お茶を運んで來たのを幸ひ、敏夫は早速に問ひかけた。

「えゝ、こゝから二丁程いつた松原の中にございますよ。」

「望水樓といふと、何だか御馳走を喰べさしてくれる料理店のやうですね？」

「それが舊は料理店だつたんですが、こんな土地なので夏場より外、お客がないので、止めてしまつて、貸別莊にしたんですよ。それでも、家が廣いんですから滅多に借手はありませんのよ。」

「今もやつぱり空いてゐますか？」

「この間まで空いてゐましたが、一週間ほど前から、人が入つてをるやうですよ。」

「どんな人だか、知りませんか？」

「わたしは知りませんがね。御用聞きに行く小僧の話では、何でも耳の遠いお婆さんがゐるきりで、家の中はがらんとしてゐるといふことですよ。二階なんかも、雨戶を滅多に開けないやうですから、きつと東京のお金持の方が病人でもあつて一時借りたんでせう。」

「さうかもしれませんね。何といふ人です？」

「何とか云ひましたよ。珍しい苗字で……さう〳〵、東さんといふ方でした。」

「東さん？」

敏夫は、はてナ？　と心の中で考へた。耳の遠い婆さんがゐるといふ點、また雨戶を滅多に繰らぬといふこと――それだけでも、怪しいと睨むに十分である。新聞の記事から判斷して、逃げ出した咲子を途中で捕へて、こゝへ連れて來たものとすれば、借りうけた時日が、チト早過ぎるやうにも思はれるが、それもあらかじめ準備をしておいたものと考へれば何の不思議もないこと

である。たゞ東といふ名前だけは、この事件とは何の關係もない初めて聞く名前である。しかし、それも亦、惡漢たちが世間を誤魔化す假名とも考へられないことはない。

「それで、小僧さんが御用聞きに行つて、何にか註文があつたんですか？」

「さうですね。一昨日までは格別何にもなかつたんですが、一昨日の夕方から急に御用が殖えたやうですよ。」

一昨日の夕方から？　やつぱり左樣だ！　敏夫は傍の水谷少年と思はず顏を見合した。

「御用といふと、食料品ですか？」

「左樣ですね、パンとバタ――それに罐詰くらゐのものですけど、一昨日まで一斤づつだつたパンの御用が、急に三斤に殖えて、罐詰の御用なんども澤山あるんですよ。だから御病人か何か知らないけど、御人數が一人か二人殖えたんでございませうね……」

哀切「荒城の月」

「あの家ですね？」二つ並んだ黑い影の小さい方が、松林の彼方に點る燈火を指して囁いた。

「左樣らしいね。」大きい方が低聲で答へた。「もつと近くへ行つてみよう。足許に用心したまへ。」

二つの黑い影は、足音を偸みながら松林の中の砂利道を燈火の方を指して進んで行く。やがて二人は別莊の門前へ來た。門燈がない上に、そこは松原の影になつてゐて門札が何處にかゝつて